
ランスシリーズ二次創作

西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランスシリーズ二次創作

【Nコード】

N7909W

【作者名】

西

【あらすじ】

日本で生まれ育った山口良平^{やまぐち りょうへい}は、気づいたら見知らぬ洞窟にいた。見たこともないモンスターから逃げつつたどり着いた場所はカスタムという名の街で。親切な人マリアに案内されながら少しずつこの世界を理解していく。故郷へ帰ることはひとまず放置、まずは生きることを優先し、その後はせつかくだからこの世界を堪能し尽くそうと動き出す。

アリスソフト作のランスシリーズ世界に迷い込んでしまった主人公が、深刻そうに考えつつ適当に世の中を楽しむ作品です。

町中を歩いていたら、そこは見知らぬ洞窟だった。

「いや、意味がわからん」

あふれ出た思考に、思わず突っ込みを入れる。

薄暗い洞窟の中を右から左にぐるりと視線を巡らせるが、どれほど目をこらしても見えるのは岩肌ばかり。いや、本当はそれ以外の何かも見えているのだが。

「はにほー」

「ぎゅるるーりら」

訳の分からない鳴き声を上げる、訳の分からない生物たち。足の生えたイカが歩き回り、構造を可能な限り簡略化した土偶が飛び跳ね、背中にクジャクのような羽をはやしたマツチヨメンがポーズング。そんなカオス空間に佇む、自分は正気だと信じ続ける男が一人。

男はごく普通の高校生だった。山口良平という日本人として標準的な名前。黒目に黒髪と、とりたてて特徴ある容姿ではない。少なくとも、誰もが振り向くような美形ではない事は確かだ。学校は全寮制で、食堂の食事が不味いため自炊をしていた経験があり、そこそこの料理が得意であるとともに趣味でもある。あとは日本人として181cmとやや高めの身長であったり、少しばかりケンカが好きであったりと特徴はあるのだが。目の前の魔境的風景に比べれば、この程度無いも同然だろう。

口元を引きつらせながらその場を動かずに――単にどうすればいいかわからないだけだが――奇妙な生き物を観察する。

（これはない……よなあ）

一言で言ってしまうならば、それに尽きた。現実であるのにリアリティを可能な限り削ぎ落とした光景。まるでゲームか何かの世界に迷い込んでしまった気さえする。その荒唐無稽な考えを、良平は半ば肯定していた。

そもそもこんな不思議生物、地球に存在したらどれか一つくらい
ニユースかバラエティで取り上げられているはずだ。中身がないの
に生きて動く土偶など、生物学者の好奇心を刺激しないはずがない
と言つか、先ほどから土偶が人間にも理解できる言葉でしゃべって
いる気がする。

これは夢だと逃避するのは簡単だが、五感が捉える今はあまりに
も鮮明。自暴自棄になってもあまり楽しい未来が待っているとは思
えない。

（とりあえず隠れてやり過ごす。身の振り方は後から考えればいい）
可能な限りそつと動いて、暗い道の奥へと身を潜めようとしたの
だが、所詮は素人の動き。上手くいくわけもなく、蹴り飛ばした小
石がカツンと音をたてて転がった。

不思議生物の鳴き声が響いて特別静かでもなかった洞窟に、妙に
大きく響く音。不思議生物の視線が一つ、また一つと良平に集まっ
ていく。

緊張に体が固まる良平の頬に、一筋の汗が流れる。寄せられる視
線は、お世辞にも友好的だといえなかった。

「あー、会話つてのは大切だと思うんだ。友達にだってなれるかも
しれない」

「はにほー、見られた」

「どうする、ねえ、どうする」

「あいやー、どうする？ 殺しちゃう？」

（……ダメだ）

時間をかければ土偶もどきは煙に巻く事ができるかもしれない。
しかし他の不思議生物どもは、全く聞く耳を持っていない。

良平の判断は速かった。瞬間的に足の裏を強く蹴り飛ばし、元々
隠れるつもりであった洞窟の奥へと疾駆する。背後から聞こえる怒
号を無視し、体を闇の中へと滑らせた。

「はにほー、うそつきだ」

「いつちゃった」

「ぶつころせー」

とりあえず、また会う機会があつたら土偶もどきに謝ろうと思いつながら。生き延びることだけを願い走り続けた。

▼
▼
▼

山口良平がこの洞窟に迷い込んで、どれほどの時間がたっただろうか。服は薄汚れてぼろぼろに破け、全身を汗と泥と血で汚している。ろくに眠ることもできず常に敵襲を警戒し、常に薄暗く時間感覚を奪う洞窟内と言うことも相まって自分が休んだかどうかも臆気だ。髭の伸び方から考えればまだ1月たっていない筈だが、もう何年も閉じ込められている気さえする。

それでも生きてこれたのは、ひとえに武器を手に入れたからだ。良平は最初、それを大きなカイザーナックルか何かかと思っていた。無いよりはましだと装備しいざ戦いになると、それから薄い金色の刃が出てきたのだ。刃渡り1メートル以上と長く、刀身はナックルガード正面と下部15センチまで出現。プレートを僅かに弧を描くように抜き出したような、ひどく大ざっぱな剣。それを一対手に入っていたのだ。

外見は飾り気が全くなくシンプルそのもので、とても切れる武器に見えないのだが、左右ともに岩すら軽く真つ二つにするほどの切れ味を誇っていた。また武器を調べていけば、長さはナイフ程度から5メートルほどまで自在に変化できることも発見。飛び抜けた切れ味を持ち刃を損なうことが無く、おまけに出し入れ自由である。

一見役に立ちそうがなかったカイザーナックルもどきが命を助けたのだ、何が自分を助けるかわからないと、落ちているものはすべ

て拾っていく。幸いにも拾った不思議な袋にはいくらでも物が入り、さらに重さを感じないというえらくファンタジーな代物があつたため、持ち運びには苦労しなかった。

そうして運良く生きてこれたのだが、それもそろそろ限界だった。「食い……もの」

この洞窟内、水場にはそれほど困らなかったのだが、食料がほとんど存在しなかった。妙な生物はとも食べられるものではなく、なぜか宝箱に入っていたり不思議生物が落としていく骨付き肉やポテチ、わさびと茸でなんとか食いつないでいたのだがそれも尽きてしまい。最後に口に物を入れたのはずいぶん前で、すでに疲れと空腹で体が動かしにくくなっている。

いっその事、このまま死んでしまえば楽かもしれない。そう思い始めた頃、僅かに人の声が聞こえた。

最初は幻聴か、もしくは化け物が自分をだまそうとしているのではないかと疑っていたのだが。洞窟内に人工の強い明かりが差し込んでいるのを確認し、その時点でやっと人に会えると信じる事ができた。

「うーん、やっぱりここじゃもうろくな純度のヒララ鉱石がないわね」

つなぎを着た、めがねをかけた若い女性。久々に人間に会えた感動が、瞳からあふれそうになる。

「なあ！ そのあんた！」

「え……、きゃああー……！！」

そして声をかけ、すぐに絶叫が返ってくる。

良平は、自分の身なりを考えればその行為は正常な反応なのだろうと分かっていたが、ちょっとひどいんじゃないかと僅かに傷ついていた。

若い女性は叫び声を上げはするものの、即座に大砲らしき物を構える。その自然な反応と立て直しの早さは、良平の予想を遙かに超える手慣れた動きだった。危機感が脊髄を貫いた瞬間、考えるより

早く頭を伏せる。

大筒の僅かな発光と空気が抜けるような軽い音、そしてほぼ同時に背後で強烈な炸裂音響く。無数の小石と強烈な衝撃が背中をたたき、思わずつんのめり倒れそうになってしまった。

「うそ！？ 避けられ……」

「待った、待ってくれ！ 俺は人間だ！」

「次で……え？ あれ？」

青い髪の女性は、めがねの奥の瞳で薄汚れた良平を捉えた。大砲の照準を合わせて警戒はとかぬまま、薄汚れたそいつを上から下までまじまじと観察する。

理性的だった瞳がしだいに崩れ、しだいにわたわたと慌てだした。砲門が下に向けられたのを見ると、どうやら人類であるという点までは信じてもらえたらしい。先ほどまでの何かを品定めしている姿はかなり知的でクールな印象を与えていたが、今の仕草を見る限りかなりかわいいタイプの女性のようだ。

「うわ、ごめんなさい！ 私、てつきり……」

「いや、こんな格好で出てきた俺が悪いんだし。それより、頼みがあるんだ」

「え？ あ、うん。頼みって……」

青髪の女性の雰囲気、僅かに強ばる。砲門はいつでもあげられるように、腕を適度に緊張させていた。尤も、その警戒心も。

「出口、教えて下さい」

みすばらしい姿をした男の腰を90度曲げた見事な懇願に、再び崩れる事になるのだが。

結論から言ってしまう、出口はすぐそこだった。それこそ案内されて2時間としないうちに新鮮な空気を吸えたのだ。

「やべえ、空が超黄色い」

「もー……。どれだけダンジョンの中にこもってたの？」

「いやあ、全然分かんねー。寝れる時に寝て食える時に食うなんて生き方してたら、いつの間にか時間感覚がなくなってるさ」

「当たり前じゃない。あんまり危険な事はしちゃダメだよ」

めがねの女性、マリア・カスタードは一言で言えば善人であった。あからさまに怪しい男をいやな顔一つせず道案内し、おまけに近くの町までつれてってくれるという。良平でなくともこの出会いに感謝しようというものだ。

道すがらの会話も妙に弾んだ。と言っても、明らかに違う世界だと分かっているのにその話をする訳にもいかず、マリアの話をほぼ一方的に聞いているだけだったが。

「けどJAPANの話を聞けないのは残念ねー。ちょっと気になってただけど」

「ははは、悪いね。他の集落とすら交流のない田舎者だったからな、どんな話ならいいものか。だからこそ家を飛び出て大陸に渡って来たんだけどな」

山口良平という人間はJAPAN出身。マリア・カスタードにはそう説明していた。黒目黒髪にやや濃いめの肌の色からJAPAN人かと指摘されて、それを肯定したのだ。日本に酷似した文化を持つ国かここにも存在することに驚きながらも、身の上を騙るには悪くないように思えた。

とは言え、やはり多くを話せばぼろが出るのは当然。田舎も田舎ならばどこも大差は出てこないだろうと、そっちを出身にし何もない故郷に飽きて国を出た人間にしておいた。少し話を聞いた限りだと、どうやら文化の程度は最高でも江戸末期以前ほどらしく、文化的な話ならばごまかしもある程度有効だろうという考えもあつての事だが。

「それよりさ、これから行く街って俺の格好でも泊めてくれるホテルってある？」

「うーん、ちよっと……厳しいかなあ」

「だよなあ」

金銭については問題なかった。洞窟内を徘徊するモンスターを倒した際に、用途が分からず拾っていたGOLDが——信じられない

話だが——共通通貨なのだから。それがだめであっても、不思議な袋の中に売れそうな物がないわけではない。

問題は格好だ。全身黒く汚れており、服もまだ体に引っかかっているのが不思議なくらいぼろぼろ。浮浪者と言ってもだれも否定できない姿の人間を宿泊させるホテルがあると楽観する事はできなかった。

「しょうがないわね。少しでも私の家を貸してあげるから、そこで格好くらいなんとかしちやいなさい」

「いいの？ 自分で言うのもなんだけど、俺ってかなり怪しいぜ」
「しかたないじゃない。迷子を拾ってそのまま放置なんてできないわよ。それとも余計なお世話かしら？」

くすり、と悪戯っぽい笑みを浮かべて振り返るマリア・カスタード。その表情は似合わず、しかし魅力的で。いかがわしい考えなどすぐに消えてしまうだろうと思えた。

「いや、正直すごくありがたいよ。誘ってもらえなかったら本物の浮浪者になる所だった。素直にお世話になります」

「ふふ、よろしい。……あ、そろそろ見えてくるわね」

生い茂る草原を踏みしめて歩き、その地平線の向こう側から姿を見せる建築物の数々。やがて全容を表したそれは、良平が考えていたよりもはるかに近代的だった。

ドーム状の建物や、ビルのように四角く背が高いものも。およそファンタジックだと思っていた世界に似合わない街。しかし、いや、だからこそだろうか。その都市の姿には、人々の努力が窺えた。

この街が異世界人、山口良平が初めて踏み込む異世界の街。輝く瞳で見つめる良平を見ながら、マリア・カスタードは誇らしげに言った。

「ようこそ、大陸一の技術の街。カスタムへ！」

シャワーから降る熱い湯に身を任せ、久しく忘れていた心地よさを堪能した。体を擦れば、どこもかしこも垢がぼろぼろと落ちてくる。

良平がマリアの家に案内されてまずやらされた事は、服をもぎ取られ体を洗う事だった。マリアの行動は早く、良平を倉庫から入れるとすぐにぼろ切れを捨てるよう指示、風呂場に押し込めると衣服を買ってくるとだけ伝えてすぐに出かけていく。意見する間も与えぬ早業だ。

言われた物はしかたがない、と風呂場を極力汚さぬよう入りながら、良平は思案に耽った。

（やつぱりここは日本……と言いか地球じゃないよなあ）

頭皮の油汚れを指の腹でよく落としながら、無事に迷宮を脱出できて余裕が出てきた頭で考える。うし車やら、とにかく見たことがない生き物と似てるようで違う文化が乱立する世界。日本から出たことがないから外国の事を知らない、というレベルの話ではない。まあ、日本から瞬間移動して外国にいましたでも十分ファンタジーであるし、普通に流暢な日本語が街にあふれておいて日本じゃありませんもない。

ここが異世界だという前提でまず知らなければいけないのは、治安と倫理観の程度。あとはおおまかな社会情勢だろうか。どこかに泊まった時、町中を歩く時、街の外を歩く時にどれほど周囲を警戒すればいいのかの指針がほしい。もし予想より治安が悪かった場合は、最悪殺される事も考えられるからだ。世の中のこと、それも最低限である主要国家の名前と国家同士の関係くらいは把握しておきたい。これを知らないのは力毛を通り越してただの馬鹿であり、誰もがあきれるような馬鹿というのが今の山口良平である。

（最優先で調べておかないとな……なにしろ、もう帰れないかもし

れないんだし」

現状の自分を判断して、日本に帰れる可能性は極めて低いと判断していた。洞窟の中で一番最初に気づいた場所で、周囲に自分を連れてきた何かを探すのは真つ先に行っている。事情が落ち着いてから調べに行ってもいいかもしれないが、良平に同じ場所につく自信はなかったし、それ以上にもう一度調べて都合よく何かが発見できるとは思えない。

当然懐郷の念はあるのだが、それに引きずられてくよくよとしていれば確実に事態は悪くなるだろう。今後どう考えるかは置いておき、割り切る事は必要だ。

「着替え、ここに置いておくわね」

「ああ、すみません。何から何まで」

いつの間にか返ってきていたマリアに感謝を述べながら、隠していたナイフに手を伸ばす。このナイフは、ダンジョン内で拾った物だ。招かれた以上武装しっぱなしというのは失礼であるが、かと言っていきなり無防備になるもの怖い。だからこそメインで使っていた出し入れ自在の双剣を外に置き、こっそりとナイフを忍ばせていたのだが。それを想定していた使い方をせずに済み、密かに安堵した。

持ったナイフで、顔にたつぷり泡をつけて生え放題生やしていた髭を剃る。ばりばりと音を立てて剛毛が切り裂かれ、泡と一緒に排水溝に流れていく。あとは顔を軽く水で流してやると、多少やつれている物の見慣れた山口良平という人物が鏡に映された。身なりがしっかりしているというのは、少なからず相手を安心させるだろう。体に汚れがないのを確認し、風呂場を洗い流して脱衣所に出る。

服を着替えながら、外で言い争っているのに気がついた。一つはマリアのものであり、もう一つは若い女のもの。

（今出てったら邪魔になるか……。でもいつまでもここにいるのもな）

僅かばかり考えて、すぐに出て行くことにした。もし話の妨げに

なるようなら、席を外してしまえばいい。

倉庫に備え付けられた風呂場を出ると、声をかける前にマリアと言い争っていた女に睨み付けられる。あまりにストレートな感情をぶつけられ、良平は思わずたじろいだ。

「あんたがマリアが拾ってきたって男ね」

元から切れのいい瞳をさらにつり上げて、女が言う。込められる感情には、僅かならず敵意といらだちが含まれていた。

おっとりとしたかわいらしいタイプのマリアとは正反対の、鋭い美人を思わせる容姿と気性。緑色の髪は股下まで届くのではないかと云うほどの長さ。若草色のやや丈の短いワンピースを着て、その上から濃紺のコートを着用している。ブーツは太ももまで包むタイプであり、マリアの日本人から見て常識を逸しない格好とは違い、明らかに普通を離れた姿。これで左手で遊んでいるコートと同じ色の三角帽子を被れば、今すぐ童話の若い魔女として登場できるだろう。

「あんたには悪いんだけど、すぐにここから出て行って頂戴」

「ちよつと志津香！」

「いや、いいってマリア。俺もすぐに出てくつもりだったし」

若い女の家に入り込む素性不明の浮浪者にしか見えない男、これを心配しない方がおかしい。そんなお人好しの友人の要求は、当たり前すぎて腹も立たなかった。

あまりに簡単に引き下がったせいだろうか、女はきょとんとした顔を見せる。

「借りは……まあ今すぐは無理だけど近いうちに返すよ。世話になりっぱなしだったし、迷惑かけて悪かった」

「ほら、志津香……。悪い人じゃないわよ」

「うっ。悪かったわ、ちよつと気が立ってたから……八つ当たりして」

「あんたは正しいよ。俺だって知り合いが同じ事したら心配するさ」
ひらひらと手を振りながら断りを入れる良平。マリアは両者が諍

いを起こさなかったことにほっと息をついた。

「もー……、志津香ったら心配性なんだから」

「マリアがもう少し警戒心をもってくれてれば、私だってこんなに
お節介はしないわよ」

マリアが苦言を呈し女がそれに懔然とした顔で答える。一見争う
ような光景はしかし、二人の絆の深さを窺えた。

「私はこれから良平くんを案内しに行くけど、志津香はどうする？」
「ついていくわ。と言うわけでよろしくね。私の名前は魔想志津香
よ」

「ああ、俺は山口良平だ。こっちこそよろしく」

こうして、当初二人の予定だった外出に志津香が加わり、三人で
カスタムの街に出かけた。

良平は本当はすぐにでも宿屋に直行し眠りにつきたかったが、な
んとかぼろを出さないうちにいろいろな事を知っておきたいと考え
ていた。幸いにもシャワーを浴びたことで多少眠気と疲れがとれて
おり、案内の間程度はこらえられそうだ。

「あ、ちなみにあんた、お金どれだけ持ってるの？」

「これだけだな」

と言いながら、腰に釣っていた袋を開いて中を見せる。内部がど
ういう構造になっているのか、望んだものが一番上にくるようにな
っているのだ。

袋の口から大量のGOLDが見える。志津香はおおよその金額を
目測すると、へえ、と声を上げた。

「結構持つてるのね。これならしばらくは大丈夫だわ」

モンスターが落とすGOLD、これが共通通貨だとはマリアとの
話で予測していたものの、それがどれだけ価値があるかまでは分
からなかった。志津香からこれが少くない金だと分かり、当面の
生活保障にほっと一息つく良平。

志津香は予算を確認するとマリアに向き返り相談を始めた。

「どこを回るつもりなの？」

「んー、とりあえず宿屋と道具屋とレベル屋かな。あとはJAPANの人だから、図書館あたりは必要になって思ってるけど」

ぼろを出さぬようにと考えて早々、無知をさらす羽目になった。

聞こえてきたひどくゲーム的な単語に、口元を引きつらせながら質問する。

「あのさ、レベル屋って何？」

「えっ」

「え？」

マリアと志津香、二人して馬鹿を見る目で良平に視線を送る。それも仕方ないのだろうと良平は思っていた。

モンスターが当然のように跋扈する世界で、武器を持って戦うことを日々の糧にしていると思われる男。そいつた人間を案内するのに当然のように名前の挙がる店を知らないのだ。

恐ろしく気まずい沈黙が部屋を支配する。愛想笑いでごまかすことすらできない雰囲気だ。

「彼、大丈夫なの？」

「私が不安になった理由分かったでしょ……」

「はあ……それは道すがら説明してあげるわ。とりあえず行きましよう」

三角帽子を目深に被り、いかにも呆れたという仕草をする志津香。

「まあ、来たばかりだし。仕方ないよ良平くん」

マリアは良平を元気づけるようにしばしと肩をたたく。

ちなみに、良平はカスタムにくるまでの会話で世間知らずな所を隠しきれはすもなく、マリアにできの悪い弟のように見られるようになっていた。だからここそこまで親切にされているのだという自覚はあったが、見下ろすほどの身長差があるのに母性全開で接せられるのはどこか納得がいかない。

良平は荷物をすべて装備し二人に続いてマリアの家を、正確に言えばマリアの家に繋がった倉庫を出て行く。

「けど、あんたも無謀よね。今度からダンジョンに入る時はマッピ

ングして、ちゃんと自力で出られるようにしときなさいよ」

「あはは……良平くんももう大丈夫だね？」

「いや、それは俺も好き好んで入ったわけじゃないからなあ」

返ってきた答えに、マリアと志津香二人して疑問符を浮かべる。

自分で体験しても冗談でしかない話を、彼女たちにおどけた様子で答えた。

「いや、道ばたを歩いてたら、気づいたら洞窟の中にいた。嘘にしか聞こえない本当の話だ」

「トラップにひっかかったんだ」

「それはなんと云うか、運がなかったね」

平然とした声の回答に、良平は冷や汗を垂らした。よくある、とは言わないまでもまあある事らしい。改めて恐ろしい世界だと認識した瞬間だった。

などと話しながら、町中を歩いて行く。その間にレベル屋についても聞く事ができ、間接的にこの世の成り立ちについても知ることができた。

——この世界の人間には、いや、生物には例外なく才能限界と技能Lvというものが設定されている。そして、これを超えて成長する事は不可能だという。どれほど望んでも才能限界以上は成長できず、また技能Lvをもっていない職業では一流どころか二流になることすら難しいらしい。

良平はもたらされた情報に、どう反応すればいいか迷った。自分の限界を定められているという事に怒ればよかったのかもしれないが、ではそれが設定されていない元の世界で限界を突破するほどの能力を発揮していた人間など、数えるほどしかないだろう。そして、良平はその一握りの人間の中に入っていない。むしろ指針があると言ふ事に喜ぶ人間もいるだろう。なんとも反応に困る事実だった。

そして、レベルというのは自然に上がる事はなく、自分で上げる事もできない。その為、レベル屋という神に祈祷する職業がある。

ここに行けば、たまった経験値に応じてレベルを上げてくれると言
うのだ。完全にゲームである。

ちなみに、どうでもいい話であるがこの世界には神が普通に存在
するらしい。しかも荘厳な雰囲気を持つ存在ばかりではなく、望め
ば会話できる神もいるとか。

「いや、レベルアップするのはすごいな。体がやたら軽くなったわ」
「その様子だと本当にレベルアップした事がないみたいね」

「まあ、戦闘職にでも就かなければそうそう利用する事はないから、
知らなくてもしょうがないかな」

良平は倦怠感は抜けていないのにレベルアップ前より力の入る体
を、不思議な感覚で動かしていた。体験するまでは眉唾だと思っ
ていたが、こうわかりやすい形で結果が出てきてしまえば認めざるを
えない。

「あと、この紙を貰ったんだけど。これ何？ 何か大量に書いてあ
るけど」

出てき際に渡された紙を見ながら、二人に問うた。

「あ、それはサービスでスキルを書いといてくれるの」

「と言ってもそこに書いてあるスキルは全部レベル0のもののみだけ
だね。あってもそれほど差は出てこないけど、ないよりはマシだか
ら。何か仕事をする時に、特に希望するものがなかったらスキルがあ
るものから選んだりするわ」

「レベル1以上のスキルは、レベル神じゃないと分からないの。それ
でもある程度習得してからじゃないと分からないから、レベル0表
にない事をしようとするのは結構賭けになるわ。けどやってみたい
とスキルが埋もれたままになるかもしれないし、結構考えてやらない
といけないわね」

話に感心しながら、良平は自分のスキルに目を通していった。たし
かに、今紙に記載されているものは全部右側にLv0と書いてある。
己の可能性を信じて保証無き挑戦を続けるか、保証された《僅か
な才能》に頼って生きていくか。選択肢を広げているようで、精神

的なプレッシャーを強く与える技能Lv表はかなり意地の悪いものに感じた。それこそ神か何かが後ろに控えていて、悩み、苦悩し、潰れていく人間をあざ笑っていると言われても信じてしまいそうな程度には。

「才能限界つてのもこれじゃ分らないのか」

「それもレベル神に教えて貰うものね。まあ、冒険者やってて有力だつて思われれば担当レベル神がつくのはすぐよ」

「今すぐ知りたいんなら、私の担当レベル神に見て貰うこともできるけど、どうする？」

「いや、いいよ。そういうのは後のお楽しみにとっておく」

マリアのお誘いを断りながら、表を懐にしまった。不思議な袋の中に入れないのは、これにはダンジョンで拾った物など限られたものしか入れておけないためだ。

「そう。あと、すぐそこにあるのが道具屋ね。ダンジョンで拾った物とか、そこで売ることができるわ。あとは必要な道具を買ったり。そうね、冒険者の用事はたいていあそこで済ませられるわ」

特に気分を害した様子もなく、数件離れた店を指さすマリア。レベル屋より二回りは大きい店が、入り口から売り物をはみ出させてそこにあった。

用途のわからないものから、剣や槍などのいかにもなものまで。誰が見ても分かる荒くれ者御用達の店だ。そして意外な事に、店から結構な人数が出入りをしている。武器を必要とする人間がそれだけ多く、つまり街の外にはそれだけ脅威が多いのだろう。町中の治安の良さに目をくらませると、高い授業料を払う事になりかねない。「それと……あ、丁度いい所に来たわね。あそこの行列、あれがカスタム防衛隊よ。街近くのモンスターを撃退してるから、防衛隊が近くにいる時は邪魔しないように」

志津香の視線の先で、武装した部隊が行列をなして歩いて行く。剣や槍などを装備した戦士風の部隊、軽装の部隊、そしてマリアが持っている大砲のような物を持った部隊の三つがある。それは街の

備えに安心感を抱かせると同時に、モンスターの驚異も物語っていた。

行列が去って行くと、すぐ近くにあった図書館と宿屋を案内される。街の規模自体がそれほど大きくないのか、それとも冒険者はひとまとめにしてしまおうと関連の店を集めたのか、おそらくはその両方であろう。

宿屋で手早くチェックインと支払いを済ませ、外で待っていた二人に挨拶をする。

「マリア、世話見てくれてありがとうな。志津香も、案内してくれて助かったよ」

「あんたも気をつけてね。変なやつにひっかかるんじゃないわよ」

「良平くんもがんばって。何かあったらいつでも頼ってくれていいからね」

最後までお姉さんの雰囲気を出していたマリアに苦笑しながら、良平はぎしぎしと音の鳴る階段を上っていった。一階は酒場兼食事所のスペースらしく、部屋は二階からになっている。すでにカウンターの持ち運べる食事を受け取っており、夕方にさしかかった酒場の喧噪を感じながら部屋に籠もった。騒がしいのは嫌いではないが、疲れ切った体でゆっくり食事をとる気にはなれない。

荷物をテーブルの上に投げおき、スプリングの堅いベッドに体を投げ出す。たったそれだけで、意識を闇に持って行かれそうになった。なんとか眠気を堪えながら、体を起こして食事に口をつける。数日間ろくな物を食べてなかった胃は、大して上等ではない食事すらこの上ない美食として脳に信号を乱射していた。

ついでに、疲れが押し寄せて鈍り始めている脳で今後どうするかを考え初めて、急な乱入者に停止した。

「初めまして」

「うおお！」

何もない空間からぬっと姿を現すドレスを着た女性。驚きのあまり加えていたパンを離してしまい、お手玉のようにパンを弾きなが

ら掴む。なんとか埃のドレッシングをしてしまうことだけは避けられた事に安堵しながら、突然の訪問者に軽く避難の視線を浴びせた。「それで、あんたは俺に何か用事があるのか？」

「ええ、私はレベル神のウィリスです。この度、あなたの担当になったので挨拶にと」

神、という言葉に良平は一瞬惚けた顔をした。目の前の女性は、何もない所から現れたという事以外は普通の人間にしか見えなかったのだから。

「その、まあ……なんつーか。対応早いね」

「有力な方には担当がつく事になっていますので」

にこにこ微笑みながら淀みなく答えるウィリス。何度か繰り返した問答なのだろう。

「とりあえず、今回はレベルアップなしなので技能Lvの報告だけしていきますね。レベルアップできそうな時は呼んで下さい。それではまた」

ウィリスが白紙をそつとなでると、それが発光して文字が浮かび上がった。それを良平に手渡しし、用が済んだとばかりに来た時間様消えるように返ってしまう。

渡された紙を持ち、口にパンを咥えながら呆然とつぶやいた。

「神様、軽いなー」

この世界の人と神は、現代日本人の常識を遙かに超えて親密かつ友好的なようだ。

パンの残りを口に詰め込み、転がりながら渡された紙を見る。そして、良平は顔をしかめた。

（才能か……）

才能が発覚するという事は、本人にとってどれほどの幸せをもたらすのだろうか。どれほど願う未来があったとしても、才能がある、その事実にゆがめられてしまうかもしれない。

この世界で手っ取り早く食べて行くには冒険者しかないだろうと良平は理解していた。しかしそれは僅かならぬ危険をはらんでいる。

俺はモンスターを倒して生きていく、と覚悟を決めるに難しい。

戦わずに生きるのに身元不明というのは、さほど戸籍がしつかりしていなさそうなこの世界でも多大な苦勞があるだろう。そして、なによりも技能Lvというわかりやすい指針がある以上、技能を持たなければ雇ってもらえないという事すらあり得る。

逆に、技能がありさえすればどうだろうか。高い技能Lvを所持していれば、身元が怪しくても取り込む価値ありと考えられるのだろう。

（マリアが言っていたな。Lv1は一流の、Lv2は天才の、そしてLv3は伝説として語り継がれるほどの才能だと）

Lv1でさえ数が少なく、それを職として選んでしまうならば確実に幹部として迎えられる。それほど大きな比重を持っているからこそ周囲に、そして自分にも技能というものをただの目安で終わらせてはくれない。あるかどうかわからないという状態であればただ進む事もできただろう。もしくは、これほど切羽詰まっていなければもう少し猶予を持って選択できたかもしれない。

しかし異邦人山口良平に余裕などかけらもあるはずもなく。そして手に入れた道具、世界の環境、そして持ちうる技能までもが戦うことを強要していた。

剣戦闘Lv3。レベル神の記した紙に毅然と輝く伝説の二文字。

それを苦々しく見ながら、戦うことが一番だと理解しつつも何かに反抗するようにほかの道を模索して。

やがて眠りについた。

カスタムでもっとも荒らくれ者が集う場所である酒場。そこは今日も昨日までと変わらず、酒の匂いと喧噪であふれかえっていた。

とは言っても昼時を僅かに回った程度の時間では、酒杯を掲げる者は数えるほどしかない。大して美味くはないが量だけはやたらとある料理を、いかにも力仕事をしていますという雰囲気の人たちがかつ喰らう。とつとと食事を終えてこれからダンジョンに潜ろうという冒険者たちが、地図を開き相談の片手間に処理していたりも。そんな混沌とした場の中に、一人の男がいた。

大陸では珍しい黒目黒髪であり、赤を基調としたいかにも冒険者という服を着ている。見るからに筋肉が詰まっていると思われる腕は適度に引き締まり、しなやかさを失っていない機能的なそれだ。腰のベルトには道具を大量に収納できる袋と、背部に器具に固定された剣を装備していた。

とは言え、それを見て剣と断じてしまっていたのかは疑問が残る。その剣、握りが拳一つ半程度であり、それをナックルガードが包んでいた。しかし、あつて然るべき刀身部分がどう見ても存在しない。少なくとも外見だけで判断してしまえば、おもちゃと言われても反論できないだろう。

しかし、それを見て男を侮る人間はこの酒場にいない。確かに外見は弱くはなさそうではあるものの、他の筋骨隆々な客と比べてしまえば貧弱に見える。だが、腕がひとたび振るわれれば岩を寸断し、押し寄せるモンスターを細切れにできる事を誰もが知っていた。

その男こそ、およそ2月前からカスタムに住み始めた山口良平という異邦人である。最初の葛藤もののど元を過ぎてしまえばたやすく流れ、今や立派に冒険者を満喫中だ。

良平は結局、剣戦闘Lv3という才能の誘惑に魅せられてしまった。わかりやすく才能を提示されるというのは——それも天賦の才

が保証されているとなれば――恐ろしく抗いがたいものだ。風土や各国の国柄、モンスターなどを調べながら剣を振る内に嫌でも自覚できてしまったのだ、これが天職であると。

そして一度覚悟を決めてモンスターと戦ってしまえば、それがやめられないほど甘美なものに変化していくのを自覚する。剣を振るうのも、命を挟られそうな敵と戦うのも、そして勝利するのも全て楽しかったのだ。ケンカ好きなのは自覚しているつもりで良平であったが、戦闘狂の資質まであるとは思っていなかった。

自覚してしまえば後は躊躇など無く、幾度となくダンジョンに潜っていったのだ。当然、二度と迷わぬようにマップを記載しながら。今や誰もから一目置かれるようになった良平の席に、断りも入れずに座る女がいた。

「ひさしぶり。調子はどうかしら？」

「そこそこだよ。しかし、志津香がここまでくるのは珍しいな。何か用事か？」

初めて会った時の魔女服と比べれば幾分ラフな格好をした志津香。町中を歩くための簡単な格好であっても、彼女の鋭い美貌には僅かな陰りも見られない。

食事を続ける良平の前で、ウェイターに注文をしてから良平に向き返った。

「お酒の味を覚えたって聞いて、飲んだくれになってるかもって思ったけど、そうでもなくて安心したわ」

「そりゃな。酒は好きだけど、探索と戦闘はもっと好きだ。そつちの邪魔になるような呑み方はしないさ。それに、酒が一番美味しいのは一仕事終えた後だ」

何を言うかとはばかりにおどけてみせる良平。2ヶ月という時間は、生活と精神に余裕を持たせるのに十分だったようだ。

「あんたはそれでいいかもしれないけど、他の人間のことも少しは考えなさいよ。マリアったら『良平君がダメな子になっちゃったらどうしよう』なんて言ってるわよ」

「ははは、相変わらず保護者だな……。別に会ってなかった訳でもないじゃないか」

と、志津香はマリアを引き合いに出してからかつてはいるものの、良平を弟扱いしていると言う意味では大差なかった。

良平はカスタムで冒険をするにあたり基本的に一人か、マリアか志津香と組んでダンジョンに潜っている。と言うか、そうせざるをえなかった。

冒険者、と聞こえは良く言っているものの、中身は完全に無法者だ。急造でパーティーを組んだとしても信頼関係などあるはずもなく、むしろ積極的に他者を蹴落として自分だけ利益を得ようとする者も少なくなかった。それでも初期はレベルが低いため組まざるをえなかったのだが、やがてレベルが上がっていくと別の目で見られるようになる。

担当レベル神が付く程度には見込みが存在し、さらに高い戦闘系技能Lvを保有している。これは一緒にいればわざわざレベル屋で金を払ってレベルを上げて貰う必要がないと言うのもあるが、それ以上に高い戦闘能力を持っている奴にひつついて行けばお零れに預かれるからだ。いかにも欲深そうな奴が平身低頭寄ってきて、ついて行けばアイテムを掠めていくというのが平然と起こっていた。

大きな態度を取られないと邪険にし難いという日本人の短所を良平も例外なく持っており、どうやって自分から遠ざけようかと苦心していたのだが。いい加減我慢の限界が来そうになっていた時、助けに入ったのがマリアと志津香だった。カスタムの街の中で彼女たちの発言力はとても高いらしく、少しばかり話を通しただけでたかり屋が蜘蛛の子を散らすように逃げていった。二人に感謝を述べたが、前から目に余っていたから丁度よかったと言われたのだが。

（少なくとも、あのタイミングで動いてくれたのは俺のためだよな）
恩を感じる必要はないと言われたが、そう言われただけで恩を感じないわけがない。それ以来、元から上がらなかった頭がますます上がらなくなっていた。

「お酒の件を抜いたって、気を抜いちゃだめよ。あんたの技能はよくない輩を呼びやすいんだから」

「十分注意してるよ。最近じゃ潜る時は一人だしな」

もう耳にたこができるくらいされている注意を、やはり今日も志津香は繰り返す。マリアのように完全に弟扱いしている訳ではないが、やはり志津香も良平を庇護の対象とみている節が窺えた。

良平に発覚したもう一つの技能とは、レアドロップレベルというものだ。これは本当に出てくるアイテムが変化しているのか、それともなんとなくレアアイテムがある宝箱、モンスターを倒しているのか良平には分からない。しかし、現実として貴重なアイテムを手に入れやすいと言うのは、能力にたかるハイエナを集めやすいものだった。

この技能は知られば恐ろしく危険が高いというのは言うまでも無く、良平の他に知っているのはマリアと志津香しかない。

「いい？ あんたは態度が大きいやつには強いくせに、態度が低い奴相手だととたんに弱くなるんだから。頭が低くても図々しい奴は態度が大きいんだからね。断固とした態度を取らなきゃだめよ」

「分かってる、分かってるよ。あの時は俺が完全に悪かった」

両手を挙げて降参の意思を伝える。

志津香はいかにも納得していないという顔であったが、とりあえず矛先を納めたのか乗り出ししかかっていた体を椅子に沈めた。

180センチを超える長身で体格も良く威圧感を与える体でも、マリアと志津香からしてみれば年下であることには変わりない。情けなく世間知らずな第一印象に加えて、現代日本人らしくどこか押しに弱い性格。すでに大人として社会に出ていた彼女たちにとっては、図体がでかいだけの子供だったのだろう。

「だからと言って羽目を外しすぎても駄目だけど。お酒は控えめにして……あと絶対に美人と見たら飛びかかるような奴にはならないように！」

「いや、それは当然だけど……。妙に実感籠もってない？」

確実に言葉を通じて誰かの事を言っているのだろっ、志津香は自分の台詞の後にぶつぶつと愚痴をこぼしていた。

（これは……随分とまあ）

いつの間にか届いていた飲み物をあおる志津香を見ながら、台詞を通して見た誰かの事を考える。

魔想志津香という女性はその気性に反して、あからさまに人を貶したりはしない。もちろんよほど気に入らないと判断した相手やそうする事が必要な相手に躊躇などしないが、それとて面と向かってである。陰口と言うものを好んでいないのだ。その彼女が、本人がいない所で陰口をたたいている。

しかし、志津香の口から漏れ出る声に陰湿さが感じられなかった。まるで本人が目の前にいるかのような悪口の連続に、良平は内容と全く逆の印象を覚える。

（随分と《憎からず》思ってるんだな）

つまりは、そういう感情が漏れ出てるのだ。とはいえ気に入らない、というのも嘘ではないようで、実に複雑な思いを向けているように思える。実際の関係はどういうものなのか、それは良平には判断できぬことだ。しかし、少なくとも志津香自身があの相手には陰口を叩いても許されると思っている程度には関係が深いのだろっ。

なんとなく、その関係がほほえましいように思えて、良平はふつと笑みを漏らした。

「……何か随分と失礼な事を考えてない？」

「いいえ、滅相もない」

おどける良平に納得できず、志津香は三白眼で睨み続けた。だが、笑みを維持する余裕すらもってかわされる。

「まあいいわ、騙されてあげる」

鼻を鳴らしながらグラスをテーブルに叩きつけるように置く志津香。残っている氷がガラスを叩いて透き通る音が響く。

「それでさ、何か用があつたんじゃないの？」

「ああ、そうだった。雑談で終わるところだったわ。明日からちょ

つとマリアとダンジョンに潜ろうと思ってるんだけど、あんた空いてる？」

「今日これから潜ろうと思ってたんだけど……それなら明日にずらして合わせるよ」

「そうしてくれると助かるわ。やっぱり前衛がいるとぜんぜん違うから」

志津香も魔法Lv2に加えてレベルの高さから、並の傭兵や冒険者では役に立たないほど能力が高い。それでもモンスターの討伐やダンジョンに潜る時などはマリアと組んでるのだが、両者共に後衛なためあまり大胆に戦闘を行えていなかった。

そもそも、才能限界が高く技能Lvも2を持っているほど才能がある人物というのは、国家中枢で活躍することができるとある能力である。当然技能Lvは鍛えて発展させなければ意味が無いが、鍛えれば成長できると保証されている能力というのは重宝されて当然。少なくとも、一都市で同レベルの人間が何人も燦っていると思う方が間違いだ。

だから良平も二人によくダンジョンに誘われていた。そこには早くレベルを上げてやろうという親心もあっただろうが、だからと言って才能のない人間を手伝ってやるほど暇でも酔狂でもない。連携しつつ訓練を積んでいく内に、剣戦闘Lv3に相応しく飛び抜けた技量を発揮し始め、さらにレベルも上げた事で今では立派に前衛の役割を果たせるまでに成長していた。

「明日は何時にどこに集合すればいい？」

「7時、朝からね。場所は中央広場で」

その後も軽く打ち合わせるが、そこはなれたもので話し合いはすぐに終了した。

「じゃ、私は今日はこれで帰るから。明日遅れないように」

「待たせるような真似はしないよ。また明日」

去って行く志津香を見送って、姿が見えなくなると明日の準備について考える。今日持っていくはずだった荷物を明日に回せばいい

だけであり、あとは僅かな買い物だけで事足りた。

明日の朝まで時間ができた、と不意にできた余暇の使い方に思考を巡らせる。それほど長い時間があるわけでもなく、体調を万全にしておくならば寝るのも早くしておいた方がいい。娯楽に乏しいこの世界では、現代日本のサブカルチャーの飽食になれた良平には物足りない。

「……ちよつとくらいなら呑んでも平気かな」

そして、良平が娯楽の代わりに求めたのがアルコールであった。

最初はある種の現実逃避のために陶酔感を求めていたのだが、程なくして酒自体の魅力に浸かっていく自分を自覚していく。日本では年齢制限があったが、この世界にはそんなものなどなく、あつても無きに等しいものでしかない。誰も良平を止める人物はおらず、自身も止まるつもりなど毛頭なかった。

やがてただの酒からより美味しい酒へと求めるものがシフトしていき、今では量より質を求める似非グルメだ。やたらと酒杯を煽らないのもそれが影響しているし、やはり達成感を感じた後の酒は格別であったと言うのも理由の一つ。

「まあ、寝酒代わりに少しなら問題ないかな……」

控えめを胸に刻みつつ、酒を注文する良平。

もつとも、酔っ払いにそれがどれほど通用するかは分からなかったが。

三つのグラスが触れ合い、透き通る音を立てながら中の琥珀の液体を揺らめかせる。部屋の中にはうつすらとアルコール臭が漂い、此度の成功者達を祝福していた。

「レベルは上がったし、魔力UPアイテムも手に入ったし、本当に良平様々ね」

「もう、志津香ったら……。でも良平くんがいて助かるのは本当だ

よね。前だとモンスターに接近されないよう四苦八苦してたし」

「俺も後ろが安全なら結構大胆に攻められるし、そこはお互い様だよ」

ここはマリアの家、機械類の転がる倉庫を抜けた先にあるリビングだ。機械に惚れ込んでいる彼女らしく機能性重視の殺風景な部屋だったが、今日ばかりは藹々とした雰囲気と宴の勢いに華やいていいる。ダンジョンを共に攻略する事は数あれど、こうして宴会まで開くのは希であった。大抵はどこかで食事を取る程度で済ませていたし、マリアと志津香両者ともいくら良平が年下だと言っても男であると理解している。珍しくアルコールを取る時も、彼女達が信頼できる店に入っていたくらいだ。良平自身も彼女達に気を遣って、誘われない限り酒は飲まないようにしている。

「えへへへ……」

「うわ……志津香が出来上がってる」

「違うわよ。これよ、魔トマト。滅多に市場に出回らないアイテムがこうも簡単に手に入るんだもの、笑いの一つも出てくるわよ」

志津香が持ち上げたそれは、一見すると普通のトマトにしか見えない。しかしこれはれっきとしたダンジョン内で手に入れたアイテムである。

ステータスの基礎値を上昇するアイテムというのが恐ろしく貴重なのは、その価値を考えればすぐに分かるだろう。肉体、あるいは魔力の能力はレベルアップ以外ではまず上昇せず、それでも強くなるうとしたら持っている力を上手く使う以外に方法はない。基本的な能力値の上昇がレベルアップにて制限されている以上、あとはアイテム類で上昇させるしかないのだ。

装備品の中には特殊なものがあり、ステータスを加算するものもレアではあるが存在する。それらは当然外してしまえばステータスも元に戻ってしまうため、永続的に能力を高めてくれるアイテムは拾ったら即使うが基本なのだ。それでも何らかの理由で炙れたものだけが市場に出回るのだ。当然需要が高く供給が少ないそれは、一

一般人には目も眩むような高値で取引される。

「なんか良平くんを利用してみたいで、そういうのあんまり好きじゃないんだけどな……」

「んな、見ず知らずの人間ならともかくマリアや志津香相手にせいこと言わないよ。それで気に入らないなら口止め料って事にしとけばいいさ」

「マリアは気にしすぎなのよ。本人がいいって言うてるんだからいいじゃない。それに私だって最初は買い取るって事にしようとしたけどさ……」

「恩人から金取れるか。ちつとはこっちを立ててくれないと、いつまでも恩が返せないだろ」

つまみを啜えながら当然と言う良平に、マリアが眉をしかめる。

「も……、恩とかそういうのはいいのに。あ、珍しい鉱石が出た時はちゃんと貰ってるよ」

「そんなの本当にたまにでしかないじゃないか……」

謙虚、と言うよりも本心からそう思っていそうなマリアに頭を抱える良平。

手に入れたアイテムを整理する際、レアアイテムは全部手元にとっておいてはいるのだ。一人でダンジョンに潜った場合でも、魔力上昇系のアイテムは志津香に渡しているし、鉱石もマリアに渡している。しかし、レアドロップレベルという技能の限界なのか、それともアイテムという枠に入らないのか鉱石は滅多に手に入らない。

それでも他のレアアイテムや、もしくは他に何か無いかを聞いてもマリアは頑として首を立てに振らなかった。

マリアからしてみれば見返りのために人助けをしたみたいで嫌っているのだろうが、恩を受けた側からすれば返すものを受け取らないのは困る相手だと言わざるを得ない。

「あんたたち、その辺にしときなさい。せっかく楽しく呑んでるんだから」

仕方がない、と良平が肩をすくめればマリアが助かったと息を吐

く。

仕切り直しと志津香が杯を掲げれば、二人もそれに習いグラスを重ね合う。多少のすれ違いがあろうとも、いつも通りで済ませられる一幕でしかない。

場所が変わろうとも、三人の会話はいつもと大差ない。アルコールの勢いに押されてか、僅かに大胆ではあるもののそれも後になればただの笑い話。

やがてつまみは減っていき、空の瓶は増えていく。暗闇は完全に深まり、それに合わせるように口数も減っていった。

「ねえ、良平」

「ん？」

志津香の声に視線を向けるが、彼女は視線をグラスに向けたまま上げようとしなない。

「あんたさ、私たちに言う事があるんじゃない？」

ぴたり、と酒を注ぎ足そうとしていた手が止まる。数瞬出口を迷った酒瓶は、ついに注がれる先を見つけることなくテーブルに戻された。

喉を潤そうとグラスを傾けても、落ちてくるのは水滴のみ。舌を滑る寂しい感触に眉を落しながら、グラスを置く。

熱くなっていた頭が急速に冷えていき、崩していた姿勢を直して座った。良平の視界には、この数ヶ月世話になりっぱなしだった二人の顔が写る。口を動かし喉を震わせた、つもりだった。しかし、声が出ない。

「やっぱり、カスタムを出るつもりなんだね」

呟くマリアの台詞に、良平は目を見開いた。瞳の中に写る彼女達の僅かに悲しそうな表情が印象的だ。

「なんで……わかつちやうかな」

「良平くん結構わかりやすいもの」

「あんたかなり態度に出るタイプだからね。隠すつもりがあるならもうちょっと上手くやりなさいよ」

そうか、という言葉は音にもならず、心の中だけで反響する。

「別に、この街に不満があるとかじゃないんだ。むしろ皆にはよくしてもらってる。結構本気でさ、この街に住むのもいいかもしれないとも考えたよ。でもさ」

それでも、膨れあがる衝動は安全と保証という枠を遙か乗り越えて、飛び立ちたがってしまった。

あふれ出るモンスター達、世の中にはもっと強い個体がいるのではないだろうか。良平が矮小な常識で見たものなど話にならないモンスターが数多くいるに違いない。

魔法で成り立つ国、いったいどんな国だ。ヘルマン兵は屈強なものどもが数多くいるらしい。リーザスは大陸一裕福な国の文化はどう発展している。故郷にもっとも近いと思われるJAPANを見てみるのもいい。それだけじゃない、この世界はまだまだ広がっている。自由都市群すらカスタムしか知らないし、魔人領なんてもので存在しているのだ。

世界は広い。ついこの間迷い込んだばかりの小さな人間では、全く計り知れないほどの広大さ。元の世界でついに気づかなかったそれに、気づいてしまったのだ。

「旅を、したいんだ。もっといろんな所を見てみたい」

マリアと志津香が目を含ませて苦笑する。二人の瞳に宿っているのは、ある種の諦めと強い覚悟だった。

「やっぱり男の子なんだねー」

「まあ、こんな日がくるとは思ってたけど。予想よりは早かったのかな」

今までの喧噪が嘘のように静まりかえる部屋。窓の外の三日月が、別れの寂しさを和らげているようだった。

「いつ行くの？」

「明日には出て行くつもり」

「随分急じゃない」

「覚悟を決めたら行かないとき、ここに居着いちゃいそうぞ」

「それでいいじゃない、って言いたいんだけどなあ。そうも……いかないのよね」

いつの間にかアルコールがほとんど抜けていた三人は、その後会話もないまま解散していた。

どうやって部屋に帰ったかはあまり覚えていない。ただ気づいたら朝日が昇ってすぐの早朝だった。纏めてあった荷物を持って、店員も出ていない酒場に降りる。カウンターに部屋の鍵を置いておき、見納めになるであろうカスタムに来てからずっと世話になっていた店の看板を振り返る。

ほとんど人の歩いていない街を歩けば、街の出口にすぐ着く。

カスタムの街に来てから、良い事ばかりではなかった。むしろ苦労の連続であり、悩みに絶えず襲われていた。しかし、それは現代日本では味わえないものだ。

とてもいい街だ。それを心に刻んで外に踏み出ようとして……。

「遅い！」

よく知る人の声が、良平に突き刺さった。

「……え？」

「もう、どれだけ待ったと思ってるのよ！」

「あはは……志津香ったら。待ってたよ、良平くん」

「いや、なんで」

「ん、当然見送りに」

腕を組み眉尻を跳ね上げた志津香と、そのとなりの柔らかい笑みを浮かべているマリア。そのどちらも、良平がよく知るものだ。

「あんたは本当に分かりやすいわね。黙って出て行こうとするのなんてお見通しよ」

「これ、気休めでしかないけどお守り」

手渡されたそれは、胸元のポケットに入れておくには丁度良いサイズのものだった。それを反射的に受け取りながら、いまだ呆然としたままの良平。

しばらくして、やっと二人の思いを受け取る事ができた良平は、

涙を堪えながら姿勢を正した。

「マリアさん、志津香さん」

山口良平という人物のこの世界での始まり、それはマリアでありその後に志津香である。マリアがいなければ良平は死んでいたかもしれない、志津香がいなければ街に馴染めなかったかもしれない。二人に会えた奇跡こそが、こうして良平がわがままを言える理由そのもののものだ。

カスタムでの思い出、それはそのままマリアと志津香の思い出と言っても良い。少し人が良すぎる所があるけど、ちよつと素直じゃない所があるけど、二人は本当に姉のような存在だった。

全部分かっていてなおこうして見送りに来る彼女達。出て行く時間すら告げなかったのに、どれほどの時間を門の前で待っていてくれたのだろうか。最後まで甘えてしまったことを、今更自覚した。

ならば、最後にもう一度その甘えに乗ってしまおう。こうして、機会が与えられたのだから。

「今までずっと、ここに来てから助けてくれて、本当に……本当に、ありがとうございます！」

しっかりと頭を下げて礼をする。これほど真剣に感謝を告げたのは人生で初めてだった。

頭を下げた良平を止めようとマリアが動いたが、それを志津香が制して言う。

「ちゃんと受け取りなさい」

良平は頭を上げて踵を返す。力強く草を踏みしめながら。

「良平！」

背後から届く声に、最後に一度だけと振り返る。

「またね」

そこには、とても美しい笑顔をした二人が良平の行く道を祝福していた。

涙がこぼれそうになる。堪えることができたか、良平には分からなかった。二人の姉に、手を振って答える。

「ああ、また会おう」

その時浮かべた笑顔は、今まで生きてきた中で最高だと断言できるものだった。

眠気を誘う陽気に心地よくあたりを撫でる風。草木の踊る音と子供達の楽しそうな声だけが響くそこで、良平は体を横たえていた。

少し離れた場所では忙しそうに走る人々と、武器を振って鍛錬に余念の無い戦闘員達。彼らの活気は音として聞こえずとも、確かに体まで度といている。

このこれから大きく発展しようと動く小さな村のような光景を見て、いったい誰がレジスタンスの本拠地だと思うだろうか。少なくとも、良平はレジスタンスに加入してこのような光景を見るとは考えていなかった。

「にーちゃん、あそぼーよー！」

「ああ、悪い悪い。今行くよ」

横たえていた体を起こして、声を上げる子供の方に歩いて行く。

休暇の時は、大抵子供達につきあつて時間を潰していた。

「おっしや、それじゃあ何して遊ぶか？」

「おにごっこー」

「ちがうのー、おままごとするのー」

「なんだよ、そんなのやんねーよ」

「はいはいケンカしない。みんなで鬼ごっこして、その後おままごとな」

争いそうになる子供を制する、これも良平の役割の一つ。男女の区別無く十数人の子供が、それも孤児ばかりがあつまれば諍いの一つも起きようと言うものだ。

およそレジスタンスには似合わないであろう孤児院という施設は、少年兵として教育されるわけでもなく——もつとも、そんな真似をしていれば真つ先に良平が潰していたが——健やかに育てられている。アイスフリームに参加して当初、孤児院が普通に存在する事に面食らったものだ。

「にーちゃんつかまえた！」

「おう、捕まっちまったな。じゃあ今度は俺が鬼だ、そら逃げる逃げろ」

楽しそうに悲鳴を上げながら逃げていく子供達、その中には先ほどおままごとがしたいと言っていた子の姿もある。遊び初めてしまえばなんでも楽しく過ごせる、それがこの子供達の強みだと良平は思っていた。楽しそうな子供達を見ていると自分まで楽しくなってきたおり、良平は自分が子供好きだと改めて実感する。

「みんなー、おやつよー！」

孤児院の玄関から声を上げているのはキムチ・ドライブ、アイスフレームの重鎮の一人であり孤児院の責任者でもあった。

一斉に孤児院になだれ込む子供について行き、手を洗うよういながら中に上げていく。ばたばたと慌ただしくテールについてしまえば、あとは大人が手を出すまでもなく年長の子供が世話を見てくれる。微笑ましい光景を外から眺めていると、隣にキムチが寄ってきた。

「悪いわね、いつも面倒見て貰って」

「好きでやってる事さ。それに俺は特別面倒がないからな、これくらいしなきゃ給料分にならないよ」

「でも隊長なんでしょ。疲れてるんじゃない？」

「そ、ひとりぼっちの隊長さ。だから自分の面倒をみるだけでいい」
アイスフレーム内の作戦部隊は全部で9隊、そしてレッド隊以外の部隊は全て10人前後で編成されている。なぜ一人だけで隊を作っているかと言うと、これは単純に良平の戦闘に誰もついて行けなかったのだ。動く速度がどうのと些末な話はあるのだが、シンプルに言ってしまうレベルと技能について行けなかったというだけの話。いや、一人ついて行ける隊員はいたのだが、彼女、カオル・クインシー・神楽は戦闘以外もこなせる貴重な人材。戦闘しかできない良平につけておく訳にはいかなかった。

良平の主な任務は資金集めであり、あとは他の隊が戦闘を行う際

にヘルプで入るというもの。どれも体を酷使する決して楽な任務ではないが、能力的に飛び抜けている良平にはそれほど苦痛はない。

「子供達の面倒もいいけど、体はしっかり休めてちょうだいね。あなたが死んだら、あの子達が泣いちゃうわ」

「そんなへまはしないし、ちゃんと体も休めてるよ。それに、子供と遊んでると落ち着くんだ」

もう、とため息を一つ。そこには仕方がないな、と子供をいさめるような雰囲気がある。

（キムチにかかれば俺も子供か）

どこに行っても誰かから子供扱いされている事に苦笑するしかない。いくら独り立ちしたとは言え数ヶ月前までは現代日本で保護されながら生きていた身、そう易々としつかりした大人らしい雰囲気はつかないと言う事だろうか。

子供達がおやつを食べている間、キムチと和やかに世間話をしていく。途中説教が入りそうになるのを下手に交わし、それにごまかされるキムチに感謝しながら。

窓の内側を覗き、そろそろおやつが食べ終わるのを確認して迎えるに行こうとした時。孤児院に無遠慮に近づく複数の足音を確認した。良平は近づいてくる男達を確認すると、キムチに建物の中に入るよう指示する。

「でも……」

「いいから。あいつらは俺に用があるんだよ。知ってるでしょ？」
躊躇するキムチを無理矢理押し込みドアを締め、やってきた男の中心人物に視線を戻す。男は良平を忌々しそうに睨んだ。

「ふん、相変わらずふらふらと子供などと遊んで、暇そうな男だ」
「そうか？　けどいちいち俺に嫌みを言いに来る奴ほどじゃないと思うぜ。なあ、ムカードー」

返された言葉に、すぐに殺気立つムカードーとその取り巻きたち。腰の剣に手を添え今すぐにでも抜剣しそうであったが、それは良平の両手も剣に触れていることを認識しとどめさせた。覆しような

い実力の差、一応は理解しているようだ。

ムカーダーが強く舌打ちをし、それに心の中だけで深くため息をつく。

ホワイト隊隊長ムカーダー。ホワイトフレームーの過激派であり、同時に武闘派でもある。国をどうにかしなければいけないという感情が明らかに暴走しており、各隊長の中でも自分こそが一番だと主張してやまない。良平に絡むのは特別な話ではなく、自分に同意しない隊長全てに恫喝まがいの行為をしている。もしかしたら、ホワイトフレームは自分が率いるのが最良であるとすら思っているかもしれない。

「荒事はご免だぜ。近くには子供もいるんだ、血を見せたくない」

「ふん、子供か。いつまで慈善事業などに足をすくわれるつもりだ。貴様も、子供相手がしたければ余所へ行つてやるんだな！」

「そうだ、我々は輝かしい未来の為に活動しているのだ！」

「貴様のような奴が一つの生物として動くホワイト隊の動きを阻害している！」

挑発と持論を繰り返すムカーダーと、わめき立てるだけの取り巻きを聞き流しながらそつと孤児院に視線を向ける。子供達に不安が広がっているのを確認し、これが限界だと見切りをつけた。

「そろそろ帰つてくれないかな。俺も、あまり気の長い方じゃないんだ」

添えていただけの柄に、やわらかく指を絡める。同時に僅かにプレッシャーを与えて、いつでも抜剣できる事を理解させた。

ムカーダーはなんとか平静を装っているが、部下の二人はそうも行かず明らかに顔を青ざめている。良平の本気が伝わると、さすがに滑らかだった口も錆び付く。

「ふ、ふん！ こんな状態がいつまでも続くと思うな！」

捨て台詞を残して去るムカーダーに、早足でついて行く部下。姿が人の中に隠れてやつと威圧を弱め、疲れを押し流すようにため息を吐いた。

「お疲れなさい。……ありがとうね」

扉から顔を見せたキムチの言葉に、なんでもないと手を振る。

「面倒ごとに巻き込んだんだから、むしろこっちが謝らなきゃ駄目だよ。面倒に巻き込んで悪かった。今日はそろそろ行くよ」

話をすぐに切り上げて歩き出す良平。これ以上この場に居ては、子供達が怖がるだろう。

「もう、子供達が絡まれないように見ててくれるくせに……」

キムチの呟きには、聞こえないふりをしておいた。

道すがら合うアイスフレームのメンバーに挨拶をしながら部屋にたどり着く。初期からほとんど何も追加されていない殺風景な部屋、こだわったのは酒を置く場所と具合の良いソファーだけだ。

いつ呼び出しがあるか分からないため酒は控えなければならず、口元の寂しさをごまかすようにソファーに身を埋める。そして、先ほどの会話を思い出した。

ムカードーの物言いは確かに過激に過ぎるが、あながち間違いではないのだ。少なくともこのままでは未来はないという考えには、同意せざるを得ないだろう。アイスフレームという組織は、これだけの士気を保ちながらその実、死に体であつた。

アイスフレームに何があつたのかは、新参者の良平が知る所ではない。しかし、探求心がないだけでなく主体性すら怪しいリーダーのウルザ・プラナアイス。参謀でありながらリーダーに代わり方針を示さないダニエル・セフティ。組織の方針を勝手に論議し、自己主張を続ける隊長陣。個々の人材に光る者がいても、それを統括して上手く扱えなければ宝の持ち腐れだ。加えて、最近資金すら怪しくなってきた。このまま行けばアイスフレームは、空中分解を起こすか綻びから情報が漏れて警備隊に潰されるか。その二択になる可能性が高い。

（いざとなったら……子供達とキムチだけでも逃がさないとな。カスタムで、しばらくはマリアに迷惑かける事になるけど。金も技能があればなんとかなるかな。一番の問題は……やっぱり国を脱出す

るまでか)

アイスフレーム崩壊後の算段をつける。すでに破滅の足音が聞こえるまでに迫っており、移住計画もむしろ遅すぎるくらいだ。

面倒な事だ、思考を巡らせながら良平はアイスフレームに入隊した当初の事を回顧する。

魔法使いが覇権を握り、魔法の使えない者は奴隷以下として使役される魔法崇拝国家。それが大陸三大国の一つ、ゼス王国だった。魔法使いによる差別、それを知識では理解しつつも実態を知らなかった良平は、ゼスの中を歩くどころか奴隷として捕らえれそうになる。

魔法という言葉の響きに容易く釣られた自分を恨めしく思いながらも、逃げることはそれほど難しくない事実に感謝した。追っ手を撃退しつつ身を隠したはいいものの、今度は高度な魔法技術を見て回る事も、ダンジョンの情報を仕入れて探索するという目的もどちらも果たせそうになく途方に暮れてきた。

そんな時だ。アイスフレームから勧誘が来たのは。目的が失われ、なおかつ入隊規約も突飛なものでない事を確認し入隊を決意した。ダンジョンの情報を渡す代わりに入手アイテムがある程度納めるという条件が最後の一手だったのは言うまでもない。

入隊時点で飛び抜けた能力を持っていた良平は、他の隊員と足並みがそろわない事と契約時の特殊な条件のため、形ばかりの新部隊を与えられた。ある時はダンジョンで暴れ、ある時は仲間の救出に走り、ある時は孤児院でゆったりと過ごしながら。そうしてきた日々も、そろそろ限界だ。

実のところ、良平はアイスフレーム自体をそう嫌ってはいない。ウルザは気が弱すぎるが悪い子ではなく、ダニエルも無愛想が玉に瑕だが面倒見のいい老人だ。ダニエルの息子、アベルト・セフティも腹に一物ありそうなものの基本的には好青年である。そして、孤児院の子供達とキムチ。皆大切な仲間だと、良平は思っている。

続けばいいと思う日々、しかし終わりに近づく組織。良平にはそ

れを変えるだけの力はなく、またそれだけの意思もない。

（何か、アイスフレームが大きく動くような事があれば変わるのかね）

詮無い思考に脱出計画が飛び飛びになり頭の働が鈍くなってきた頃、いきなり部屋の扉を強力に叩かれた。

「隊長！ 良平隊長はいますか？ いたら返事をして下さい！」

「いるいる。そんなに何度も叩かなくなつて分かるって」

良平がかつたるそうに立ち上がりドアを開けると、そこには通信連絡などを請け負っている隊の隊員が、全身からうっすらと汗を流しながら立っていた。

外に出て初めて気付いたが、アイスフレームが俄にざわめきだっている。それだけ急を要する自体なのだろう。まだうっすらと霞のかかった頭を叩いて起こし、態度を改めて伝令に向き返った。

「んで、何が起きた？ 命令は？」

「はい！ 現在ブルー隊のアベルト隊長が琥珀の城の潜入任務を成功し、新たに二名勧誘しました。しかし、アジトに帰還する際モンスターに発見され攻撃を受けています。このままではアベルト隊長以下二名の命が危険であり、仮に逃げ切れてもアジトを発見される可能性が非常に高いとの事です。良平隊長は速やかに現場に急行し、アベルト隊長達の逃走の援護及びモンスターの殲滅を行って下さい！」

「命令確かに承りました。すぐ行くってウルザに……いや、爺さん、ダニエルの事ね、に伝えといて」

伝令兵が何かを言うより早く、体を手でどけて道を空けさせた。

琥珀の城から戻ってきたと言うことは、どういうルートで戻ってくるかも決まっている。方向さえ分かればモンスターの集団を見落とすはずはない。

体を思い切りたわませて力を極限まで貯めて、腰から剣を取り出し刃を出さずにだらんと垂れ下げる。背後から不安げな気配がするが、それはすでに良平には関係のない事だ。前のめりに体が倒れて

いき一定を超えた瞬間、全身が周囲の空気ごと爆ぜた。

一瞬だけ視界が針の先ほどまで閉じて、回復した頃には周囲のどの建物よりも高く飛び上がっている。人間離れた脚力によって生み出された推力はそれでも収まる事を知らず、さらに上へ前へと進軍。飛翔する良平の下ではアイスフレームのメンバーが必死になつて対モンスター用の柵を作っているのが見えた。

これがこの乱暴で慈悲の存在しない世界に流れ着いて、ひたすら戦闘を繰り返していた良平の力だった。恵まれた肉体的資源に加えて身体運用の効率化を模索してきた者の実力。それはオリンピックという次元をとうに踏み越えて、今やアイスフレームの現役戦闘員の中で最強を誇る。

高度が頂点に達した時点で、進行方向やや右よりの位置に広がる砂煙を発見。その先頭部分にアベルト達がいるのだと確信した。

人が軽く挽肉になる高さからの落下にも関わらず、両足だけで強烈な落下エネルギーを相殺しきる。両足が軽く地面にめり込んだ事実も気にせず、衝撃を和らげるために畳んだ膝を再びバネに。今度は空を飛ぶのではなく、地を這うように前に向けて膨大なエネルギーを解放した。

刹那の瞬間に迫る木や岩などの障害の数々を、圧倒的な動体視力が余裕を持つて捉え軽く足を動かすだけで避けていく。最短でたどり着くために道なき道を走り、耳元で風圧に煽られた木から強烈な音が届いている。レベルアップの恩恵は身体能力の上昇だけに止まらず、反応速度や動体視力などまで上昇させていた。

全力疾走を続けてどれほどか、耳鳴りに似た風の音の他に無数の足が大地を踏み荒らす音が聞こえてくる。続いて届く、怒号の数々。腕に熱がたまっていくのが分かる。戦闘が起きる寸前はいつもこうだった。まるで早く戦いたがっているようであり、それを良平の理性も否定できない。それに呼応するように、双剣から僅かに刃が現れた。

瞳を細めれば、木々の隙間から立ち上る土埃の壁。その先頭に立

つ、豆粒のような影が三つ。

（あれか）

高速回転する脳が、豆粒を援護対象であると予測した。一人は緑色の服と鎧を着た戦士風の男。一人はゼスでもスタンダードな二級市民の奴隷戦士。そして最後の一人は銀髪の伊達男、間違いなくブルー隊隊長のアベルト・セフティだ。

確認した瞬間、良平は体を大きく弾けさせ、空中に身を投げ出す。丁度人を飛び越える程度の高さに体を調整し、モンスターの群れにまっすぐ突っ込むように。

今まで存在しなかった刃が１メートルほどまで伸びて、それを体に隠すように全身を捻り力を蓄える。右肩越しに見えるモンスター達に、自然と舌なめずりをしてしまう。

高速で飛来する体が三人を飛び越えた瞬間、なぜか緑の男と目が合った気がした。なぜその男が気になったのかは分からない。しかし、緑の男は良平の中の何かを予感させてやまなかった。

気を取り直して、右腕の筋肉を内部で爆裂させる。モンスターはまだ反応していない。

つい先ほどまで考えていたアイスフレーム変改、それを成すのが良平の直感を刺激した緑の男だとは未だ知らずに、疾駆する刃を敵に叩きつけた。

▼ ▼ ▼

押し寄せるモンスターの群れに、飛び交う無数の攻撃。見える範囲だけでも数十はいるにも関わらず、それに対抗する人間は僅かに三人のみであった。

全力で後退しつつ追い付くモンスターには容赦なく剣を振るい、なんとか逃げてきたがそれが限界に近いのは、本人達が一番理解していた。三人の内二人は体力が限界に近かったし、残った一人も体力はあれど武器が崩壊寸前だ。

「ええい、うつとうしいわ！　ランスアタック！　っ、おい、アベルト！　アジトはまだなのか！」

「もう少しなんですけどね……僕的にはこれをアジトまで連れて行くのはあまり賛成できないんですけど」

「うるさい馬鹿たれ！　そんな事言ってる場合かー！」

「ひいひい……。ランス様、死にそうだすよお……」

「んな事言ってる暇があったらモンスターをぶっ殺せ、そして俺様の盾になってから死ね！」

絶叫しながらも剣でモンスターを粉砕する緑の男、ランスは動きの鈍っている二人とは一線を画した強烈な一撃を繰り出す。しかし、強力な動きが続けられると言ってもそれはあくまでランス本人の話。武器の限界は刻一刻と迫っており、ロングソードの金属疲労が無視できないレベルなのを確認すると、ランスは密かに冷や汗を垂らした。

ランスと共に戦う二人、アベルト・セフティと奴隷戦士の格好をした男、ロッキー・バンクは体に無数の傷を作っている。持久戦では戦士としての能力がランスに劣るのをごまかし切れず、体を血に染めてふらつかせながら堪えていた。

そう遠くない限界を見せる二人に、密かに舌打ちするランス。彼自身のダメージとて戦闘継続に致命的なレベルではないものの、確実に蓄積しているのだ。この上でどちらかに倒れられれば、僅かに保たれていた均衡が破られるのは一瞬だろう。

まだ世界中の美女を抱いてもおらず、第一彼の奴隷であるシル・ブラインすら取り返していない。ここで死ぬつもりは毛頭なかった。「ええい、きさまらと死ぬなどごめんだぞ！　何か助かる方法はないのか！」

「うーん、ここまで近くなつてれば……おっと！ 向こうも気付いてるだろうし、援軍が派遣されてると思うんですけどね」

「そんなもんが間に合うか！ 他にはー！ 何かないのかー！」

「いえ、案外そうでもないんですけどね。……っ、あ、本格的にマズいかも……」

「アベルトさん、大丈夫ですか？ っあう！」

「ロッキー、余計な動きをするな！ 敵にだけ集中している！」

ふらつく二人を無視して、寄ってくるモンスターに剣を叩きつける。岩型のモンスターはただの一撃で碎けるが、同時に長剣の刃の一部までもが弾け飛んだ。スローで飛ぶ鋼の欠片を目で追いながら、背後から忍び寄る死の危険に背中がざわめく。剣が折れてしまえば、あとは一か八かで全力疾走をするしか手はない。それで逃げ切れなかったからこそ応戦を繰り返して後退をしているのだ、成功率は限りなく低い。

いよいよか。覚悟と共に最後の必殺攻撃を決めようとした瞬間、それは訪れた。

「あ、援軍が到着した」

「なに？」

早すぎる、そう口に出す前に体を暴風が包んだ。咄嗟に身を屈めて発信源らしき上を見る、そこでは丁度赤い塊が通過しようとしていた。それが人であると気付いたのは、突風がモンスターに接触する寸前の事であった。

赤い服の男が左腰に溜めていた右腕を振るう。それは、ランスの目を持つてしても肘から先が消失しているようにしか見えなかった。薄い金色の光跡が、辛うじて剣が何度も振るわれたのだと教えている。超高速で走る刃は接触した対象に止まらず、幾筋にも分かれてうねり、モンスターと言わず障害物と言わず駆け抜ける。

そして、それが通った道筋は。一つの例外もなくばらばらに切り刻まれて崩れ落ちた。

地面をめぐり返しながら右足で急ブレーキをかける赤い男。体が

止まると同時に左足で大地を蹴り、右足を軸に思い切り体を回転させて投球するように光刃を残し乱飛翔する斬撃、一撃目に耐えたモンスターも二発目には耐えられず血の霧を吹き上げながら地に落ちる。

二発の先制を終えた男は一瞬にして血の海になった場で、一對の鉄板を貼り付けたような剣を構えた。

「ちつす、援護あがりました。ここは請け負うから離脱してくださいな」

「援軍ありがとうございます。けど、僕達は戦わなくていいんですか？」

おどけた様子の赤い男に、なんとか立っているだけのアベルトが答えた。赤い男は後ろ目で三人を確認すると、すぐに視線を戻す。

「無理すんなアベルト。お前死にかけじゃないか。それに、俺は一对多が得意なんだ、知ってるだろ？ おとなしく帰ってとっと治療受ける」

「あー……正直そう言ってもらえてありがたいですよ。言っといてなんですけど限界で……」

手を払い早く行けと合図した赤い男は、次の瞬間体を疾風と化し目にもとまらぬ早さでモンスターの群れに侵略した。そして、その内部で弾ける血霧の壁。

いくら雑魚モンスターの群れとは言え、多勢に無勢なれば苦戦は必須。にも関わらず一方的な戦闘を展開しているとすれば、それは相性がいいの一言で片付けられる話ではない。

「お、おらたち助かったか……？」

斧を杖代わりにして、なんとか立っているだけのロッキーが巻き上がる粉塵と血を見ながら問うた。

「ええ、もう大丈夫ですよ。いやー、しかし本当に危ないところでしたね」

「なにが危ないところでしたね、だ馬鹿たれ！ きさまがこの道は安全だと言っただろうが！」

「えー……ランスさんが道を外れて歩いて、モンスターを連れてきたんじゃないですか」

「うぐっ……ちょ、ちょっと道を外れただけでモンスターがわんさかいるとは普通は思わんわ！」

ランスは反論こそするものの、少なからず自分がわるいと思っているのかすぐに目をそらした。確かに安全と思われていた道の近くにモンスターの集団がいるというのは疑問に思うが、それも道を外れなければ何もなかったのは事実だ。

目をそらした先には、先ほどから血飛沫が上がりぱなしの戦場がある。見た限りではもうモンスターはほとんど残っていない。確かにランス達三人でモンスターの半数を討ち取ってはいたが、それにしたって異常な殲滅速度だ。

「はあー……むちゃくちゃ強いひとだすなあ。あんなに苦労したのに、もうほとんど残ってないだ」

「ふん、まあ俺様の次くらいに強いのは認めてやる。しかし、あいつは何者なんだ？」

「さあ？ 勧誘したらついてきてくれただけですし、出身はJAPANだつて事以外はぜんぜん。ああ、少し前までは自由都市にいたらしいですよ」

「それで何を分かれと言うのだ。まあ、美女でもないしどうでもいいか」

森にざわめく音が収まり、すたんと着地する赤い男。その体は傷一つなく、またモンスターの血すらほとんど浴びていない。持っていた双剣の刀身部分がふっと消えて、柄とナックルガードだけが残る。それを背後の固定具にがちんとはめ込んで、ランス達三人の方に歩いて来た。

男の背後には、モンスターの肉片に混ざって木や岩のブロックが一面に転がっている。その上に鮮血のソースが降りかかり、見るも悲惨な虐殺現場と化していた。

「ひiiiiiiii……ポマードポマードポマード！」

「ポマード？　なんだそりゃ」

必死で唱えるロツキーを横目で見る男には、少なくとも表面的には疲れすら見えない。

「はいよ、終わったけど……待っててくれたのか？」

「いやあ、それが。実は動くのもキツくて。世色癌か何か持ってますん？」

「あー、悪い、持ち合わせはないわ」

「なんだ、使えん奴だな」

「ラ、ランス様、助けて貰ったのにそんな事言っちゃわるいだよ！」
うるさい、と言いながらロツキーを殴るランス。赤い男はランスの物言いに気にした風はなく、苦笑しながら答えた。

「すまんね、話を聞いて直行で来たんだ。そのうち救護班がくるだろうから、それまで我慢してくれ」

「うむ、まあ俺は心が広いからな。それで許してやろう、がはははは」

「すみませんだ………なんと言つか、その、ランス様は悪い人じゃないけど……」

「分かってる分かってる、気にしちゃいないよ。ストレートで気持ちいいじゃないか」

「なぜきさまが謝るんだー！」

再びなぐりかかるランスに、悲鳴を上げながら頭を抱えるロツキー。赤い男はそれを見て、くくくつと笑った。

「ああ、そう言えば、助けて貰ったのにお礼も言わず怖がつてすみませんだす……」

「気にするなよ、これからは仲間なんだからな」

「ほえー………ランス様、すごいいい人だすよ」

「知らん」

今まで息を整えていたアベルトが剣を納めて戻ってきた。手には止血効果を持つらしき草をもっており、その半分をロツキーに渡す。それで体力が回復するわけでもないのだが、とりあえず出血で体

力の低下は防げる。ロッキーは草をすりつぶし、それでランスを止血した跡に自分に塗り込んでいった。

「すみません、紹介が遅れましたね。こっちは人はレッド隊の隊長、山口良平さんです。今のアイスフレームじゃ一番強い人で、主に資金調達と戦闘作戦時のヘルプをしています」

「まあ、隊って言っても俺一人しかいないけどな。これから仲間になるんだ、よろしく」

「はい。おらはロッキー・バンクだす。それで、こちらはおらのご主人様のランス様だす」

「いやだ。美女ならともかく男とよろしくなぞせん」

「あはははは！ 本当に分かりやすい奴だな！ まあ俺は戦闘しかできないけど、力が必要になった時は言ってくれ」

「うむ、がんばって俺様の盾になるがいい」

「いいね、その歯に衣着せないところ。まあその時は困くらい勤めさせて貰うよ」

などと挨拶をしている内に、森の中が騒がしくなってくる。残りの救援部隊がやっと追い付いたのだ。

剣を持った部隊は偵察の為に周囲に散り、残りの救護班がランス達の治療を始めた。もっとも、ランスは自分を治療する女を指示していたが。

治療を終えたランス達は、良平の護衛の下アイスフレームの本拠地に入っていくのだった。

ランスという希代の英雄にして鬼畜な男がレジスタンスに加入する、これがアイスフレームを、ひいてはゼス王国を巻き込み大きく時代が動くとは、この時誰も予想していなかった。

救出任務を無事終えた良平は、追加の護衛と言う名の無駄話をしながらアイスフリームへと帰ってきた。行きがけに見た対モンスタ―用の障害物は、通るのに邪魔になる場所のみを撤去し、残りは設置したままにするようだ。背が高く物々しい岩肌の壁は、外敵の脅威が与える恐怖を和らげてくれる。

敷地内に入ると、道すがらの治療で大分体力回復したアベルトが、ランスとロツキーを連れて司令部へと歩いて行った。浅い傷ばかりで致命傷がなかったとはいえ、体力を消耗したのは本当なのだ。この後はすぐに休むことになるだろう。

肩と太ももに溜まる疲労特有の違和感を感じ、首に手を添えて回す。いくらレベルを上げても、生物である以上疲れと無縁ではいられない。

何かの任務に随従するにしても、ダンジョンに潜りに行くにしても、今日の残留物を明日に残すのは上手い手ではない。戦闘任務ならばともかく、ダンジョンに潜る時はいつも死ぬ寸前まで無茶をするのが山口良平という人物だ。体の違和感を引きずって死ぬのは馬鹿馬鹿しい。

とつとと部屋に帰って休もう、そう考えて歩き出すが、背後から細かい声が聞こえた。

「あのう」

振り向く先に居たのは救護班の一人だ。もじもじと、言いにくそうにしている。

「今日出勤した人員の中で隊長は良平隊長とアベルト隊長だけでですね。他は班長しかいないので……その……報告書を」

「俺今日非番だから」

さっと目を反らし歩き出す良平。しかし、救護班長を代表とした数人の班長はそれでも食い下がった。

「そんなー！ でも正式な命令を」

「生憎口頭でしか受けてないね」

背後から上がる複数の悲鳴を、心地よい音楽のように聞きながら去って行く。その胸裏には、普段面倒な報告書を書き続けている自分の苦勞を思い知れという感情が少なからずあるかもしれない。

あくびをしながら歩いて行くと、剣を振り回して檄を入れている人物を見かけた。

銀色のフルプレート鎧からフェイスガードを取り払った格好をした、いかにも騎士という風体の女だ。女性にしては身長が高めだが、だからこそ細すぎる体が目立つ。手にした細剣で指示を飛ばしながら、効率的に建築を進めていた。

目が眩むほどの、とは言わないがよく見ればかなり美形である彼女を見て、良平は眉を潜めた。できる限り足を潜めて、気付かれないうちその場を離脱しようとしたのだが。

「む、そこにいるのは良平か。丁度よかった」

心得た、とばかりの顔で寄ってくる女に、良平は顔を思い切り引きつらせる。はつきりと言ってしまえば、苦手な相手だった。

全身鎧に身を包みながら細身の片手剣というアンバランスな装備をした彼女は、良平と同格の、つまり隊長だ。鎧の色から取ったのであろうシルバー隊を率いている。

シルバー隊隊長サーナキア・ドレルシュカフは、良平基準で見てもまあそれほど強い相手ではない。むしろ一瞬で首を断つ自信がある。と言うのも、彼女は明らかに装備の選択ミスをしていた。ステータスに恵まれていないにもかかわらず、重量のある全身鎧を装備しており、ではその防御力を生かせる大剣を扱うかと思えば取り回し優先の片手剣。才能限界までレベルを上げているからこそ現アイスフレイム戦闘員で五指に入る強さを持っているが、伸びしろがない事を考えるとそれも慰めにはならないだろう。

鎧を軽装のものに変えて機動力重視の戦法に変えてしまえば化けると良平は考えていたが、サーナキアには鎧にこだわりがあるらし

く脱ぐ気はないとの事だ。

ちなみに、サーナキアに必殺技を教えてくれと言われた事があるが、戦法が違う上に主義の為に最善を選ばない相手に時間を裂くほどお人好しでも暇人でもない良平は、すげなく断っていた。

もつとも、良平がサーナキアを苦手としているのはそれとは全く別なのだが。

「お前も今すぐ櫓を建てるのを手伝え」

「いや、俺今日非番だから。これから休むんだよ」

「なにー！ 貴様はアイスフレームの危機に何を腑抜けた事を言ってるんだ！」

回答の言葉に眉尻を跳ね上げたサーナキアは、怒声をあげながら詰め寄ってくる。

これが、良平がサーナキアを苦手としている理由だった。彼女は潔癖症すぎるのだ。

武断派のムカードーともつとも争いを起こしているのが、このサーナキアだ。ムカードーはアイスフレームを乗っ取っても組織を前進させようとしているのに対し、サーナキアはあくまで現リーダーのウルザに忠誠を誓っている。目的は同じでありながら、主義が反する二人。その上どちらも自己主張が強い者だから、会えば罵声が絶えない。

さらに言えば頭に血が上ると視野が狭くなるタイプであり、一度決めると意見を曲げない所がある。絡まれば一番面倒なタイプであり、良平はいい加減な性格をしていて見事に目をつけられるタイプだ。

「いやね、俺は明日は任務なんだからちゃんと休まないといけないんだよ」

「それは平時の場合だろうが！ 今は緊急時、皆が一丸となって驚異に立ち向かわなければならんだろう！」

「もう来ないって。俺が全部倒したし」

「そんな希望的観測でものを語るな！」

良平の言葉も間違っではないが、サーナキアの言葉も正論である。別の仕事をこなしてきたのだから文句を言われる筋合いはないのだが、だんだんとサーナキアの勢いに押されていく。

本人は自分が間違えていると思っておらず、そして実際に間違っていないからこそ扱いに困る。

「あの、隊長」

「今は取り込み中……」

肩を怒らせながら伝令兵を黙らせようとするサーナキアの口を急いで塞ぐ。

「はいはいなあに。俺たちにどんな用事よ」

伝令をダシに説教から逃れながら、良平は続きを急かす。あわよくばこれをきっかけに逃げてしまおうと考えていた。

「本部から招集がかかってます」

「あん？」

「何があつたんだ？」

サーナキアが口を押さえる手を払いながら聞く。瞳はすでに責任ある隊長のものに切り替わっていた。

「新入隊員の話は知っていますか？」

「確か優秀な戦士が入ってくるのだったな」

「はい、その人です。ホワイト隊に配属されたのですが、そこで問題がおきまして……」

言いにく気な伝令を見て、ふと先ほどの事を思い出す。

モンスターに追われるアベルト達。満身創痍の二人に比べて、明らかに傷が少なく体力にも余裕があつたランスという男。持っていた武器は破損が激しく、スタミナよりも武器が先に限界に来ていた。必殺攻撃をしていた事から、剣戦闘Lv2以上の技能を持っている事が分かる。そんな人間が、自分の必殺技に耐えられない脆弱な武器を持っているだろうか。答えはノーであり、その頑丈な武器が疲弊しきるまで戦い続けられる戦士。

「ホワイト隊、全滅したんだろ」

「何を馬鹿な……」

「いえ、その……そうです。それでウルザ様とダニエル様から招集がかかりました」

驚愕の表情を隠そうともしないサーナキアに対し、良平は当然だろうなと思っていた。

アイスフレイム内でサーナキアが五指に入る実力者であれば、アベルトは三指に入るのだ。はっきりと言ってしまえば、サーナキアとアベルトでは実力にかなり差がある。そのアベルトが死にかけ戦場を、あのランスという戦士はまだ余裕を持って戦っていたのだ。戦場がもつと狭く敵対数を限定できる場所で、なおかつ武器が保てばさらに戦い続けられたに違いない。

ランスの戦闘能力は、恐らくアベルトを一閃してしまえるほどのものであるう。

比べてムカーダーの戦闘能力と言えば、じつはそれほど高くはないのだ。当然隊長として必要な分はあるのだが、彼は個人の能力よりも統率力と戦術で勝負するタイプである。無策な所を正面からランスと戦えば、一太刀報いることも出来ず全滅は必至だ。

「俺たち以外にも呼ばれてるの？」

「いえ、呼ぶように言ったのはサーナキア隊長と良平隊長のみです」つまり戦力を集めたいのだろう。ダニエルの戦闘能力が高いであろうと良平は予測しているが、それがどれほどのものかは分からない。そしてダニエルも、ランスの実力のほどが分からないのだ。

いざランスが暴れ出した時は、アベルトとサーナキアとダニエル、そして良平の四人がかりで止めるよう。

良平はランスを、特に剣を向けないのであれば無意味に攻撃してくるタイプではないと思っている。ダニエルは考えすぎであり、またウルザが関わると過保護だ。だが、彼の懸念も分からない訳ではない。

「何をしている、早く行くぞー！」

すでに動き始めていたサーナキアが、振り返りながら呼ぶ。

答えは動き出すことで返し、半ば駆け足で動くサーナキアに追従する。本部のドアを開けるまでもなく、中からは男の怒りが声として伝わってきた。

「シルバー隊隊長サーナキア・ドレルシユカフ参りました」

「呼ばれたんで来たっす」

良平のいい加減な態度に眉尻を跳ね上げるサーナキアであったが、すでに室内に入ったから小言を言う事はなかった。

円形のテーブルと十を超える椅子が置いてあるこの部屋は、普段から隊長クラスと本部の会議や大きな作戦の指令伝達に使われている。最初からいた4人と後から入った良平とサーナキア2人を足した程度では、空間を狭く感じることはない程度に間取りが取られてあった。ちなみに、この建築物の正式名称は存在するのだが、良平は覚えていない。

部屋入って正面、緑の服に鎧を着たままのランスが、良平達が入ってきたことにも気付かなかったのか背を向けたまま一番奥の二人組の男に怒鳴り散らしている。女の方は、そのやりとりを困ったように見ながら何も出来ずに居た。そこから僅かに離れた壁では、アベルトが寄りかかりながら推移を見守っている。いつも微笑を浮かべている彼には珍しく、やや顔を青ざめて辛そうなのは体調が完璧ではないせいだろう。

「いったい何が起き……なああああああ！」

「おお、サーナキアちゃんではないか」

「うるさい馬鹿！ おい、アベルト、もしかして優秀な戦士と言うのはこの鬼畜野郎の事なのか！？」

「ええ、そうですけど。お知り合いでしたか」

「がはははは、俺様とサーナキアちゃんはいい事をした仲だ」

「うるさああああい！」

サーナキアの絶叫を聞き流しながら、部屋の中ほどまで移動して窓に肘をつきよりかかり部屋を見回した。

部屋の隅でいかにもやる気なさそうにしているのを男は視線で咎

めたが、態度を改めるつもりはない。良平の予想通り、やはりランスに対する押さえとして呼ばれたのだろう。

アベルトは止められないとすでに諦めており、サーナキアはそもそも役割を理解していない。唯一止められる実力を持った良平は、よほどの事がない限り止めるつもりはないと自己主張をしている。

「いいか、ここでは僕が実働部隊のナンバー1なんだ。僕の言う事には従って貰うからな！」

「がはははは、何日天下に……ん？　おい、サーナキアちゃんよりあいつの方が強いんじゃないのか？」

と、ランスが親指で良平を指しながら言った。

「俺は形だけの隊長だからな。人を率いてがんばるのはサーナキア達に任せてるんだよ」

「良平さん、そもそも人を率いるつもりがまるでありませんからねー」

「ふーん。まあ、誰がトップであろうとすぐに俺様が1番になってやるがな」

豪快に笑うランスを見ながら、やはり気持ちのいい気質の相手だと再確認した良平。戦ってみたいたいと思わなくてはなかったが、それ以上に気に入ってしまった。

サーナキアとの言い合い、と言うか一方的に怒っていたサーナキアをいなすと、ランスは再び抗議を始めた。その正面では、このアイスフレームそのものと言ってもいい二人がいる。

頭を禿げ上がらせて、それとは対照的にたつぷりとした白髭を蓄えた老人、と言うには些か活力にあふれた男。アベルトの父、ダニエル・セフティだ。アイスフレームの参謀でありながら医者も兼任しており、そしてさりげなく組織運営まで行っている。はつきりと言ってしまうえば、実質的な指導者だ。同時に、アベルトの父でもある。

貼り付けたような仏頂面は、密かに彼のトレードマークだと良平は思っていた。そして、表情に反比例して慈悲深い心根をしている

という、なんともアンバランスな人物だ。

その彼のやや後ろで守られるようにしている車椅子の女性が、アイスフレームのリーダーであるウルザ・プラナアイス。その容貌は間違いなく美少女であり、深窓の令嬢といった雰囲気も相まってサーナキアのように彼女を守るために居る者も少なくない。しかし、良平は彼女を好んでいなかった。

ウルザ・プラナアイスと言う個人を見るのであれば、良平はいい人であり嫌うのは難しい人格をしていると思っている。実際、アイスフレームが壊滅した場合は死ぬ前に引張つても逃走させるつもりだ。しかし、それは組織のトップに君臨する人間として好ましいかとはまるで話が違ふ。

決断力に欠けて意志薄弱、それが良平のウルザに対する率直な評価だ。少なくとも、レジスタンスを運営して反社会組織を率いる人間とは思えず、どこかの屋敷でお嬢様をしている方がよほど似合っている。作戦を決定する時は常にダニエルの顔色を伺うなど、ムライダーでなくとも不安を覚えようと言うものだ。

キムチ曰く、今のウルザの姿は本来のものではないと言う。しかし、今は《こう》なのだ。トップをすげ替えるなり組織を潰すなりして、重荷を払った方が本人のためだとすら思っていた。もっとも、それはアイスフレーム自体にもゼス王国という国自体にも全く思入れのない良平だからこそ、勝手な言いぐさだという自覚はある。だから今まで余計な干渉はしなかった。

レジスタンスに所属していても、良平は所詮部外者なのだ。どのような形であれ、どれほど微弱であれ、真剣に動こうとしている相手に口出しする気はない。

「だから、俺は悪くないと何度言えば分かるんだ！ ケン力を売られて、あいつらが弱かっただけの話だろうが！」

「それで全滅させていれば世話ない」

「だからと言って全員殺していい事にはならんだろうが！」

「あの……そんなに言い争わないで……」

「しかしウルザ様！」

ランスの言葉をばつさりと切り捨てるダニエルに、それに同調して怒鳴るサーナキア。それを止めようとするウルザの声も、あまりに弱々しすぎて効力を表さない。また話しても理解されないという事実、だんだんと怒りのメーターが上がっていくのが分かる。

良平はランスを好ましい相手だと思っているのと同様に、ウルザとダニエルも好いていた。積極的にどちらかに肩入れする気はないが、だからと言って争いそうな両者を放置したままにするつもりもない。

「待てよ。もうやっちゃったんだからこれ以上言い合っても意味がないだろ。それよりランスを今後どうするかを考えるべきだろ」

「意味ないって……お前、人が死んでいるんだぞ！」

「と言われてもなあ」

食ってかかるサーナキアに肩をすくめる。彼女の怒りは十分理解できるが、それを知ったからと言ってどう改めることもできなかった。

この世界は、人が死ぬのなどさして珍しくない。人と人の争いによって死ぬこともあれば、モンスターに襲われて不慮の死を迎える事もある。特に都市部のような守られた場所から一歩踏み出せば、死の危険はどこにでも転がっているのだ。

それはつまり、旅をすれば人の死体を見る事が必ずあると言う事であり、盗賊などと争い人を殺すこともあると言う事だ。人命を尊び思うのは、この世界ではとても難しい。少なくとも人の命が高い日本から来ても人死にに慣れざるをえない程度には。

ムカードーの思考は同調する部分もあったが、彼を好むかどうかは話が別。はつきりと言ってしまえば、良平はムカードーが嫌いであり、死んだとしても心を痛めない相手である。

「じゃあ追求してどうする？ 本人が悪かったと思おうが思っまいが、処分の内容に変化はないぞ」

「それは……」

「すでに手遅れだって言うのは、サーナキアだって否定できないだろ。それよか今後の話だ」

押し黙るサーナキア。それを見ながら、良平は内心ため息をついた。

ムカードーともっとも争っていたのは、誰でもないサーナキアだ。そして、恐らくもっとも嫌っていたのも。そんな彼を殺した相手に食ってかかるのは、ひとえに仲間だったからか。

（人が良すぎるだろ）

どこまでも人を信じることができるサーナキアに、尊敬半分呆れ半分の感情を向けながら、話を続けた。

「俺としては、ランスに新しい隊を作って隊長にするのが1番だと思っけどね」

「なんだと!」

「ほう、分かっているではないか」

怒りを隠しもしないサーナキアと、感心したように声を上げるランス。

「それで、ある程度推移を見ればいい。それこそナンバー1なりクビにするなり」

「……お前の隊に入れるという選択肢もあるが?」

「ナンバー1は僕だろうが!」

絶叫するサーナキアを二人して無視し、話を続ける。それ以上混ぜてくる前に、ランスがからかい止めていた。

「別に構いはしないけど、俺はいつも通りに動くよ。名目が変わるだけで実態はランスの隊になるな。それに、誰かの下につけて満足するタイプじゃないってのは見れば分かるだろ。必ず下克上を狙うぜ」

「む」

気に入った相手の話であるから、多少色眼鏡ごしの意見であるのは否定しない。しかし、話の中身が事実であるからこそダニエルも反論できないのだ。

良平とダニエルは同時にウルザを見る。彼女も、自分が何を求められているか分かっているはずだ。しかし回答は出せず、それどころか自分で選択する思考すらできず視線でダニエルに助けを求めた。ダニエルの瞳に僅かに悲しげな光が宿る。良平にすら——いつもの事とは言え——失望の念があつたのだ。

「ではそうしよう。ランス、お前に隊を一つ任せろ」

「うむ、ウルザちゃんの為に大活躍してやろう」

「威勢だけはいいな。しかし、隊長としての資質がなかった場合は、相応の処分をするぞ」

「そんな事ありえん。俺様は英雄だからな、がはははは」

犬歯をむき出しにた大笑いをして、ダニエルの懸念を一蹴する。自分が最高であると疑わぬその態度に、ダニエルとサーナキアは呆れ、アベルトと良平、そしてウルザは面白そうに笑った。

「まあいい。今日はこれで解散だ。新設隊については明日通達する。お前は隊の名前でも考えておけ」

「まかせろ。すぐに1番になってやる」

「ナンバー1は僕だと言っているだろうが！」

最後まで騒がしいサーナキアとランス。

「それじゃあ僕も。あ、良平さん。今日はどうも」

「気にすんな。困った時はお互い様だ。」

「借りっぱなしな気もするんですけどね。ウルザ様、父さん、また明日」

「俺も帰って寝るわ。あ、今日の報告書はどっかの班長から届くから、俺とアベルトには請求しないようにね」

「あ、はい。さようなら」

「また明日に」

二人の挨拶を背後に、扉を閉める良平。やっと今日の面倒が終わったと伸びをしながら、自室に帰っていった。



「これでよかったのか、ウルザ」

「ダニエル……。ええ、たぶん、これで……良かったんだと思うわ」
目を伏せながら、いつものように弱々しく返事をするウルザに、
いつものように悲しみを感じるダニエル。あの良くも悪くも毒素の
塊のような男、ランスが目の前に来れば何かが変わるかと期待をし
たが、結果は期待と真逆であった。

「では隊設立の手続きを始めるか。副隊長は誰がいいと思う？」

「え……？ ええと……」

いつものように感情を迷走させるウルザ、それから脱するのを待
ち続ける。何も変わらぬと分かっているながら。

実際、こんなものは儀式のようなものだ。何をするにしてもまず
ウルザを通し、決定も必ずウルザに考えさせるよう質問する。そし
て、必ず答えが出ずダニエルが提案しそれを飲む。そういう儀式。

「僕は力奥尔あたりがいいと思う。奴ならランスをそれなりに上手
く制御するだろう」

「そう、かも。……うん、そうして」

いつも通りのやりとり。内容が多少変わっているだけで、人形劇
のようなやりとりは変わらない。

ウルザ・プラナアイス。過去に全てを失った少女。そして、自ら
決定することを恐れ、しかし今あるものを捨てる勇氣も持てず、雁
字搦めに囚われた哀れな娘。牢獄のような毎日に身を捧げる人形。
時間も人も、何も彼女を救ってはくれなかった。何であればウル
ザ・プラナアイスを救えるのか、ダニエルには分からない。

「けふつ……こほつ」

「む、疲れがたまったか。今日はもう休んだ方がいい」

「ごめんなさい、ダニエル」

「気にする必要はない。ゆつくりと休め」

「……もうずっと休んでるわ。それなのに私は……」

顔を伏せて言いよどむウルザ。表情は見えなくとも、服を握る手の震えが代わりに語っていた。

こんな時にどういう言葉をかければいいのだろう、気にするなだらうか、それともがんばれか。ダニエルは少なくとも、それらは違うと思えた。かける言葉が見つからない。だから頭を優しくなでるだけ。それしかできぬ自分に嫌気がさした。

「部屋まで送ろう」

ウルザを届けると、薬を処方して部屋を出る。そして、誰もいない会議室に戻り、一人座り込んだ。

考えるのは、今日来たばかりの新人の事。ロッキーという男は何も問題がない。気性は穏やかであり、なにより行動が受動的だ。問題は、言うまでもなくランスだった。

あの男を一言で言い表すならば、クソガキだ。人の言うことを聞かず感情のままに動き、その結果を蔑ろにする。しかし対抗できる戦闘能力を持った人間がほとんどいないほどの優秀な戦士であり、身勝手さに実力が伴っている分たちが悪い。可能な限りウルザから離しておきたい人間。

もう一つ厄介なのは山口良平に気に入られているという点だ。

ランスの人となりはまだ未知数な部分が数多くあるが、良平については大部分を把握している。彼の行動原理は好悪であり、感情によって動く。

（だから、奴はアイスフレームに所属しているのだ）

いくら義理があつたとしても、嫌いだと判断すれば最低限の返礼をして組織を抜けているだろう。逆に、義理などまるでなくともキムチと子供達、そしてウルザとダニエルを好意的な目で見ているからアイスフレームの力になり続けている。そう自惚れられる程度には、他のレジスタンスから勧誘があるのだ、山口良平という男には。

上手く使えば將軍にすら対抗できるだろう、そう言わせるだけの戦闘力を持つ剣士。過激なテロリストがこれほどほしがる人物もない。

とは言え、生死感がドライな方だとしても無駄死や虐待には人並みの悪感情を持っている。だから過激派のテロリズムに賛同しないという面もあるだろうが。

そんな力を持った男が、ランスを気に入った。だからこそブレーキとして期待したダニエルをよそに、わざわざ中立を主張するように両者の中間点に立っていたのだ。面倒な事この上ない。

恐らくランスがよほどの暴虐を働かぬ限り、良平は動かないだろう。そして、ランスという男もその程度はわかまえているように思えた。つまりこの件に限り、自由に出来るなかでもっとも信頼できるコマが動かせない。

結局の所、ダニエルが目を光らせているしかないのだ。幸いにもランスがダニエルに苦手意識をもっているのは、誰の目から見ての明らかだった。

（後は、カオルを上手く使うだけだな。だが……）

ダニエルはカオルを全く信用も信頼もしていない。そういう意味では、まだランスの方が信用できていた。

ランスや良平のような、自分を信じ感情で動くタイプは、だからこそ裏切る心配をそれほどしなくていい。彼らは一般的な利益で動かず、独自の価値観で行動する。それさえ把握してしまえば、あとはどう操縦するかわけが問題だからだ。

なにより、良平はJAPAN、ランスは自由都市の出身。国家に対する思想や忠誠心が全くない。変な願望がない分、意見が割れる心配もしなくていい。彼らからしてみれば、レジスタンス活動というのは真剣みのあるものではなく、気に入った相手がいるから手を貸してやるか程度のものだろう。活動内容それ自体は重視する点ではないのだ。

しかし、カオルは違う。レジスタンス活動に協力しつつも、さり

げなく行動を一定の方向に動かそうとしている。今までそれを放置し続けてきたのは、方向性それ自体はアイスフレームの教義に則ったものだからだ。

なだめ、すかし、自分を下の立場と思わせておいてさりげなく誘導する。上手く隠してはいるが、十中八九どこかの諜報員だ。感情優先の人間より、よほど警戒すべき相手である。もっとも、福祉活動しかしていない金欠ボランティアレジスタンスに優秀な諜報員を忍ばせて、どう役に立つかは不明だが。

ランスの副官につけたと言うのは、ランスの制御の他に危険人物を一カ所に纏めるという意味もあった。

物理的な脅威が迫れば、良平は恐らくウルザを守ってくれるだろう。今後の状況によってはランスも。しかし、搦め手で向かってこられればウルザを守れるのはダニエル一人だけだ。

（ウルザ……何があっても、お前だけは……）

心の中で、何度も繰り返した誓いを祈る。いつも胸元に入れている写真を取り出し、その懐かしい光景を撫でた。

そこには、いつか昔の光景、まだ皆で集まれた頃のもの。太陽のように笑うウルザの姿がある。

必ずウルザはここに戻ってくる。ダニエルはそれを信じていた。

光を浴びて銀光を反射する鋭い刃。右手の木製の柄が、その鋭利かつ重厚な性能を思わせた。

その鍛え抜かれた閃刃に比べれば、肉塊の抵抗などあつて無きのごとし。ずん、と肉を貫通するまで振られた刃は、障害物に当たるまで止まることはない。桃色と白の断面を血が汚し、断たれた肉がだらんとこぼれ落ちた。

銀光を鈍らせるそれは、切断した際に付着した肉油と血。布でそれらを丁寧に拭き取っても、先ほどまでのどこまでも汚れない光は帰ってこない。触れる世界を濁らせるような、写れば霞む諸悪の輝き。しかしそれこそが《肉を切った》という証である。

もはや理性など残っていないかのように、ただ作業的に振り下ろされる刃。その肉が何であつたかが分からなくなるまで、無慈悲な断頭台は止まらない。

切る、と言う行為は生物に止まらなかった。刃は己の本分を忘れたかのように、植物だろうが何だろうが、とにかく目の前にあるものを標的にする。時には、その厚さに物を言わせて叩き潰したりまですた。

目の前にある全てを憎むかのような所行、しかし刃の持ち主は顔色一つ変えずに、持っていた凶器を手放した。かつん、と軽い音を立てて刃の先端が刺さり、それは刃の恐ろしさを見せつけるように立っている。

その男が刃の代わりに手を伸ばしたのは、先ほど自ら切り裂いた肉であつた。

哀れに弄ばれ、蹂躪され尽くしたかつて生きていた何か。しかし男はそれだけでは満足できず、手に持った肉を白濁した液体に落としていった。どろりとした粘液に次々と飲み込まれていく肉、その異様な光景を意味を理解できる人間が、果たしてどれほど存在する

か。

男の頬を、熱風が撫でる。およそ自然には発生し得ない、肌に絡みつくように通過していく風。その発生源に手をかざせば、それだけで手のひらから玉のような汗が噴き出てくる。

さらにその隣にあるのは、赤い泉だった。それは何でできているのであるうか、もしかしたら血液を溜め込んだのかも知れない。ごぼりと僅かに気泡を発生させるそれも、やはり熱風の発生源ほどではないが熱せられている。

白濁した粘液を滴らせる肉、それを灼熱の風の先、焦熱地獄にたたき落とす。まるで悲鳴のような、心地よい破裂音。無表情だった男に、初めて愉悦が浮かんだ。

下唇を嘗め、とても満足そうに。そして口を開き――

「っしゃ！ カーマ皿！」

「はい、良平さん」

油の中から衣のたつぷりついた肉を引き上げて、油切り。ケチャップベースの甘酢たれにすでに火を通した野菜と肉を絡めて、孤児院の少女、カーマが用意した大皿に大胆に盛りつけた。

大きめに切り分けた食材が皿を転がる毎に目を輝かせる子供達。内容物を全て移し替えると、自作の打ち出し鉄鍋とおたまを叩いて鳴らす。

「いーにおいー」

「にーちゃん、これなんて言うの？」

「酢豚つつーんだ。美味しいのは保証すんぜ。食ってみろ」

忙しく皿を運んでいくカーマに、今か今かと料理を待ちわびる子供。手には既にフォークが握られている。

鍋を軽く水洗いして流しに置き、エプロンで軽く手を拭き自分も席に座った。

「はい、準備できたわね。じゃあみんな、せーの」

「いただきますー」

キムチの号令で一斉に挨拶を済ませると、我先にと料理に手が伸

びる。

「もー、こぼしちゃだめでしょ」

「はいアルフラ。これとこれも食べようね」

年長組が年少組の面倒を見つつ、いつものように騒がしい食事。その輪に良平が交ざるといふのは、実の所それほどめずらしくはなかった。

自分で作った料理を頼張る良平に、となりに座るキムチが話しかけた。

「いつもありがとうね」

「ん？ 気にすんなよ。好きでやってるからさ」

良平からして見たら、孤児院の台所を使わせて貰っているかわりに料理をしているのだ。確かに10人以上の料理を作るのは結構大変だが、それとてレベルアップで性能が上がった体ならばさほどの負担はない。それに、食べる人間の殆どが胃の大きさなどたかが知れている子供。実際に作る量は人数の7割程度だ。

「一人分作って一人で食うのも寂しいし」

アイスフリームでは食材を隊事に渡して、それぞれが調理するようになっていいる。非効率的なやり方だと思っていたが、それで大量生産のマズメシを提供されるよりは100倍マシだと考えている良平に文句をつけるつもりはない。

「それに、共用のキッチンに絶対に使いたくない」

「あはは……気持ちには分かるわ」

珍しく硬質的な声で断言する良平に、キムチは乾いた声を漏らした。

一度に数十人分の料理を作れるようになっていいる共用キッチンは、とても大きくてとても汚かった。後方支援の部隊は割と綺麗に使うのだが、前線部隊はとにかく大雑把でいい加減なやり方をする。特に後片付けが最悪で、良平は一度本気で殴り込みかけたのだ。

なんとか怒りを納める事には成功したが、だからと言って日本人の潔癖魂までは鎮められていない。なんとかいい環境で美味しい食事

を、そう思つて目をつけたのが、普段よく遊びに行く孤児院であつた。

キムチが甘酢の絡んだ肉を口に入れる。肉の濃厚なうまみを、程よく包む酸味が際立たせた。

「こんな料理見たことないわ。しかも美味しいし。なんでこんなに聞いたことのない料理ばかり知ってるのかしら？」

「くくく。これでも料理が趣味だからな。一時期本気であらゆる料理を作るようになるうとした事がある」

「もう、それって答えになってないわよ」

昔取つたなんとやら、自炊をきっかけに趣味として楽しんでた料理がこんな所で役立つとは思ひもなかった。メジャーな国のメジャーな料理は、だいたい作れるようになってる。その引き出しの殆どは、こちらの世界では存在しないものだ。

今は時間の関係で打ち出し中華鍋と中華お玉しか作れていないが、いずれは使い慣れた調理器具全て用意するのが野望だ。

「けど、私たちだけこんなに食べていいのかしら？」

「足りない材料は俺が持つてきてるんだから、文句を言われる筋合いはないだろ」

良平が急に何が食べたい、と思うのは大抵ダンジョンに潜っている時だ。思いついた料理を覚えておき、ダンジョンの帰りに食材を確保して帰るのがいつものパターンだ。たまに食材を手に入れるために犯罪まがいの事までやっているのだが、それは言わぬが花だと思つてゐる。

と言うわけで、孤児院の料理は作っている人間の腕もあつて、通常アイスフリームで出されるものよりかなりグレードが高かったりした。

「その熱意を別の方向にも分けてくれればいいんだけど……」

「隊長として、って？ 無理無理。そういうのはがらじゃないよ」

隣でため息がつかれるのを感じながら、次々と料理を消費していく。軽く答えてはいたが、それは良平の本心でもある。

他国の出身でありゼスを良くしようなどと全く思っていない人間が、愛国心をもって志を貫く兵士を率いれはしない。少なくとも、良平は彼らの思いを背負う事も無視する事もできそうになかった。むしろ、1級市民と2級市民の和解という結果がでるのであれば、他国に吸収されてもかまわないとすら思ってみる。

だから意思を背負う覚悟をしたサーナキア、全て無視して思うがままに動くランスを素直に賞賛していた。良平は必要以上に責任を持たないという選択をしたのだから。

「それに俺、自分で言うのもなんだけど結構貢献してるだろ」

「そうなのよねー。ダニエルが資金繰りが大分楽になったって言うたわ」

良平がダンジョンで手に入れたアイテムは、レアアイテムを除いて全て渡していた。レアアイテムは渡すと感付かれかねないため渡していないが、それでも通常立ち入れないほど深くまで潜っていれば通常ドロップ自体が高価なものになる。

レジスタンスという立場上買ったたかれてはいるのだが、安定して高価なアイテムを放出しているため、最近では少し売値が上がったとか。今やアイスフレームの主な収入源の一つである。

良平の割と身勝手な行動が咎められない理由は、実力以外にも《金を生む者》であるからだった。下手に部下を率いるよりも、そちらの方が役に立つとも言える。

「そつえばさ、新人、知ってるでしょ。ランスって人。どんな人なの？」

「ランス？ 俺は面白い奴だと思ってるけどね。裏表がない所が特に。何かあったの？」

「何か、と言うか……ほら、初日からああだったじゃない？ だからどんな人なのかなって」

確実に何かあったという口ぶりだが、表情から察するにそれほど悪い事ではなかったのだろう。そう良平は判断して、あまり深く聞くのはやめておいた。

「まあ、俺はああいうタイプは嫌いじゃないよ。最初は変に突っ込みすぎずに、一歩下がって人となりを理解しておけばいいんじゃないか？」

「ふふふ、助言どうも。そうしてみるわ」

「さっぱりしてて楽しい奴だよ、あいつ。……うし、ごちそうさま」

「はい、お粗末様」

皆がまだ食事を続けている途中、一人だけ席を立ててキッチンに戻っていった。食器を並べると、残しておいた料理を手早く盛りつける。あつという間に二食分が完成した。

料理をお盆にのせ、さらに岡持に入れる。それを担ぐと、顔だけ食堂に覗かせた。

「じゃあ俺はもう行くからな。後片付けは頼んだぞ、チビども。キムチに迷惑かけんなよ」

「はい」

「もう、チビじゃないもん。ぷう」

「にーちゃんもウルザ様にめいわくかけんなよー」

「ウルザによろしくね」

騒がしい孤児院を後にして、日の落ちかかっている外を歩き本部へ。これくらいの時間になると、昼の活気も収まりを見せ始める。

ドアを二度ノックすると、すぐに入って良いとの返事があった。

「ちわー、出前でーす。晚饭お届けに参りました」

「もう、なんですかそれ」

ウルザが口元を隠して笑い、ダニエルは相変わらずの仏頂面。手元には大量の書類が置かれており、手に付着した黒ずみが今まで仕事をしていたと教えていた。動きの取りづらいウルザの代わりに、ダニエルが書類をてきぱきと片付けていく。

そちらはダニエルに任せて、良平も岡持からお手ふきを取り出す。ウルザに両方渡しておけば、ダニエルが片付け終わった後に渡してくれる。料理を取り出して一人分ずつに分けた頃には、既に片付けは終わっている。座る二人の前に、今日作った料理を差し出した。

「はいよ。存分に食ってくれ」

「いつもありがとうございます。……うん、今日も美味しい」

微笑みながら、それこそ社交辞令ではない本気の笑顔から美味いと言われるのは、たとえ本職の料理人でなくとも悪い気はしない。

「いつもすまん」

「ついでだよ。んな感謝されるような事はしてない」

「でも、本当に美味しいですから」

不意にあふれる年相応の笑顔に、なぜレジスタンスなど続けているか聞きたい衝動に駆られる。しかし、ぎりぎり喉元で言葉にするのを堪える事に成功した。それを言ってしまうと、彼女の笑顔が曇ることはわかりきっていたから。

食器が奏でる音を背景に、他愛のない会話を続ける。大抵は良平がウルザが話題を出し、弾む会話にダニエルが相づちを打つ、それだけだ。

食事が終われば会話も自然と終わる。良平は食器を片付けて、ダニエルは処理途中の書類を広げ始めた。

「あの……」

「ん？ 何？」

「あ………っ」

話しかけたウルザは、いざ返事が返ってくるとつつむいて開きかけた口を噤んでしまう。それを『なんでもない』と言われるまで待つのがいつものパターンであった。岡持に肘をついて、聞き慣れた

言葉を待ったのだが。

今日は、いつもより遙かに思考時間が長かった。声を漏らしては止め、視線を上げては交わる瞳に再び伏せて。放棄を選択する事に慣れきっている筈の彼女は、しかし慣れているはずの事ができずにいる。良平は、そしてダニエルも彼女の選択を静かに待ち続けた。持ち上がるウルザの顔。そして弱々しく今にも消えそうな眼光。しかしそれは、確実に良平を捉えている。

「お……おね、がいが……あり、ます」

そう言葉にする彼女。自分の目の前の人間がウルザ・プラナアイスだと理解するのに、僅かならぬ時間がかかった。

その時の自分の顔は、さぞや間の抜けたものであっただろうと後に思う。しかし、それを攻める人間はいない。なにせ、常に貼り付けたような仏頂面のダニエルですら、目を大きく見開いて驚愕していたのだから。

「あ……ああ。それで、内容は？」

「っ……やっぱり……」

自らの決断をさらに放棄で上書きしようとした彼女の沈む視線を無視して、良平はウルザの手首を捕んで持ち上げた。

びくり、と跳ねるウルザの体。上げた視線には、先ほどまでより遙かに近くウルザの兵がいる。

「俺はもう《何か》があるって聞いちゃった。今更なしにはできないよ。もう一度聞く、内容は？」

良平に抵抗しようとする力の入る腕。しかし、本気でもない反抗に引くつもりはない。

ウルザが乱暴に扱われながらも、ダニエルはやめさせようとしなかった。それは、たとえ僅かであってもウルザが選択する事に期待をしているから。

震える唇、それが声になるのを良平とダニエルは静かに待つ。

「……ごめん……なさい」

それっきり喋らなくなるウルザ。良平は小さな失意と共に、指か

ら力を抜いて彼女を解放した。ダニエルの瞳にも悲しみが写っている。

「俺は何をすればいいんだ」

聞いた相手はダニエルだ。これ以上ウルザに追求しても、彼女を追いつめるだけなのだから。

「以前ブラック隊がサーベルナイトに殲滅されたのは知っているな？」

「ああ……確か、俺がダンジョンに潜ってる間の話だっけ？」

「そうだ。そのサーベルナイトの討伐に現在グリーン隊がついている。この確認をしてきて欲しい」

「分かった。ちなみに、討伐がまだだった場合は、そのまま協力してきていいんだろ？」

「……構わん」

一瞬空いた間に、良平は目を細めた。ダニエルはランスの事を、随分目障りに思っているらしい。ウルザ至上主義の彼からしてみれば、よからぬちよっかいをかけかねないランスは危険人物以外の何物でも無いというのは、とてもよく理解できる。

睨み合うような形になる二人。最初に折れたのは良平の方だった。ランスの安否はほぼ確実に問題ないと踏んでいる。しかし、もしもが無いとも限らないのだ。

「すぐに行く。こいつは孤児院に返しておいてくれ」

「ああ、構わん」

指先で岡持を鳴らし、ダニエルはそれに答えた。

部屋を出て行く前に一度振り返り、ウルザを見る。未だ顔を上げられる彼女に向ける感情は、憐憫しかなかった。

扉を閉める。もうウルザとダニエルのやりとりを確認する方法はない。そして、知る気も起きない。

未だ再び飛び立つ意思を持てぬ鳳凰に背を向けて、良平は走り始めた。

アイスフレイムからサーベルナイトの出没するイタリアまでは、距離で言えば実はそれほど離れているわけではない。なぜそんなに近くにレジスタンスの本拠地を構えられているかと言うと、アジトがモンスターの巢窟である森のほぼ中心地に位置するから。

どういう理由があるのかは不明であるが、そこにモンスターが自然と紛れ込んできた事は一度もないという。人里から近いのに全く人の寄りつかない場所、後ろ暗い人間が隠れるには絶好の場所だ。

既に太陽は殆ど沈んでおり、整備されていない足下を見るのが難しくなってきた。しかし、良平にとっては何度も通った慣れた道だ。全力疾走をしないのであれば、それほど苦にはならない。

普段であれば背の高い草木が群生する川沿いの密林を通るのだが、今日はやや急いでいる。すぐに森から抜け出ると、この世界に生息する動物と同等以上の速度でまっすぐイタリアに走っていった。途中何度か1級市民と思わしき集団に出くわしたが、その時は流石に潜んでやり過ごす。権力者に目をつけられるのは面白くないし、そんな時間も無い。

イタリアに到着する頃には、すっかり夜も深まっていた。外には見る限り人があるいている事はなく、人間と入れ替わって街の支配者となったモンスターが我が物顔で騒いでいる。

良平は、この街の風景が好きではない。街の作りや住んでいる人々の気質、それらどれを取ってもイタリア上部に住む1級市民の家畜にしか見えなかったから。2級市民と烙印を押された者達は、モンスターにも魔法使いにも怯え、思考する力すら奪われる。それを哀れと言わずして、なんと言えば良いだろうか。

（今はそれどころじゃないな）

沈みかけた思考を強制中断、思考をランス達の搜索に切り替える。人間と見て襲いかかるモンスターを切り払いながら、イタリアの闇を通り抜けた。

あらかた探すも見つからずに、奥の区画を探すしかないかと考えたその時だった。甲高い笛の音が響いたのは。

（手遅れだったか）

音源へと近づきながら、どうじに膨大な量の気配も同じ場所へ向かっているのを感じた。こちらは隠れようとせず、発光する警備ウォールと警備メイトを引き連れた治安隊だ。その軍勢の間を縫って、重鎧の男が消えていくのを視界の端で捉えた。それがサーベルナイトだと気付いたが、首を取るには気付くのが遅すぎた。

忌々しげに舌打ちしながら、右手の剣を一閃。弾ける気の刃が治安隊に襲いかかり混乱している所で、サーベルナイトに罵声を浴びせるランスの近くに着地した。

「援軍に來ただけど、すまん。遅かったな」

「その通りだ馬鹿たれめ。ちつ、奴には逃げられたか」

その僅かなやりとりの間に、良平達は包囲されかかっていた。流石に治安隊を指揮する人間は優秀らしく、素早く壁になる魔法兵器を前面に出し戦士を牽制する。

「ひいひい……ランス様、どうすればいいですかああ」

「まあ、困りましたわね」

滂沱の如く涙を流しながら嘆くロッキーに、全く困っていない様子で頼に手を当てるカオル。恐ろしく対照的なこの二人が、グリーン隊の隊員だった。

「うるさい騒ぐな。とつとと逃げるぞ」

「まあ、それじゃ俺が來た意味がないから、俺が牽制兼囃をやつとくからその間に抜け出てな」

軽く言う良平の様子に、ランスがははははと笑った。

「うむ、俺様が逃げられるよう死ぬ気で引きつける」

「死ぬ気はないけど、まあがんばって引きつけるよ。なるべく派手に暴れるから、なるべくこそそしてくれな」

「そんな……それじゃ良平さんが危ないだす。おらも一緒に……」
ロッキーの言葉を手で制す。止まったのを確認すると、手を振っ

て答えた。

「んなもん要らん。とつとと逃げてくれ」

「そうですね、ロッキーさん。良平隊長についていっても、かえって邪魔になるだけです」

「お前が10倍強ければ考えるけど……つと！」

無駄話をしている隙を突いて捕縛しようと動く治安隊。いち早く気付いた良平が、剣を振って壁を裂きながら吹き飛ばす。同時に背後の魔法使いの詠唱を阻害した。

周囲の建物から複数の気配が動いており、上から魔法を放ってくるつもりなのだろう。良平とランス、隊術に秀でた力オルはどうにでもできるが、ロッキーにまでそれを求めるのは酷だろう。

「ほら、もう猶予がないぞ」

「お前は隊長つばいあいつがいる所に一発かませ。その隙に俺たちは後ろに逃げる。突破したのを確認したら横でこそこそしてる奴らも吹き飛ばせ。あとは好きにしる」

（本当に面白い奴だな）

指示が感覚的すぎるものの、内容は良平の能力を把握した上でかなりの確だ。少なくとも誰からも文句が出ない程度には、この場にあつたやり方なのだ。

「あいよ、ランス隊長。アジトに帰ったら一杯やろうぜ」

「いやだ、男となんぞ飲まん。酒だけよこせ」

「お、おらたち先にアジトでまってるだす！」

「良平隊長、お気をつけて」

別れを告げると同時に剣先から弾ける疾風。魔法壁をはじき飛ばして、そのまま治安隊をひっくり返した。

「ランスあたたーっく！」

絶叫のような雄叫びは、そのすぐ後に響く轟音にかき消された。

小石が混ざった暴風が背中を叩く。

良平の剣閃を無数に増やし風のように流し飛ばすそれと違い、力の一点集中で触れたものを爆散させる必殺技だ。射程距離が短く対

象も少数で手加減もきかないが、その代わりに威力が桁違いだ。大地を揺るがすほどの必殺攻撃はなかなかお目にかかれない。

包囲網どころか連携すらあつという間に崩れる治安隊。良平は追いつきとばかりに斬撃を放ち、さらに混沌を加速させ組織力を崩壊させていく。

駆け抜けようとする三人に建物に潜んでいた意識が向けられる。

あと何秒もすれば魔法が雨のように降り注ぐだろうが、そんな事をさせるつもりは当然ない。斬閃が建物の外壁に食い込み、次々と崩壊させていった。2級市民向けに建てられた手抜き家屋を砕くことなど容易い。

ランス達の姿は闇夜に消えていたが、それも人海戦術で探されれば見つかるのは時間の問題。もう少しだけ治安隊の身動きをとれなくする必要がある。

わざとランスとは別方向にゆっくり後退しつつ範囲斬撃の威力を落とす。そちらが人数を展開しやすい立地になっているのは把握済みだ。

（これで釣られてくれればいいんだけどね）

攻撃の威力が弱まったために警備ボールの盾が機能し始める。治安隊は良平の体力が衰えたと判断したのだろう、明らかに狙いをランス達から良平に変更していた。

それでもランスを追おうと人数を割こうとするが、その度に強めの斬撃を飛ばして阻害する。そのあからさまな妨害行為に、治安隊は標的を良平に絞ったかのように戦力を一点集中し始めた。

（これで、俺が身を犠牲にして仲間を逃がすつもり、って思ってくれば御の字だな。それで、捉えた後拠点を吐かせればいいとも思ってくれてればなお良しだ）

実の所、良平は死人を出さないようになんか手加減していた。あからさまに悪党、と言うのであれば話は別だが、ただ命令に忠実なだけの警務隊を殺すのには罪悪感がある。それでも死人が出てしまつたら仕方が無いと思っており、負傷については全く配慮していな

い程度のものだが。

（そろそろ俺も逃げて大丈夫かな？）

こんな所で不毛な戦闘をいつまでも続けるつもりなど毛頭無い。良平の周囲に治安隊全てが集結しているわけではないだろうが、それでもかなりの人員を引き寄せられたはず。

要領が良いカオルは今更心配することなどなく、ランスもあの身体能力ならば少数の治安隊など容易く蹴散らすだろう。唯一不安の残るロッキーだが、彼もランスに張り付いていればそのおこぼれに預かれるだろう。

（けどまあ、もう少し引きつけておくか）

良平は攻撃能力の高い警備メイトを優先して破壊すると、反転して走り出す。速度を治安隊が追いつけるぎりぎりに設定しながら、包囲網の一部に飛ぶ刃。威力自体は上げていないが、接近した分強力になっている。壁を維持しきれず倒れるように崩れる治安隊局員、その上を跳ねて飛び越えた。

「追え追えー！ 絶対に逃がすなー！」

後ろから女性の、恐らく隊長であろう人物の声が響く。それを無視しながら、イタリアの街を背にした。

鬱蒼と茂る森の中、サバイバルナイフで生え放題生える蔦を払いながら、目的地も分らず歩き続ける。

こちらの世界に来て人の手の入らない場所にも慣れたと思っていたが、それは好きになれる事とは全く話が別だと痛感した。ダンジョンの中とは勝手が違う自然の驚異にうなされながらそれでも進む。膝上まで生える草が絡むのはひたすら鬱陶しく、顔の前を飛ぶ虫にいらだちがつのる。いつその事思い切り上に跳んで周囲を確認したい衝動に囚われたが、それは別の面倒を呼ぶだけなのを思い出してなんとか自制。同時に陰鬱な気持ちが増した。

サバイバルナイフを持ったままの不精な自分にこれほど感謝したのは初めてだ。一本で切る、削る、叩くなどの多機能を備えるサバイバルナイフは、ダンジョンの中でもその便利性を損なわない。ゆえに武器としてではなく、探索ツールとしていつも携えているのだが。それが森の中を歩くのに役立つ日が来ようとは夢にも思わなかった。

「くそつ、全部あいつらのせいだ」

いらだちを言葉にかえてみたものの、それで何が変わるわけでもなく。言葉は空しく木々の隙間に消えていった。

誰かが悪かったと言うわけでなく、あえて追求するならば皆ががんばりすぎたのだ。治安隊は職務に忠実で、良平も任務に忠実であった。それだけだ。

治安隊の囿を請け負っていた良平も、まさかイタリアの外まで追跡してくると思わなかった。数が多く容赦なく魔法を放ってくるのに疲弊したものの、なんとか振り払ったのだが。その時点で手遅れであるとは全く気付いていなかった。

周囲を警戒しつつも帰路を進んでいくと、後方イタリアの方面から土煙があがっていたのだ。思わず何事かと足をとめてしまう良平。

そこで脇目も振らずに逃げていけば、あるいはこんな事にならなかつたのかもしれないのに。

爆走してきたのは、うし車の集団だった。それも武装した魔法使いの集団を乗せ、ただ一人を追うための戦車隊。

補足された所でやっと相手の目的に気付き、顔を青ざめた良平がとにかく逃げる。逃がしてなるものかとうしを叩いて走らせる治安隊特殊機動部隊との、夜が明けるまでの鬼ごっこが始まりであった。結局、軍配は森に逃げ込むことに成功した良平にあがったものの、森の浅い部分では未だに治安隊が搜索を続けているため深緑の檻から出ることもままならない。

そして今、森のより深くへ足を踏み入れながら、どうにか逃げる方法を探しているのだが。正直その前にストレスでどうにかなりそうだった。

「マジでもう休みたい。できればメシを食いたい、作りたい……あと酒飲みたい」

どんどん思考が趣味の方向に逃避していく。それでも深い森の中にいると言う事を考えないだけ幾分ましであったが。

蔦が木々の隙間を埋めるように生えて、それを切りながら進むという地味かつ面倒な作業を進めて幾ばくか。緑の向こう側に、隙間があることに気がついた。

森を抜けたのか、脳裏を希望がよぎるが、すぐに否定。森林の途絶えるすぐ手前で、これほど緑が密集しているとは考えづらい。普通に考えれば徐々に密度が減っていくはずだ。

今までより僅かに慎重に、草の隙間を抜けていく。強い光が漏れるのを感じ、久方ぶりに肌で感じる太陽を堪能しながら、ついに抜け出た。

多量の草葉に遮られて漏れるように届いた光ではない、命の源と言える輝きの奔流。さらにその光のうねりを足下から広がるそれが反射し、幻想的な演出をしている。森林が途絶えた理由は、湖がそこにあるからであった。人の手の入っていない雑味の多い光景、し

かし純自然だからこそその野性的な美しさだ。深緑とそれを写し出す水面、そして太陽のスポットライト。最後に――天使。

良平は驚きに目を見開いた。木陰にある大きな苔むした岩、その上に天使が膝を抱えて座っていたのだ。いや、正しくは天使でなく、彼女が女の子モンスターだというは分かる。

水色を基調とした露出度の高い服は、恐らく背中から生える小さな翼のため。紫色のショートカットと、それと同じ色合いのアメジストを加工したかのような瞳。やや尖った耳のすぐ上から二本の角が飛び出ている。そして角の邪魔をしないように乗せられたベレー帽。全てを調和させたような、それこそ本当に天使とすら思える造形を持つのが彼女だった。これで足を抱えてやる気なさそうに座り、憂鬱に顔をゆがめていなければさぞ絵になったであろう。

良平は、特に彼女に用があつたわけでもない。むしろ気付かれないうちに身を隠すのが、もつとも正しい選択であろう。しかし、彼はそれをせずに天使のような女の子モンスターに近づいていった。その行為にあえて理由をつけるならば、いい加減一休みしたかった、というのがもつとも大きな比重となるだろう。その他にも、偽エンジェルナイトとも違う見慣れない女の子モンスターに興味がありもした。他にも女の子モンスターは人間にしか見えないから、あまり戦いたくなかったというのもある。そして、心にひっかかるものが一つ。

出かけに見たウルザの顔。悲しそうに、そして何かに怯えながら目を伏せる彼女。そんな表情をさせてしまった原因は、間違いなく良平にある。

はつきり言ってしまうと、良平にはウルザのレジスタンス《ごっこ》には全く興味が無い。しかし、親近感を感じているし、できれば幸せになつてほしいと思う程度には彼女に好意を寄せている。きつと妹のような感情を寄せているのだ。実年齢はともかくとして。そのウルザの顔とどこか被る、天使のような彼女の表情。きつとウルザに対する罪悪感を、彼女で代用し晴らそうという卑しい行為

なのだ、これは。

しかし、そんなものが最後の一押しをして、良平に話しかける決意をさせていた。

外周をぐるりと回りながら、大岩に近づいていく。別段足を潜めている訳ではないのだが、何かぶつぶつと唱えている彼女は良平に気付かず、少し離れた場所に腰掛けた。

「なあ、あんた。ここで何してるんだ」

「……あー？」

良平が声をかけると、体制はかえずに視線だけ動かしてくすんだ。紫水晶の内側に捉える。そして、聞こえるように舌打ちした。

「なんなのよまったく……。とっとと失せなさいよ、人間」

「そう言うなよ。ちよっと休憩してるだけだ」

答える良平に敵意の籠もる視線が叩きつけられる。何か攻撃でもしようと思ったのか、一瞬手が泳ぎ、しかしそれは何かをすることなく元の位置に戻っていった。邪魔な人間を振り払う、それすら億劫なのだろうか。

「まったく……。なんで私が……。カミィラ様……。ユキもユキよ……。私ばかり」

こぼれる単語から内容を推測する事は出来ないが、どんな類の嫌なことがあったかはなんとなく分かった。要は上司と部下に、とりわけ上司に恵まれないと言う事だろう。それを知って、良平は思わず笑いを漏らした。

女の子モンスターは外見はほぼ人間である。すくなくとも外見は、あれは化け物ですと言われるよりもコスプレの集団ですとも言われた方が遙かにしっくり来る。そして、そのメンタリティーもかなり人間に近くできている。

ではなぜ人と女の子モンスターは少数の例外を除きわかり合えていないのか。それは、どれほど人のような外見であっても女の子モンスターを確認すれば、相手がモンスターだとなんとなく理解できるからだ。見た瞬間に人ではないと理解でき、そしてそれは恐らく

モンスターから見ても同じなのだろう。

話せば分かるかも知れないという可能性を、相手が同族同種ではないと理解できてしまうだけで放棄してきた。しかし、相手の本音が聞ければ違いなど案外この程度であり。人と同じような愚痴を呟くのだ。

「なに笑ってるのよ」

いつの間にか、瞳に剣呑な色を乗せた彼女が睨んでいる。

「悪い悪い。あんたみたいな凄い奴でも、人間と変わらん事を言うんだなーってさ」

「っ、うるさいわね、人間風情が」

「そう言うなよ。あ、俺の名前は山口良平。あんたの名前は？」

全く態度を変えぬ良平に苛立ちを募らせる天使型モンスター。視線が鋭くなっていたかと思うと、不意に目が意地悪そうな色に移した。

「ええ、私の名前はね。ラ・サイゼル。魔人ラ・サイゼルよ」

「よろしく、サイゼル」

ふふん、と鼻を鳴らしながら告白したサイゼルに、しかし良平は軽く受け流した。思わぬ肩すかしを食らい、一瞬惚けるサイゼル。

実のところ、良平は魔人のことをよく理解していない。だからこそ、ラ・サイゼルは魔人であると知っても大した反応がでなかった。

昔に志津香から魔人について話をされたが、それも軽く触れた程度なのだ。曰く、魔人領の支配者であり魔人には絶対に勝てない。良平はそれを、モンスターのリーダーであり、とても強い程度にしか認識していなかった。まさか額面通り打倒する術がないとは思えない。

「……なによ、変な奴。調子が狂うわ」

顔を背けてぽつりと呟く。馬鹿馬鹿しくなったのか、敵意は霧散していた。

「なあ、変な奴ついでにさ。少し話をしないか」

「はあ？」

肩越しに覗く三白眼、それでも律儀にけだるそうに視線を動かしてくれる。

「なんでこの私があんたなんかと話をするのよ。それに私は魔人、あんたは人間なの。分かってる？」

「そうだな。で、それが？」

「え？……それが、って」

「会話は通じてる。相手の言う事も理解できる。なら、話ができるさ。俺が人でサイゼルが魔人なのなんて、何も関係ない」

目を見開くサイゼル。それは、サイゼルが初めて正面から良平を見た瞬間だった。

ふっ、とため息が漏れる。表情から幾分嫌の気が薄れたのは、良平の気のせいではないはずだ。

「あんたってさ……変な奴ねー」

「じゃあそれでもいい。俺は人間とかじゃなくて、変な奴だ。だから、話ができる」

「……はっ。もういいわよそれで。あんたが言いだしたんだから、なんか面白い話しなさいよ」

そこから始まった会話は、中身に意味のあるものではなかった。良平が適当に話の種になりそうな事を話し、サイゼルがそれにのついてくる。意味の無い雑談を続けていく内に、サイゼルもある程度話しをするようになっていた。

気を許したからだろうか、いつしか話の中身はサイゼルの愚痴が殆どを閉めるようになる。滂沱と流れる不満の奔流を、柔らかく肯定しつつ受け止める良平。それが心地よかったのだろう、さらに流れ出る溜め続けられた澱。

「いつもいつもいつもいつも自分は何もしないくせに偉そうに……！　ちよっと強いからって何なのよ！　誰が魔物を集めて軍行動可能になるまで訓練したとっ……！」

「なあ、ちよっといいか？」

「何よ！」

つい先刻までの無気力な姿はどこへやら、握り拳に歯ぎしりをするという真逆の方向にまで突っ走ったサイゼル。それを良平が止めると、勢いのままに絶叫した。

「つまり、サイゼルの妹がなんとか派に付いた。妹が気に入らないサイゼルは敵対派閥に入っただけ、その上司がとても嫌な奴だったであつて？」

「身も蓋もないわね。……その通りだけど」

正直良平にはそれより遙かに聞きたい事があつたのだが。なにせ彼女の話を経括すると、どうもどこかに大規模な軍事侵略を行うとしか思えなかったのだから。しかし、とりあえずそれを脇に置いて彼女の身に直接関わる事だけを聞くことにする。

「本当にこのままでいいのか？」

「っ、どういう意味よ！ 私はハウゼルの事なんて何も……！」

「ああ、待った待った。別に姉妹の事情に口出しするつもりはないから。そっちじゃなくて、サイゼルが今の派閥に所属し続ける事についてだよ」

「……は？ どういう事？」

怪訝そうに顰められる眉。その反応が、既に何も考えず所属しましたと物語っている。

（この子、ほつといたら危険な子じゃなからうか）

中身が直情的と言うか、一本筋すぎると言うか。とにかく一つの目的を達成するために他の全てを投げ捨てるような所が見受けられる。

詐欺の被害にあつても強がって、最後にひっそり涙するタイプ。そんなサイゼルの姿が脳裏によぎり、その姿が恐ろしくしくり来た事に内心冷や汗を垂らした。

「もしだ。サイゼルが今の派閥に所属し続けて、妹のハウゼル？ がいる派閥に勝ったでしょう。そしたら、サイゼルはずっとその嫌いな上司に見下されて顎で使われる事になるぞ」

「……………え？」

ずっと僅かに顔が青ざめるサイゼル。やはり考えてなかったか、と良平は確認した。

「なあ、妹の鼻を明かすのって今居る所じゃないとできないのか？ その為に今後ずっと嫌な思いし続けるのを、お前自身が本当にそれでいいと思えるのか？」

「……………どうしよう」

膝を抱え込んで泣くような声を出すサイゼル。その姿は、良平が初めて目撃した時よりも鬱々としている。

「あ……………まあ、今すぐどうこうって話じゃないんだろ？ それに、いざとなったら抜け出ちまえばいいさ。嫌な事をやり続けるなんて馬鹿みたいじゃないか」

どう慰めたものかと逡巡しながら出た言葉は、やはり十人並みなもの。中身などありきたりな上に、もはや解決案ですらない。

しかし、それにサイゼルは何かを得たと言うかのように顔を上げた。

「そう、よね。嫌ならやめればいいんだわ」

本当は良くないというか、嫌ならやめると言うのは大凡が挫折の言い訳である。しかし、今更それを指摘するにはサイゼルが乗り過ぎた。

「今すぐやる必要はないんだ。どうしても嫌だと思ったら、こんな事続けたくないと思ったら、そうする事もできるってだけでさ」

「そう、そうなのよね。私はずっとこうしてるものだと思ってた……………」

「……………なんか……………なんて言うか、そうじゃないのね。そうなんだ……………」

幾度も繰り返して頷くサイゼル。

「あんたって……………本当に変な奴ね」

初めて見るサイゼルの笑顔。迷いで陰らせていた雲の晴れたそれは、幾分幼く見え、そして魅力的だった。

「名前、もう一度教えてよ」

「良平だ。山口良平。今度は忘れるなよ」

「分かってる。良平ね、覚えてたわよ」

さてと、と良平が立ち上がる。尻を手で払う良平を、サイゼルが不思議そうに見ていた。

「何してるの？」

「帰る準備だよ。残念ながら良平さんは迷子中でね。絶賛出口募集中なんだ」

「ああ……そうか」

帰る場所がある、そんな当然のことに今更気付くサイゼル。本人が思っている以上に会話を楽しんでいたのだろう、漏れた声は名残惜しげだ。

すつと手を差し出すサイゼル。良平が意味を理解する前に回答が出された。

「送ってつてあげるわよ。空からならすぐでしょ」

「……それじゃあお言葉に甘えて」

差し出された手は、予想より遙かに柔らかい。それをしっかりと握り、サイゼルのひんやりとした体温を感じた。

サイゼルの体に釣られて良平の体も浮き始める。そして、ふと聞いてみた。

「なあ、気は晴れたか？」

「……もしかして良平、その為に……？」

「まさか。俺の休憩中の話し相手が欲しかったただけだ」

即座に否定する。その答えは、くすりという笑いと共に返ってきた。

「そういう事にしておいてあげるわ」

ふわりと浮く男女二人。どんどんと伸びる高度に、良平はがらにもなく感動していた。

初めての空中散歩には、身体能力に任せて飛び跳ねるのは全く別の興奮を覚える。跳ねた後に見下ろした風景を知った時も悪くはなかったが、これはそれと比べても格別だ。

透き通るような空気越しの風景は、いつもの風景の縮図では終わ

らない何かがある。百の言葉でも表現しきれぬ、見たことのある者にしか共感できない陸と空、そして地平線。自分の住む世界の全てを視界に納める事ができた事に感じたのは、きれいではなく、凄いであった。

あれだけ鬱陶しく思っていた森も、今なら感謝することができ。この景色を見ることが出来た事に、そしてサイゼルと会えた事に。

「ああ、あっちだ。あれが今俺の住んでる場所」

「ふーん。あそこなんだ」

モンスターの跋扈する森の中にあるアイスフレームは、上空から見ても見逃してしまいそうなほど巧みに隠されていた。なんとか発見できたそれを、指さしてサイゼルに教える。

「そこまで送ってく？」

「いや、森を出たら適当に落としてくれてかまわね。方向さえ分かればどうにでもなるし」

空からの移動は本当に早く、二人が別れるまでであったという間だ。良平は今つないでいる手を離すのが名残惜しくなっている自分に気がついた。

だから、だろうか。柄にもない事を言ったのは。

「なあ、サイゼル」

「なによ」

「暇になったらでもいいし、ちょっとした気紛れでもいい。今度遊びに来いよ」

「……何言ってるのよ。あんたは人間で私は魔人でしょ」

「そうだ。良平は否定しない。けど、と続けた。

「俺たちは話し合える。人でも魔人でもだ。俺とサイゼルが《そう》だった。なら、誰が何かなんでどうでもいいと思わないか？」

「……本当にうるさくて、変な奴」

「そうだ。変な奴だよ、俺は。だから、俺が人間かどうかなんて気にするなよ」

つまらない、言葉遊びにもなっていない言い訳。けど世の中はそ

んなもの。気にさえしなければ、それで済んでしまふ。

「いつでも来いよ。いつでも待つてるからさ」

「行かないわよ」

「その時は酒と美味しい食い物でも用意しとく」

「行かないって言うてるでしょっ」

肩を怒らせながらムキになって反論するサイゼル。妙な所で子供っぽく、それがどこか可笑しい。

くくつと良平が含み笑いをする。それを見てサイゼルはまた怒ろうとしたが、すぐに矛を収めた。結局の所、目の前の男は変人なのだ、そう思つて諦めのため息をついた。

森を抜ける。この時も終わりだ。

「じゃあね、さよなら」

「ああ、またな」

両者が対照的な挨拶を交わし、どちらともなく手が離される。良平は地面に吸い寄せられる体を感じながら、サイゼルに手を振ったがすぐに顔をそらされてしまった。

落下からの着地はなれたものであったが、流石に距離が離れすぎていたのだろう。いつもの数倍の衝撃が足から全身を貫き、強烈なしびれに思わず顔を歪めた。

「いつつ……。ちよつと高すぎた」

痙攣してしばらく動きそうにない足をさすりながら、空を見る。

サイゼルはすでに豆粒ほどの大きさになっていた。

森の奥で膝を抱えていた彼女に声をかけたのは自己満足でしかなかったが、別れ際の顔を見てそれは間違いじゃなかったと思う事が出来た自分に、なんとなく満足する。

良平の現在地はアイスフリーム拠点のある森の手前だった。サイゼルは随分と近くに運んでくれたようだ。

ここまでくればあとは慣れた道とばかりに、森を進んでいく。たどり着いたアジトは、妙に久しぶりに思えた。時間にしてみれば4日も経っていないのだが、それだけ森の中の出来事の密度が高かつ

たという事だろう。

などと感傷に浸っていると、ふいにあることに気がついた。

（なーんか寂れてる、いや、大人しすぎる？）

アイスフレームに人気がなさすぎるのだ。いつもならばこの倍以上は騒がしい筈である。もしも何か大きな作戦があり、そちらに人が出払われているのであればアジト自体が緊張感に包まれているはず。なんにしろ、普通の状態でないのは明らかだ。

誰か、事情を知っていきそうな相手をと視線を巡らせて、一人見慣れた人間を見つけた。珍しい袴姿の、グリーン隊の副隊長。アイスフレームで一番多芸かつ便利な女。

「おい、カオル。カオル婆さんや、これは一体何事だね」

「あら、良平お爺さん、お帰りなさい。実は……まあ手早く言ってしまうと、組織縮小をしたんですよ」

「へえ。ウルザにしては随分大胆な事としたんだな」

「ええ。……本当にそうなら宜しいですけど」

顎に手を当てながら、心配そうに首をひねるカオル。どういう教育を受けたのか知らないが、一つ一つの動作が妙に様になっている。ちなみに、良平とカオルのやりとりはいつもの事だ。カオル・クインシー・神楽。アイスフレーム実働部隊でもっとも有能な女でありながら、もっとも冗談が通じてノリの良い女でもある。礼節が得意だと言いがたい良平にとっては、非常に会話の楽な相手であった。「ウルザは今いる？」

「いいえ、席を外しています。けどダニエルさんならいますよ」

そうか、と軽く返事をして本部塔へと向かう。カオルもなぜか付いてきたが、それはスルーした。

アイスフレームは組織改編の為誰もが忙しく走り回っていたが、やはり減った人の分は誤魔化せない。所々に少し前まではなかった空白がある。

本部の扉を開けると、いつにも増して多い書類に埋もれたダニエルが、紙の山の隙間から顔を見せた。大規模な人員削減のツケは、

彼に一番のしかかったのだろう。

「ちつす。山口良平ただ今帰りましたよ」

「うむ」

ダニエルの返事はそれだけだった。会話する暇も惜しいらしい。

「ちなみに俺って、クビになった？」

「なっていないせんよ」

「資金不足が原因で縮小したのに、資金源を手放してどうする」

「ふうん。なあ、これってウルザが言い出したんだって？」

その問いに対する返答は帰ってこなかった。かわりに帰ってきたのは、ため息と僅かな憤りだろうか。やはりこれはウルザの意思でやったのではなく、誰かに言われてやったのだらうと確信する。

（何を今更。いつかそうなる事は分かっていただろうに）

決断力の著しく欠けるウルザに手を回し、裏から彼女ごしにアイスフレームを操る。ウルザにそれを抵抗するだけの気力がないであろう事も含めて、こんなものはいつか誰かがやるだらうと簡単に予測できた事だ。そうされた事に何かしら良くない感情を感じるならば、とつくにレジスタンスのリーダーなど下ろしてしまふべきだった。

まあ、それでもウルザへの干渉をすぐさま止めないのは、その誰かの指示がそれほど悪くないと思っっているからだろう。もし誰かに指示されずに以前のままでいれば、少なくとも数年は早く資金不足での組織崩壊が早まっていた筈だ。

もつとも、その誰かがウルザを操る前はダニエルが操っていたようなものなのだが。指示する人間が変わり、組織の動きが少し大胆になった以上の違いなどないのだ。

この件に関して、良平は口を挟むつもりはない。財布事情くらいは分かっても、政治的なものまで含めた組織戦略など理解できないのだから。もつとも、アイスフレームという組織自体に全く入れ込んでいない良平からすれば、ウルザの身さえ無事ならどうでもいいと思っただけだ。

室内の空気が妙に湿度の高いものになる。あまり好きではない空気に、思わず口が開く。

「所で、俺が4日ぶりに帰ってきたのに、心配する声一つなかったね」

「そうだな」

「治安隊に捕まっていけない事は知っていましたから」

三白眼で睨む良平の視線などどこ吹く風。数日行方不明な程度では気にする必要も無いという態度である。

「それだってちよつとは心配してくれてもいいんじゃないか？」

「どうせ調子にのりすぎて道に迷いでもしたのだろう」

「それに、良平隊長がなんとかなると言う事もないでしょうし」

「いや、俺だって人間だからね？ 何かあるかもしれないからね」

ばつさりと切られるが、それでもなお食い下がる。それをカオルが、笑顔で迎撃した。

「では、何か危機でも？」

「……ないけど」

「なら宜しいではないですか」

話は終わりだとばかりに書類に戻るダニエル。カオルまでもが軽く挨拶を済ますと、本部から出ていった。

「なんだろう、この問答無用の敗北感」

ちよつと目頭に溜まった気がしなくもない涙を抑えながらカオルの後に続く。とりあえず誰か心配してくれていそうな人を探しながら、ふと思ひ出す。

（そついやサイズルにどつか攻め込むのか聞くの忘れてた）

下手をすれば多くの悲劇を生むその情報も、彼には所詮他人事でしかない。

良平を発見して上がる歓喜の声に、いつしか思い出した事さえ忘れていた。



いい事と言うのは人生に少なく、そして悪い事というのは波頭のように押し寄せてくる。それはもしかしたら悪い事の方が強く印象に残っているだけかもしれないが、つまるところそんな事実はどうでもいいのだ。本当はどうであれ、そう思ってしまうと言う事が重要なことから。

不幸があるからこそ幸福を実感できる。実に便利な言葉であり、真理だろう。しかし、彼女はこう思うのだ。それは不幸に見合った十分な幸福があるからこそ言える言葉であると。幸福と不幸が釣り合っていない者にとつては、慰めにすらならない。

ラ・サイゼル。生態系の頂点に立つと神に定められた究極生物、魔人。その一人。間違はなく世界最高の力を持つ者。

ラ・ハウゼル。魔人の一人にしてサイゼルの妹。同時に、サイゼルが嫉妬してやまない相手。妹と比べられ侮られる度に苦虫を噛み潰し続け、その感情は憎しみにも近い。だからであろう、ハウゼルは魔人の派閥、ホーネット派に所属した時、即座に対抗勢力に身を置いたのは。目的も大志もなく、ただの反骨心のみでの決定。ラ・ハウゼルに勝てればそれでよかった。

……いつからだろう。その憎しみだけを糧に日々を生きてきたのは。

サイゼルが所属する派閥——ケイブリス派と呼ばれる——に所属したところで、結局何かが変わるわけもなく。むしろ彼女を積極的に侮るものばかりがいるそこでは、望む生き方などできるわけがない。ただ一つ、己に向けられる感情を歯を食いしばりながら耐え、さらにそれを妹への憎しみに変換するという手段だけは上手くなっていた。

楽しくなどない人生。辛いことを誤魔化して生きる人生。幸福との釣り合いがとれない人生。

気付かなければ、感情に愚鈍のままでいれば、サイゼルは幸福になれただろうか。それは分からない。もしやすれば、気付いてしまった事で茨の道を歩み始めてしまったのかもしれない。

ただ一つ、同じ道を進み続けたとして。妹の鼻を明かしてやったその後は。一体何を考えてその後に耐えればいいのか。矛先がみつからない。そしてなにより、本当に耐え続けて生きていかなければいけないのか。あれやこれが嫌だという些末な話ではない。あの、見下す視線に。

——嫌だ。

ラ・サイゼルは結論する。もうそんな風に生きるのはごめんだっ

た。もつと自由に、幸せに生きたい。自分がそうで無かった事を知ってしまった今ではなおさら。

ラ・ハウゼルが気に入らないというのは今でも変わらない。しかし、その為に自分の人生を棒に振る気はもうない。

とは言え、今からどうにかできる問題ではないのだが。嫌いな上司の所に出向いて、いつも通りの嫌みを聞き、プレッシャーにさらされる。馬鹿な部下を動かして、言われたままを実行。そして何か見返りがあるわけでもなく。

実りのない生活。それを今しばらく続ける事に諦めを感じながら。ふと思い出す泉での出来事。自分を変人と言う人間との会話。

「あれは……楽しかったなあ」

久しく感じていなかった喜びを感じながら。サイゼルは自然と口に出していた事にも気付いていなかった。

嫉妬という感情は、案外簡単に発生する。

特別に何かきつかけが必要な訳ではないのだ。たとえば特別努力をするでもない人間が、努力の限りを尽くして手に入れた技術にすら発生しうる。それが嫉妬に値するだけの《根拠》がないと分かっている、感情から発生するそれは止めようがない。

もしその分野において、一角でも自負心がある場合は軽くでは済まされないダメージがある。それが誰でも知っているような有名人ではなく、自分と同じような土台を持った相手であるならばなおさら。その差が、どうやって発生したのかは誰にも分からないだろう。努力の差かも知れないし、環境の差かも知れない、或いは才能こそが決定打となった可能性もある。ただ、明確な差が横たわっているという事実だけが本人を苛むのだ。

論点もしくは視点をすり替えて誤魔化す事ができれば、まだ良かったであろうが。生憎と山口良平という人物は、それほど器用な性格をしていなかった。せめてもの抵抗と言えば、この感情を発生させた相手を苦々しく睨むだけだ。

何が悪かったか、それは分からない。技術を調べる努力を惜しんだ事はなく、またそれを獲得する為の鍛錬も自分を誤魔化したことではない。あらゆる方面に広く浅くと手を伸ばしたのは欠点と言えば欠点だが、それは引き出しの多さとイコールになる筈だ。

自分の程度をわきまえるならば、身の程知らずに《上》と背比べをしないのであれば、求めうる最高の実力がある自信があったのに――届かない。

日本にいた頃から気ままに、かつこだわりのある部分以外はそこそこで済ませていた彼にとって、初めてと言つていい痛烈な敗北。自分の中にこれほど強烈な感情があるなど知らなかった。

この激情をどう晴らせばいいのか分からない。燃えたぎる嫉妬を

相手にぶつければいいのか。しかし、それこそ敗北を決定付かせる。どうしても、及ばない。

自覚した瞬間あふれた滾りを解消する方法、それは惨めに絶叫する事だった。

「ちくしょおおおおおお！」

「うわお！ な、なんだすか！？」

びくり、とその場に居た全員が驚愕に震える。そして、床に両手両足を投げ出して頂垂れる良平に注目した。

「にーちゃん、どうしたの？」

「良平さん、おなかいたいのか？ だいじょうぶ？」

孤児院の子供達が良平に寄ってきて、体を擦りながら問いかけた。それに全く大丈夫ではない風で、大丈夫だとかすれた声で答える。

「ちよつと、本当に大丈夫？ 何があつたの？」

「お、おら何かしちゃったですか？」

子供に続いてロッキーとキムチまでもが問いかける。

良平は震える手で二人と制した。そして、そのまま手を持ち上げるとテーブルの上に乗っている料理にフォークを突き刺し、口の中に乱暴に放り込む。濃厚な味わい、しかしくどすぎない絶妙なバランスだ。

「お……俺より美味しいじゃないかよおおお……っ！」

「あ、あー。そういう事だったのね」

「おらは何がなんだか……」

絶叫しながら滝のような涙を流すという器用な真似をする良平に、未だ事情が飲み込めないとロッキーが困惑する。

「ロッキーは気にしなくて大丈夫よ。彼が勝手にへこんでるだけだから」

口の中にもものを入れたまま崩れ落ちた敗者を見下ろしながら、キムチ。呆れを通り越して哀れんだ視線が降り注ぐ。

子供達は良平を慰めるのに飽きたのか、背中に乗っておもちや代わりにしていた。唯一カーマ・アトランジャだけは未だに頭をなで

続けているが。

料理は、彼が唯一と言つていい本気で努力し自身を持っている特技である。剣技、と言うか戦闘も一応特技には分類されるのだろうが、それは半ば必要に迫られてであり、本気で自分から望んだわけではない。その特技で、素人同士比べ合つて負けるとは思つていなかった。

フォークを力一杯つかんで、ロッキーの作った料理——名前は分からない——を思い切り掻き込んだ。瞳から流れるしよっぱいものは、きつと涙ではない。

「っ……畜生、美味いじゃねえかよお！」

「どうするだ……おら、謝ればいいだか？ それとも喜ばいいだか？」

「ほつときなさい」

子供達に無遠慮に叩かれている良平を見ながらうめくキムチ。元から尊敬されているとは言いがたかったが、これはひどいといしか言いようのない様になっている。

ばたん。遠くでドアの開く音がする。来客かとキムチが腰を浮かしたが、音は無遠慮に近づいてきた。

「がはは、キムチさん遊びに……うお、なんじゃこりゃ」

いつも通りの威勢の良い笑いを携えるランスで会ったが、良平を見た瞬間に顔を歪めた。今の良平は、泣きながら料理を食べる変な人でしかない。

「ああ、ランス。良く来てくれた！一緒に酒飲もう！」

「なんで俺が男なんぞと飲まなきゃ……だああ、まとわりつくな鬱陶しい！」

張り付く良平を肘で叩きながら必死に引きはがそうとするランス。それでもお構いなしに張り付く良平。

「大丈夫だ、キムチも一緒に飲むから！」

「おお、なら飲んでやらんこともない。ほらキムチさん、さっさと座れ。ロッキーはがきんちよどもと遊んでろ。あと貴様はいい加減

離れる！」

「はいだす、ランス様」

「も……仕方ないわね」

無理矢理巻き添えを作る良平。ランスは喜び、キムチは悪ガキを相手にするような顔をする。

ランスは良平を蹴り飛ばすと、自分の隣の席を叩く。勢いのまま離れた良平は、部屋の隅に置いてあった酒瓶を持って戻る。

既にコップは用意されており、三つのグラスに注ぐとそれぞれが手元に寄せる。軽くグラスを合わせたあとに、計ったわけでもないが同時に口をつけた。

すつと溶けるように消えていく酒。誰のコップにも残ってはいない。

最初に口を開いたのは、ランスであった。一滴も残らないグラスの底を見ながら、驚嘆に目を見開いている。

「なんじゃこりゃ……むちゃくちゃ美味かったぞ」

「まあな。酒が好きだから、正直かなり金をかけてるし」

「この味に慣れちゃうと大変よねー」

アルコールに赤らめた顔に手を当てながら、僅かに熱い吐息を吐くキムチ。

普段絶対に酒につきあわないキムチがこうして同じ席に座っているのは、完全に良平がかき集めている美味しい酒が目的なのを知っている。同時に、良平にとっても酒の席につきあってくれるいい相手だ。

一人酒をしない主義、と言うのは単純に酒が美味くても楽しみがない為である。しかし、アイスフリームには一緒に飲んで楽しい人間は数少なく、そもそも堅物が多く酒につきあう人間自体が少数派だった。呑み会う時のメンバーは、殆どがキムチとアベルト。さらに呑み仲間が増えるのならば言う事はない。

ちなみに、良平には人に振る舞う酒をけちる主義はなく、出すものは全て美味だ。秘蔵の酒でも平気で宴に差し出すという、ある意

味金の使い方を全く分かっていないやり方である。

「うむ、これだけ美味いなら呑んでやらんこともないぞ」

「そうだろうそうだろう、こんだけ美味しい酒もなかなかないぜ。何せ4000GOLDもしたからな」

「そんなにすんのかこれ」

「子供達の手前あんまり呑んじやだめだつて分かってるんだけど、ついつい手が伸びちゃうのよね」

ちなみに、良平の感覚では1GOLDがだいたい100円から200円くらいだと思っている。

40万円以上もする酒。日本にいた頃の良平なら絶対に手の出ない値段だ。レアドロップの技能と高い戦闘能力、この両方を生かして金を稼いでいるからこそその無駄遣いである。

「まあまあ、美味けりやどうでもいいっしょ。ほらもう一杯」

「おつとつと。……っかー、うまい！」

「ふう。本当、美味しいわ」

上品、と言うにはやや野性味の強い味わい。しかし、下に残るような不快さはない。飽きずいくらでも飲めるの典型のような酒だ。

「俺ももう一杯。あ、キムチ。この残りをロツキーに渡しといてよ。今日悪いことしちゃったし」

「なんだ、いらんだろそんなもん。それより俺によこせ」

「ダメよ。子供の世話も見て貰っちゃってるんだから」

「それにまだ別の酒があるんだから。そんなにがつつすんなよ」

「ちつ。そつちで我慢してやるから早くそそげ」

早くも二本目のコルクが解放される。透き通る琥珀色が透明なグラスを彩り、そしてまた消えた。

ちなみに、今はまだ昼である。

「あははははは！ 笑えよ、料理で負けた俺を！」

「がはははは！ その通りだ、世界中の美女は俺様のものだ！」

「……あなたたち」

ランスと良平はそれぞれ明後日の方向を向きながら、全力で絶叫している。完全に悪酔いしていた。互いの会話がかみ合っていない事にすら気付いていない可能性がある。

二人を尻目に見ながら、キムチがため息を一つ。視線の先の酒瓶は、もう殆どが空になっている。

この姿を見て信じられるものは少ないだろうが、彼らは呑み方を弁えている。良平は精神的ダメージからやけ酒をしたのであり、ランスも呑んだことのない美味い酒で限界を見誤ったのだ。そうであれば、キムチが子供達の近くで酒を飲むことを許可するはずがない。

「そーやーよー、ランス」

「んあん？」

「ええつと、誰だっけなあ？ サーナキア？ だっけ？ まあ誰でもいいか。前にここを辞めた奴らが暴れてるからしばきに行ったんだけど、傭兵だかやとって返り討ちにあっただんど。んで、今日シルバーン所がもっかいしばきに行くらしいぜ」

コップを振りながら——既に何も入っていない——横目にランスを見る。真っ赤な顔でぐるぐると首を回していた。

「ん……サーナキアちゃんかー。からかったら面白そうだなー。でもめんどい」

「そっか」

唇につけられるコップ、しかしアルコールは落ちてこない。いくらコップを振っても無いものはなく、口寂しさだけが残った。

「なんか話を聞いた限りだと、腕利きの金髪美人らしいけどなー、そうか行かないかー」

「馬鹿者、それを早く言え。よし行くぞ」

ランスが良平の襟首をつかんで引きずり、それにバランスを崩しそつにある。なんとか片足でバランスを取り直すと、ランスに続い

て歩き出した。

「ちよつと貴方達！ どこに行くつもりなの！」

「どこって……どこだ？」

「秋の森の北西、だったような気がする」

「そこだ」

「そこじゃないでしょ」

子供を叱るように僅かに声を荒らげるキムチ。しかし、そんなものは酔っ払いの二人には通用しない。

「大丈夫だキムチ。そこに強敵がいるからな」

「ああ、大丈夫だぞキムチさん。そこに美女がいるからな」

「その言動が既に大丈夫じゃないでしょうが」

全く答えになっていない答えを返しつつ、二人は孤児院から飛び出していく。キムチはそれを追おうとしたが、全く無駄だった。いくら酔って千鳥足だとは言え、高レベル戦士が走り出せば追い付くわけがない。

「や、ちよ、本当に止めなさい貴方たちー！」

背後からのエールを受けて、子鹿のような足取りで旅立っていった。

待機所にある秋の森入り口に設定してある帰り木（貴重品）を勝手に持ち出して、いざ出発せんとした時だ。

「探しましたよランスさん」

声をかけたのは、アベルトを代表するブルー隊。数人がかりで大きな袋を抱えている。

「まさか探している相手が魔法使いだとは……って酒臭い。ランスさん、もしかして酔ってます？」

「なんだとー！ この大英雄の俺様が酒ごときに酔うわけないだろーがー！」

「うむ、ちよつと秋の森にバトったついでに美女を捕まえてくるだけであーる」

「完全に酔ってますね」

平常の笑顔を崩さず、しかし若干距離を置くアベルト。他の隊員もそれに習い、荷物を置くと二人から離れた。

乱暴に落とされる荷物、その中からくぐもった悲鳴が上がる。

「んで、なんだこりゃ」

「ランスさんご依頼の品ですよ」

「俺は知らんぞ」

「あれ、おかしいなあ？ ウルザ様からランスさんの依頼だって聞いたんだけど」

否定しつつ荷物の封を開けるランス。その中から、ピンクのマリモが出てくる。続いて猿轡を噛まされた顔が出てきた事实に、良平はぎょつとした。

「なんだ、シイルではないか」

「あ……うう……ぐすつ。ランス様あー！」

ランスに抱きつくシイルを戦慄した瞳で見続ける良平。もこもこピンクはそれほど衝撃的だった。

確かにこの世界に来ていろんな意味で非常識かつカラフルな事には慣れたつもりだ。しかし、それは無法と言う事ではなく、あくまでここではここの法則がある。

たとえば髪の色。志津香は深緑であつたし、マリアも濃い青であつた。ウルザはやや煤けた金で、アベルトは灰色、孤児院にいるアルフラ・レイは深い紫色だ。やはり髪の色は元の世界でも常識的な色か、そうでなければ暗色系になるのだろうと思っていた。ここでもさかの蛍光色、シヨッキングピンクの登場である。

この世界はヤバイ。凄いではなくヤバイ。改めて胸に刻む良平であつた。

「私、ランス様がどうなったのかとても心配で……」

「うむ、丁度いい。シイル付いてこい」

「もう死んじゃったんじゃ……え？ あ、はい」

感動の再会も酔っ払いには通用せず、一瞬で中断させられた。涙目を一転させて呆然とするシイル。

「よし行け良平」

「あ……ああ」

「あの、どこに」

「あ、それ帰り木じゃないですか。使っちゃ駄目で……」

命ずるランス。ピンクに及び腰の良平。未だ話が見えないシル。そして、注意しようとアベルト。

全てを無視して、帰り木は発動した。

秋の森について真つ先にした事は、それっぽい方向に全力疾走する事だった。いきなり笑い声を上げて走り出す二人、ぎよつとしながらも必至について行くシル、そして笑う疾走者に若干引きながら遠巻きに見ているだけのモンスター。

「はあ……ひい……ランス、様っ！ 待って……下さい……」

後ろから悲鳴のような哀願が届くが、声が出せるなら大丈夫とばかりに進行し続ける。木々の間を抜け、なんか足下にあつた茸を吹き飛ばし、アジトっぽい所の扉を粉碎し。

トラップが多数見受けられたが、それは先に入っていると思われるサーナキアが無力化したのだろう、何一つ発動しなかった。通路を並んで早足に進んでいくランスと良平、その後ろで荒くなっている呼吸に声をかけることもままならずシル。

アジトを進んでいくと、剣劇の音が石造りの内側で響いてくる。

途中襲いかかってくる敵を切りながら進んでいき、音の発生地であるう最奥の扉を蹴破った。

「な！？ 何者だ！」

その部屋にはサーナキアと、それを囲む十数人の元アイスフレイム現夜盗。そして、その影に隠れるように金髪の頭がちょこんと覗いている。

シルバー隊は既に全滅したのか、それとも撤退したのか。サーナ

キア以外には誰も居ない。そして残った彼女も、有り体に言えば絶体絶命である。サーナキアが弱いとは言わないが、少なくともそこそこ使える人間10人以上に囲まれ、さらにそれらが腕利きと認識出来る程度には強い用心棒と同時に戦って勝てるほどの腕前はない。彼女は敵を細剣で敵を牽制しながらも、視線だけを背後に向けて確認。

「良平！ それにランスか！ 応援に来て…… 応援に、来たんだよね？」

危機的状況だと彼女自身も理解していたのだらう、二人の到着に素直に喜び、そして思わず確認した。

「はいそうです！ 強い傭兵さんと戦いにきました！」

「美人の用心棒ちゃんとやって、ついでにサーナキアちゃんをからかいに来たのだ。がははは」

普段のサーナキアであれば反論しただらう。しかし今は呆れて物も言えない。

戦闘能力では明らかにアイスフレームのトップ2である。その二人が来るというのは、本来ならばとても心強い事であらう。両者共に顔を赤らめて、立っているだけでふらふらと揺れながら焦点の合わない瞳を周囲に送っているでなければ。その後ろでは、ピンクの頭に白く露出度の高い服を着た女がたどり着くと同時に崩れ落ちていた。

呆れて物も言えない、そう言いたげに頭を抱えるサーナキア。

「あれ、ランスさん？」

と、今まで夜盗に隠れて前を確認しようとしてぴょんぴょん飛び跳ねていた金髪が声を上げる。ようやく体を傾けて脇から見ることを思いついたらしい。むさ苦しい男達の隙間から見える顔は、美人と言うには垂れ目で穏やかに過ぎ、かわいいと言うには気品がある。

「おお、リズナではないか」

「ランス、あれ誰だ？ 強い傭兵か？」

「違う、俺の女だ。がははは！」

一番強いであろう奴が敵ではないという事実に落胆する。そして、腰から剣を取り出すとそれを垂れ下げながら、視線を回して敵らしき人物を捉えようとしていた。元アイスフレームである夜盗らは、当然良平の実力を知っている。束になっても時間稼ぎすらできないであろう相手が、酔った勢いで戦おうとしている事に恐怖した。

「お、おいお前。なんで俺たちの用心棒と仲が良さげなんだ！」

「うむ、相変わらず美人だ。グッドだぞ」

「え？ ああ、その。ありがとうございます……？」

状況を掴めぬリズナにずんずんと近づくランス。夜盗らはそれを遮ろうと武器を握る手に力を入れたが、その瞬間良平の眼が追跡、咄嗟に手放して即両断を回避した。

「良平隊長も、お、俺たちを切りに来たのか！？」

「おい良平。お前何をしてるんだ！ 酒が入ってるだろうが！」

「えへへー」

「何を笑っているんだ馬鹿者がー！」

サーナキアの右ストレートが顔にめり込む。しかし、レベルに開きがありステータスにも差があり、さらに消耗しきっていればダメージなどないも同然だ。

頬に右が突き刺さっても愛想笑いならぬ酔っ払い笑いを続ける良平。サーナキアのストレスゲージはレッドゾーンを振り切りそうだ。

「な、なんだよおい！ 話を……っ！」

「あの、ランスさん酔ってます？」

「なにをー！ 俺様のような英雄が酒を飲めども飲まれるはずがなかろうが！ それは吞まれたと見せかけて吞んだと言う事だー！ がははははは！」

「え？ ええと、はい……？ あと後ろでシルさんが倒れてるんですけど」

「んー？ おお、シル。そんな所で寝転がってどうした？ そんな色気のない寝方ではエッチしてやらんぞ」

なんとか回答しようとするシル。しかし、それは声にならず喉

から抜け出る空気の音だけが響く。ばしばしと背を叩くランスにも答える余裕はなく、青い顔をして肩で息をつくだけだ。

「いい加減にしるおおおお！」

絶叫が室内に響く。いままでぐだぐだな会話をしていた一同はぴたりと止まり、一斉に男を見た。

その男――腰に一番程度のいい剣をさしている。恐らく中心人物――は怒りで顔を染めながら、目尻に涙を溜めていた。

「話を聞けよお前ら！ 俺たちを相手しに来たんだろ！ なものになんで無視するんだああああ！」

「おい良平、あいつ誰か知ってるか？」

「え？ うーん、見覚えねえなあ」

「ふざけんな！ クビになった途端に顔まで忘れやがって！」

二人の隊長の知らない人発言に、地団駄を踏んで頭をかきむしる暫定盗賊頭。

「お頭、押さえて下さい！」

「そうですよ！ それに刺激しない方がいいですって！」

「うぐっ！ …… そうだな」

仲間の言葉で一応冷静さを取り戻す確定盗賊頭。しかし、既に手遅れである。

「お前がリーダーか。じゃあお前を斬れば全部解決する？」

「ヒイツ！ お、俺たちはそんな脅しに屈しないぞ！」

「なにを言っているのだ。全員ぶつ殺せば後腐れ無く解決するぞ」

「死刑宣告が来た！？ くっ、誰がだまってやられるか！」

もう殆どやけくそになりながら、ランスに向かって剣を構える盗賊達。リズナはランスに寄ったままおろおろとしていた。そして、輪から外され一人放置された良平は寂しそうにしている。

盗賊達は与しやすいとランスに照準を絞ったが、隊長二人の間にどちらかの方が弱いと断言できるほどの差は無い。現時点では良平の方が確かに強いが、それでもランスがどうにも出来ないほど実力差ではないのだ。これは単純に、盗賊達がランスを過小評価してい

る為に起こっている現象である。

ランスがアイスフレイムに来て日が浅い上に、目立った任務はサーベルナイト討伐しかない。それも良平が途中から助けに向かったのが知れており、彼自身の戦闘能力付いては知られていないのだ。グリーン隊3名で、しかも実質的にはほぼ一人でサーベルナイトを敗退に追いやった事を知る者は少ない。

態度が態度だけに人からの好悪がはつきりするランスは、陰悪な感情を持つ人間からはシルバー隊壊滅も不意打ちをした卑怯者くらいにしか思われていない。本当の実力をしっけていたら、たとえ酔っていても絶対に剣を向けようとは思わなかったであろう。

「お？　なんだ貴様らやるのか？」

酔って座った目で睨むランス。彼の左腕が爆ぜるように振るわれたのに気付いたのは、リズナと良平だけであつた。

右側から水平に弧を描き左に抜ける剣筋。それには微弱ながらも闘気が載せられており、向けられる武器に接触した瞬間、次々と砕いていった。鈍色の塵が舞う。構えられた武器の全てが半ばから消失し、床に落ちてけたたましい音を上げる。

「お？　おお？　首が飛んでない……。じゃあもう一度だな」

「ひiiiiiiii！　ま、ちよつ、待つて下さいお願いします！」

先ほどまでの強気はどこへやら、一気に弱腰になる。彼らからしてみれば酔っ払いの案パイだと思っていた相手が化け物隊長レベルだつたのだ、詐欺も良いところと言う感想なのだろう。

ぶんぶんと剣を振り回すランスに、慌てて後ずさりして頭を下げる。しかし、ランスからすればそんなものは関係ないのでとっとと殺すべく進んだ。

「あの、ランスさん」

「んあ？」

「この人達は悪い宇宙人からみんなを守っていたのであつて、悪いことをしてるわけでは」

「はあ？」

「お前は何を言っているんだ」

突っ込みを入れたのは今まで蚊帳の外であつた良平だ。輪の中に入るには丁度良いと判断したのだらう。それを外から眺める盗賊達
は恐々としていたが。

「ちゃんと最初から言え。何が何だか分からん」

「あ、はい。私、あの時ランスさんと分かれた後実家に帰ったんです。けど両親は他界していて、家もなくなっていました。それで、どうしようかと歩いている所をこの人達に襲われたんです。勝ちましたんですけど、その時にお願ひされて。なんでも悪い宇宙人からみんなを守るために戦っているから力を貸してくれと言われたんです。だから、それから用心棒みたいな事をしているんですけど。だからこの人達は悪くないと思います」

「お前……また騙されてるのか」

「民間人襲つといて悪くないもクソもないだろ」

良平とランスに呆然とした視線を送られ、肩をすくませるリズナ「う、嘘だ！俺たちはゼスの為に戦う戦士なんだ、そんな事はしていない！」

「え……はい。でも……」

「お前らうるさい。リズナ、面倒だから俺様があいつらかどっちか選べ」

ふらりと盗賊達とランスを見比べ、そしてランスの胸元に飛び込むりズナ。それを当然と頷き笑う。

「うむ、当然の結果だな」

「はい。……あの、ランスさん。やつぱり酔ってませんか？」

「む。酔つてないと言っているだろう。そんな言う事聞けないやつはこうしてやる」

リズナの頬を挟んでこね回すランス。リズナは抵抗しようとして、が
んばって手を払おうとしていた。

「んじゃ、お前から有罪ね。ちくちくの刑です」

「ちよ、まあああああ！お願い助けてええええええ！」

伸縮自在な剣の先端を夜盗達に向けると、それを高速で出し入れする。腕など僅かに照準を変える程度にしか動かしてないのに、壁には無数の突き刺さった後が出来る。石の壁を線状に寸断していく様子は、どう控えめに見てもちくちくなどというかわいらしいものではない。

巧みに盗賊が抜け出せないよう位置を調整して、妙な格好で逃げ惑う彼らを見て爆笑。

「あははははは！ 変な格好！ あははははははは！」

「おお、むちゃくちゃ柔らかい。気持ちいいぞ、がはははははは！」

「ひいいいいい！ もう自首するから助けてええええええ！」

「むにー、むにー」

こうして盗賊達の短い天下は終わりを告げたのだ。

ちなみに、サーナキアは彼らに関わることを拒否、早々に退散しシルルの看病をしていた。



アイスフレームで鐘が鳴る。決して大きな音でないそれは、実戦部隊の帰還を告げるものだ。

何かを誤魔化すように書類仕事にのめり込んでいたウルザは、その音を聞いて跳ねるように顔を上げた。

今回の任務、夜盗と化してしまった元アイスフレームメンバーの討伐は、初っ端から失敗した。そして二度目の討伐も、シルバー隊のメンバーが次々と敗退し戻ってきた事でウルザの不安は増していた。

いつまで経ってもサーナキアが帰ってこない。その不安に押しつぶされそうになっていたが、やっとその霧も晴れてくれた。

「ダニエル、お願い」

「ああ」

せめてねぎらいの言葉を。そう思っただニエルに連れられ、本部を飛び出す。

広場には僅かに円が出来ていた。きつと帰還したサーナキアを称えているのだろう。そう思い、ウルザも輪の中に入る。道を空けて貰う時、誰もが微妙な顔をしていたのが気になったが。

そして、ウルザはぎよつとした。車椅子ごしに、いつも冷静沈着なダニエルまでもが一瞬驚愕したのが窺える。

「おー、ウルザちゃん、出迎えご苦労。がはははは」

「うえへへへへ。なんだよ強い傭兵居なかったじゃんかよ。へへへへへへへ」

「えつと、あの、その……。よろしく願いします？」

「……………」

「……ただ今帰りましたウルザ様」

いないはずの酔っ払い二人。礼儀正しく挨拶するが見覚えのない美人。背負われてぐったりしている、やはり見覚えのない誰か。そして、ぐったりした女子を背負ってやさぐれているサーナキア。予想だにしない光景に、ウルザは混乱した。

「サーナキアさん、これは一体どういう事で……？」

「さあ。そっちの馬鹿どもに聞いて下さい」

と言に残し、背負った女性を連れてさっさと退散するサーナキア。彼女を寝かしつけたら帰ってきてくれると信じたかったが、それがかなわないであろうとも直感していた。生真面目で忠誠心の厚いサーナキアがここまで投げやりになっている事実には戦慄しながら、残りのメンバーを見る。

頼りなさそうにおろおろしている、恐らく魔法使いであろう女性。そして酔っ払いが二人。

（何を聞けと言うの）

どう考えても実りある話ができなさそうな人間ばかり残っている。ウルザは少し泣きそうになった。

「おお、ウルザちゃん。そう言えばだ」

「え？ あ、はい。なんですか？」

「俺様の隊にシイルとリスナを入れるぞ。二人とも魔法使いだから役に立つ。がはは」

ざわりと喧噪が多くなるのを感じた。中には明らかに魔法使いを誹る言葉まで混ざっている。

魔法使いとそうでない人の融和を望んでいるウルザからしてみれば、その意見は願ってもない事なのであるが。そういうのは素面の時に言つて欲しかったと思うのは贅沢だろうか。

「構いません。手続きはしておきます」

「そんな！」

「なんで魔法使いなんかを！」

「うるさい黙れ。気にいらん奴は前に出ろ、斬つてやる」

ぶんぶんと左手の剣を振り回すランスに、一斉に静まる。一気に剣呑な雰囲気を見せるランスに、しかし良平は無遠慮に近づき肩を叩いた。

「まーまー。あれだ、お前ん所でダメだったら俺の隊に入れりゃーいーよ」

「駄目だ死ね。俺の女を誰がやるか」

「取りゃーしねーっつーの！ あははははは！」

「うむその通りだ！ よく分かつているな、がはははは！」

微妙に繋がっていない会話で大笑いを始める二人。壺にでもはまつたのか、そのまま地面を転がりながら笑い続ける。それを見たウルザは、ちよつと頭が痛くなった。

ウルザの後ろからため息。ダニエルが前に出ると、転がる二人の鳩尾につま先をめり込ませた。

「ゲフツ」

「ゴフッ」

肺から息を絞り出し、先ほどとは別の意味で痙攣する二人。ラン
スらとダニエルを見比べて、リズナが慌てふためていた。

「いくぞウルザ」

「あの……二人が」

「いいから」

「でも……え？」

転がったままの二人を心配するウルザに、積極的に放置させよう
とするダニエル。心配する彼女をよそに、車椅子を強制的に反転さ
せた。それに強く抵抗しなかったのは、ウルザ自身今の二人に関わ
りたくないと思っていたからかもしれない。

なんにしろ、この最後までグダグダな出来事が、シイル・プライ
ンとリズナ・ランフビットがレジスタンスに参戦した日の話である。

なお、余談ではあるが翌日に。

「ん？ おお、シイルではないか。いつの間に来ていたのだ。戻っ
てきたから一言挨拶しろ馬鹿者」

「うわーん！ ランス様のばかー！」

などという経緯があり。

シイルの勢いに押されるランスという、非常に珍しい光景があっ
た。

「なんだ、簡単に侵入できるではないか」
(だろうな)

心の中で呟く良平。樂觀を決めるランスの後ろを歩きながら、周囲を見回しつつ左指を常に剣の柄に絡めて、すぐに引き抜くことができるように準備しておく。敵地のど真ん中、それも明らかに来て下さいと言わんばかりの警備状況の中に、無警戒で入っていく趣味はない。

事の始まりは、ウルザから出された一つの命令であつた。曰く、ゼスでもっとも悪辣なゼス共同銀行から金を盗み出してこい。全くアイスフレームらしくない活動に一時面食らつたが、ウルザの気落ちした顔とランスの楽しそうな表情で、だいたい何があつたかは悟つた。

つい先日 of 人員整理の件も、女ばかりが残つた事を考慮すればウルザの後ろに誰が居たか非常に分かりやすい。なるほど、発案がランスだとすれば、前回も今回も分かりやすい。それに、良平としてはむしろ今の活動の方が好感が持てる。

サーナキアやカオルは強盗という行為に否定的な反応を示していた。その時はランスがウルザを引き合いに出して止めていたが、不満は今でも持っているだろう。

警戒を一時中断した良平は、横目にカオルの表情を盗み見た。表面上はいつもの澄まし顔である。自分を偽るのが上手い人間から本心を盗み出すほど人を見る目がないのは重々承知していたが、それでもやはり気にはなってしまうのだ。強盗の件を非引きずっていても、最低限邪魔だけはしないでいてくれるだろうか。

——カオル・クインシー・神楽という人物は多方面に寛容に見えて、その実潔癖症。それが良平のイメージだ。征伐のミトとか言う義賊もときに崇拜に近い感情を持っている事からもそれが分かる。

つまるところ、今回の任務には不安材料が多いのだ。だから言
って高確率で戦闘になる任務を放棄するわけにもいかず、良平は内
心で嘆息するしかない。

地下道を抜け、狭い道を抜けて。地図が合っていれば、もうすぐ
ゼス共同銀行に入る。

「あ、ありましたよランス様」

「この先がそうっぽいですだ」

ランスに命じられて先頭を勤めていたロッキーと、そのすぐ後ろ
で松明を持っていたシル。ロッキーは魔法使いであるシルに隔
意があるようだが、ランスに睨まれてからは少なくとも表に出そう
とはしていない。とは言え、依然二人の間に会話が成立しないのだ
が。

ロッキーの先導の元抜けていくと、そこは銀行の一室であつた。

やはり、と確信しながら地図を見下ろす。これは進入される事を前
提に作られたものであつたのだ。下手をすれば、地図自体がゼス共
同銀行から意図的に流出した可能性もある。

そして、スピーカーからざりざりと耳障りな音が響いた。

『やあ、薄汚い2級市民諸君。ようこそゼス共同銀行へ。ここは君
たちゴミくずが命をかけて金を得ようとする場所だ。見事突破して
金を手に逃げるか、それともここで生涯を終えるか。さあ、挑戦し
てみせるがいい』

そこでぶつりと放送が消える。恐らく人を閤知した時に自然と流
れるようになっていたのだろう。その後は反応がなかった。

「ランス様！ 通路が……！」

「分厚い鉄板で閉じられてしまっていますね。ランスさん、どうし
ましょう」

慌てるシルを落ち着けようとしたわけでもないのだろうが、お
つとりと続くリズナ。確かに閉じ込められてしまったようだ。

「甘い密で2級市民を誘い、のこのこと現れた奴をなぶり殺して喜
ぶ訳か。分かりやすい構図だな」

「そんな……ひどいです」

「良平隊長なら切れるのではないですか？　少し試して……」
「いらん」

退路を確保しようとするカオルを切り捨てて、ランス。視線は進路だけを向いている。

「どうせそこをブチ破っても帰れないようにしてあるだろ。それにまだ金も取ってないのに帰る事ばかり考えてどうする」

腰に差していた剣が抜かれる。鈍色に反射する光は、ランスの感情を表しているようにも見えた。

「俺様をコケにしたツケを払わせてやるぞ」

ランスの強烈な蹴りは、そのまま部屋の扉に激突、容易く粉碎した。

深いため息をつくカオル。それは、ランスがやめないと言う事を理解してしまった、諦めのもののように聞こえた。

「まあ、油断するつもりは当然ないけどさ。あんまり警戒しすぎる必要もないと思うぜ」

「それは、なぜですか？」

和服を動きやすく調整し、薙刀を構えたりズナが問う。

「ここの警備はあくまで2級市民を基準に作られているという事さ。そして、いくら金庫なんかで隔離してるとは言え貴重品が近くにあるんならそんなに派手な真似はできないよ。それが兵力であっても、トラップであつてもさ。幸いこっちは戦力だけなら下手な部隊よりよっぽど上だしね。一番危険なのは『静かで穏やかな』トラップだけど、逆に言うとその外は気にする必要が無い」

「ええ、その通りですね。良平隊長、以外と知恵が回るのですね」
「……」

口を開きながら素直に受け取るリズナとは反対に、なぜか言葉のナイフを突き刺すカオル。良平は冷や汗を垂らしながら、鋭い突きを放った相手の顔を見た。心なしか、いつもより笑顔が深い気がする。

カオルの言葉を忘れたことにして、ランス達に続いていった。被害妄想だろうか、背後からの視線が妙に痛い。

「きゃあ！」

悲鳴が響いた瞬間、考えるより早く良平の体は動いていた。緩んでいた指が柄を柔らかく掴み、腰の固定具から外す。剣が伸びると同時に構えを終えて一閃。飛翔する刃は、先行していた三人の隙間をくぐり抜けてその奥の対象を切り刻んだ。

体を強ばらせたまま茫然としているシルに、良平は声をかけた。

「大丈夫？ 見た感じ怪我はないけど」

「は、はい。大丈夫です」

「うおお、ちよつとびっくりしたぞ。なんでこんな所でモンスターが出てくるんだ」

細切れになつて落ちたそれは、モンスターの体であった。

「なるほど、ズルキ長官はこうして2級市民をなぶっていたのですか。居るはずのないモンスターと予期せぬ戦闘を強いられる2級市民。……最悪の発想ですね」

「でも、単体の能力は低いぜ。もしもがあつた時、ここの警備連中でもないとかできる質のモンスターしかないはずだ。そうじゃないと今度は自分の身が危険だからな」

「ちつ。鬱陶しい真似を。おい良平、前に出てこい。シルとリズナは真ん中だ。魔法の準備をしておけ。ロッキー、貴様は後ろでカオルの言う事を聞いて盾をしている。一匹でも抜いたら許さんぞ」

「はいだす」

「ええと、補助魔法は……」

「怪我をした人は言つて下さい。すぐに治しますから」

それぞれ返事をしながら、ランスの言うとおりの陣形へ。良平も同意し、ランスの隣へと並んだ。

本来ならば両手に剣を構えるべきなのだろうが、ここにはトラップが多数ある。両手が埋まるのを嫌って、わざと利き手である右手だけ空かせていた。

流石に一步ごとにトラップと言う事もないであろう、良平達はそこそこ警戒しつつも進んでいく。そして、周囲を見回していくうちに壁にあるものを見つけ、良平は啞然とする。

ボタンだった。

床には不自然な切れ目が存在し、壁に不自然なプッシュ式スイッチ。あからさますぎて反応に困る。

「ん？ なんだこれは」

「ちょ、まっ！」

良平が止める間もなく、ランスがボタンを押し込む。そして、彼らは宙に投げ出された。

いきなり空中に身を置かれる不安定な感覚、つま先が硬い地面を食う事が出来ない不安、そして底の見えない奈落。咄嗟に左手を限界まで伸ばし、ブレードの下面に飛び出た部分を床に突き立てて落ち行く体を停止しようとする。しかし、良平が初めて手にした武器、プレートブレードは峰側ですらコンクリートを容易く裂き、僅か一瞬の停止にしかない。

（ッ……まずい！）

剣を突き刺す頃には既に動いていた右手が、背中 of 右手用プレートブレードの更に奥、サバイバルナイフを逆手に掴んでいた。引き抜くと同時に壁に叩きつけるように突き刺されるサバイバルナイフ。固い壁と激突し刃を欠けさせながら、しかし良平の要求する機能を果たしてくれた。

落下から急激に止まる体。そして、今度は足から引つ張られる衝撃にきしみを上げるサバイバルナイフ。壁とナイフ、両方から崩壊を予感させる嫌な音が響いた。しばらく体を動かさぬよう慎重に待ち、そして大丈夫そうだとあたりをつけられた所でやっと一息つけた。

「ありがとう、不精者の俺ありがとう、本当にありがとう！俺もう絶対に几帳面になんてならないって誓うよ……！」

「おい、良平。は、早く上がれ」

「さて、さて、いいか、動くなよ？ マジでやばいからな」

左手の剣を戻した後、両手でサバイバルナイフを掴み体を持ち上げる。本当はナイフにこれ以上負担をかけたくなかったが、指を引っかけられそうな場所が見当たらなかったのだ。

脇を締めて体を固定し、片腕を伸ばしてなんとか床を掴むことに成功。今度はそちらを支点に体を持ち上げて、やっと落とし穴の上まで首を出すことができた。

「ラ、ランス様！？ どうしよう、ああ……」

「ランス様がおちこまれただ！」

「い、生きてるよ俺もランスも。だからちょっと協力してくれるとありがたいんですけどいや本当に」

やっと肘で体を支えるまで成功した良平が、混乱している彼らに声をかける。

「大丈夫ですか！？」

「ランスさんは……ほっ。良平さんの足に捕まっています。よかった

……」

「お、おう、大丈夫だ。そつとだ、そつと引き上げるんだぞ」

両腕に力を入れて歯を食いしばり、体を強く固定。ランスの捕まっている左足にめいっばい力を入れて、彼の体を持ち上げた。体が揺れぬようサバイバルナイフに引っかけた右腿が痛い、それを気にしている余裕などない。

ランスは良平よりも重いのだ。身長こそ良平の方があがるが、彼はどちらかと言うと細身であり、ランスのようないかにも戦士という風な屈強に見える筋肉の付き方がしていない。加えて、戦闘スタイルの差もある。速度で攪乱しながら攻撃を与える良平は基本的に軽装。しかし、正面から制圧する戦い方を得意とするランスは、当然被弾率も高くなる。ダメージを軽減してくれる鎧は当然分厚く強靱であり、その防御力に比例した重量を持っていた。つまり、鎧だけでも子供一人分くらいの重さがあるのだ。筋肉質な成人男性に追加して子供一人分。いくらレベルで強化されている良平とはいえ、決

して軽い重量ではない。土台が不安定ならばなおさらだ。

先にランスさえ引き上げられれば、あとは良平一人ならどうにでもなる。床に転がりながら多少荒くなつた息を吐き、思わぬ精神攻撃に脱力。

荒い息を幾ばくか整えて、シイルとロッキーに仰がれながらラン

ス。

「ふう。しかし、なんて危ない罠を起きやがるんだ」

「何が危ない罠だバーカ！　むちゃくちゃ人災だろうが！」

「なんだとー！」

激昂した良平がランスを罵り、それにランスがまた怒る。おろおろと戸惑う外野三人と、その輪から離れてため息するカオル。指はこめかみに添えられている。

「なんでボタン押したし！　何でボタン押したし！？」

「うるさいわ馬鹿たれがー！　あんなもんおいてあつたら誰でも押すわ！　どこからどう見ても狡猾なトラップだろうが！」

「何が狡猾だよ！　どう考えても悪ふざけの産物だ！　ジョーク商品と同レベルのものにあつさり引つかかりやがつて！」

あわやとつくみあいのかんかにまで発展するか、その場の誰もがそう思った時、再び雑音と共に流れるスピーカーの音。

『ブフツ！』

第一声は笑い声だった。罵りあいを一時中断した二人は、スピーカーへと注目した。それで何があるわけでもないが、なんとなく睨まずにはいられない。

「貴様のせいで死にかけたではないかー！」

『ゴフツ……ツ……ブフフツ！　ツ……グフ、ツツフツ……！』

「笑うなー！」

ランスの絶叫が声を牽制しようとするが、それは彼の笑いを煽る意味しか無かった。耳障りな雑音が響き続ける。

『っ……ひゅー、ひゅー……。っふう、失敬。笑いすぎてしまったようだね』

「うるさいわ、なんのつもりだ！」

『いや、なに。こんな馬鹿馬鹿しいトラップに引っかかった君たちを賞賛しようとかだね。うむ、実にいい物を見せて貰ったよ……ブブツ！』

ランスは怒りに顔を赤らめ、逆に良平は羞恥心で顔を染めており、手のひらで顔を隠していた。

何とコメントすればよいのやらと、グリーン隊には微妙な空気が流れていた。ズルキ・クラウン。ゼスを代表するようなクズ政治家ではあるが、この件に関してのみは彼が正しいのに異論を挟めない。『一発芸としては上等な部類だが、生憎と私が求めているのは血と悲鳴だね。あまりつまらない死に方をしないように、とアドバイスをする事にしたのだよ』

神経質そうな声で、しかし尊大に言い切る声。

『ああ、それと。そのトラップに引っかかったのは君たちが初めてだよ。おめでとうと言っておこうか、低脳の2級市民諸君』

ぶつり。放送が切れる。あとに残るのはなんとも言えない沈黙。

最初に破ったのは、良平だった。

「あいつが悪い！」

いきなり絶叫し出す良平に、みなぎよつとする。しかし、いち早く意図を理解した力オルがそれに続いた。

「ええ、なんて底意地の悪い人なんでしょうね。我々をこんな罠にハメるなんて」

「ええと……そうだす、嫌な奴だす！」

「は、はい！ とても危険な目にあわされちゃいましたね、ランス様！」

「えっと……そうなんですか。危ないですね」

要は責任転嫁である。それを理解した面々が次々と同意し、矛先を反らそうとした。もっとも、一名本気で信じていそうな者もいたが。

「うむ、俺様を罠にかけるなど許せん奴だ。絶対にぶっ殺して身ぐ

るみ剥いでやる」

先ほど言い合いをしていたのはどこへやら。怒りの矛先をズルキに向けて立ち上がるランス。

同時に先ほどまでの激情にとりあえずの折り合いをつけた良平も立ち上がった。正直、無造作にボタンを押した時はかなり本気でキレていたが、喉元過ぎた今ではそれも怒りすぎだったと思う部分もある。

「あ、ナイフ回収しないと」

まだ穴の中の側面に刺しっぱなしであった事を思い出し、中を覗く。ナイフは随分下の方に刺さっており、少し体を持ち出さなければ届きそうにない場所である。面倒な位置だな、と体を屈めて。

所で、この落とし穴は道の中心に切れ目があり、壁側のギミックによって開く形になっている。床に押し扉がある、と言えばイメージしやすいだろうか。それが閉じようとするとうなるだろうか。当然落とし穴の壁際ぎりぎりを通して持ち上がるだろう。通常時は閉じたまま、人が通れるくらいには強度があるのだ。厚い鉄の通路を押し上げるギミックアームは、さぞ馬力があるに違いない。

突き刺さったままのサバイバルナイフが、魔法の力で閉じる床を止めておけたのはほんの一瞬だった。けたたましく鋼が弾け飛ぶ。宙を舞うそれは、全長を半分ほどに減らしていた。くるくると回転しながら細かい破片を捲くそれを、スローモーションの世界の中、視線で追う良平。重々しい音を立てて、閉じる床。その上に叩きおられた時とは比べものにならないくらい軽い音を立てて落ちるサバイバルナイフだったもの。

むき出しの鋼に荒い紐を編むように巻いた、今では完全に良平の手の形に馴染んだそれ。それが内容のサバイバルナイフのなれの果てである事を認識し――

「キヤアアアアアア！」

「え！？ なに、なんですか！」

「なんか鶏を絞め殺したような悲鳴だったぞ！」

「あ……その、もしかして、良平さんですか？ 今の」

陸に揚げられた魚のように痙攣しながら、残骸を抱いて倒れる良平。一番最初に見つけたリズナが、おっかなびっくり近寄って背中をさすった。

「ええと、どうしたんですか？」

その場に座ったりリズナが、うずくまったままの男に耳を近づける。小さくぽつぽつとした言葉の一つ一つを真剣に聞いていた。

「愛用のナイフが壊れちゃったのがショックだったみたいです」

「その、そんなに高価なものだったんですか？ それじゃ済まないかもしれませんけど、弁償を……」

「おいシイル、なんで俺様の金を……」

「100GOLDだそうですよ」

「安っ！」

ランスのシイルに対する台詞は、リズナの発言によりそのまま突っ込みへと軌道修正。あまりにお粗末な価格に、ランスも反応せずにはいられない。日本円にして1万円程度のナイフ、価格で見れば最低レベルの品だ。

今回の損失、誰が悪かったかと問われればそんな人間はおらず、運がなかったとしか言いようがない。確かにきっかけはランスであるうが、壁にナイフを突き立てて、それがギミックで壊されたとなると、誰かが悪だと押しつける事も出来ないだろう。やり場がないからこそ余計ショックなのであるうが。

「ええい、ナイフなんぞ所詮消耗品だろうが！ いつまでもうじうじ言ってるな！」

「畜生、苦楽を共にした俺のナイフが……」

「こいつ、料理の時も思ったが意外とメンタル弱いな」

と落ち込み続ける良平を見下ろしながら半眼のランス。

「ほら、このままじゃ進めませんから。良平隊長、立って下さい」
見かねたのか、カオルがほぼ強制的に良平を立たせ、良平もそれに特別抵抗することはなかった。

身長では良平が大きく見下ろす形になるのだが、中身は真逆である。

「それはもう使えないんですから。ほら、ポイしちゃって下さい。ほーら、ポイ」

「うう……さよならリチャード……」

「なんだこれ……。おかんと子供じゃないか」

「そんなに大事にしてたんですね」

ランスも呆れる中、なぜか素直に感心するリズナだった。

「ランス隊長、私は良平隊長と一緒に前を見ておきますから。ランス隊長は背後を警戒していただけますか？」

「む、なんで俺様が後ろなんだ」

「畏の察知は、たぶん私が一番上手いですから。それに、ランス隊長に後ろを守っていただけていると、とても安心できるのですけれど」

「うーむ。まあ、そういう事なら受けてやらんでもない」

「皆さんはランス隊長が変なものを触らないように見ていて下さいね」

「なんでじゃー！」

悪戯っぽく笑うカオルにランスは怒鳴るが。

「カオルさんの言うとおりですよランス様」

「今度は死んじゃうかもしれないですよ。ランス様、おらもやめた方がいいと思うです」

「そうですよ、落ちちやうのは危ないです」

他のメンバーにも言われて、渋々と納得するのだった。

カオルにつれられるようにして道を歩き幾ばくか、良平はやつとある程度精神的ダメージを回復した。自分で稼いだ金で初めて買った品、それが実用の点から見たものだとは言え、失うのは流石に応

える。それと同時に、未だにそういう日本人的な感覚を失っていない。それと同時に関心した。十余年で培った常識、それは変えるのは簡単でも、無くすのは容易ならぬらしい。

今度はもっといいものを買おうと意思を固めながら、先行するカオルについて行く。ちなみに良平は道順とトラップに関しては、一切カオル任せ。

ゼス共同銀行のモンスターは、良平の予想通り弱かった。ランスや良平なら一撃で倒せるし、他のメンバーでもそれほど苦労はしていない。もっともスペック的に劣るロッキーですら、以前よりレベルが上がっているためか危なげない。多少面倒なのはたまに現れる警備メイトや警備ウォールくらいか。

「ゼスは……」

カオルがトラップの探索をしながら声をかけてくる。それは気落ちしている良平の気分を紛らわすためかもしれないし、または自分の気分転換のためかもしれない。しかし、切り出しには随分重々しい響きがあった。

「ゼスは果たして、この活動の末によくなるのでしょうか」

彼女の口調に弱気は感じられず、むしろ断固とした意思が宿っている。この問いは、レジスタンス活動の先行きの不安や、単純に今回の強盗活動に反対するという風でない事がありありと見えた。

カオルが問い、応えたいのはもっと大局的な活動。

「無理だな」

「ええ、そうでしょう。ですから……」

しかし、良平はその問いかけからあえて外れを行った。

「もっと過激に、それこそ権力者を皆殺しの上国家大混乱にするくらい勢いで行かなきゃ何も変わらないだろ」

カオルの手がぴたりと一瞬止まる。それを悟られぬようにするかのようにすぐに再開し、まるで何事もなかったかのように振る舞う。何も言わぬ彼女の背中、しかしそれは続きの言葉を求めている。

「実際、この国の上層部はもう手遅れだよ。今更僅かな良識ある者

が変えようとしたって無駄だ。権力に対する欲の強い人間は、それだけで結託が上手い。外敵がいなければずっと内輪で権力の奪い合いをするだろうけど、敵が来れば一瞬にして一致団結だ。そして、いくつかポストが欠けても、そこから自分の利権を崩されないために即座に埋められるだろう。良識派の協力者か、第三者が入り込む前にね」

状況はかなり極端な貴族制だと言える。抑圧に次ぐ抑圧。1級市民と2級市民、知識も意識も何もかもが違う。人間と、奴隷。

地球においても似たような状況の時代はあった。そして、今のゼスは2級市民にとってそれよりかなり悪い状況だ。魔法という戦闘技能と、魔力によって運用される防壁の数々。地位や金以外に両者を分ける圧倒的なファクター。1級市民の選民思想を拡大させ、2級市民の劣等感を増幅させる。

なによりも、政局はかなり安定してしまっている。つけいる隙が、政治にない。

（こんな話をして何になるんだ）

もう既に何もしないと決めている良平。ただやろうと言う者がいるからつきあっているだけだ。こんな思考を開帳した所で、なにも意味は無い。

しかし、一度滑り始めた口は止まらず、さらに考えを垂れ流させる。もしかしたら、これは得体の知れないカオルへの牽制なのかもしれないなかった。

「一度全て更地にするしかないんだ。今更融和なんか通用しない。プライドの高い1級市民と、怒りの積もり積もった2級市民、それが仲良くできると思うか？ 1級市民はこう思うはずだ、薄汚い家畜が自分たちと同じように生活するなんて《おぞましい》とね。そして2級市民はこう思うだろう、今まで奪われた分を奪い返してやるう、と。それが悪い事だなんて話は通用しない。だって、1級市民達はもつと《悪い事》をしてきたんだ。悪党を倒す、それに罪悪感を覚える人間がどれほどいるかな？ 俺が、もし俺がそんな立場

だつたら、ざまあみると、当然の報いだと言わない自信が無いよ」

二人の間に作られる沈黙。背後からは和気藹々とした話し声が聞こえる。二人の話など聞こえていないのだろう、それが良かったとも言えるし、悪かったとも言える。

良平は力オルを見る。彼女の背中から、感情も思考も読み取る事はできない。彼にその手のスキルが欠けており、そして彼女は自分を偽るのが得意だから。そういう、いつもの構図。もしかしたら、二人ともあえてそう振舞っているのかも知れない図式。

こうすれば、こうしなければ、お互い本音を明かせないのかも知れない。

「……それでも、多くの者が協力して内部から少しずつ互いを歩み寄らせれば、大丈夫なのではないですか？ そんなに多くの人が血を流す方法でなくとも、力を合わせて国を変えていくのが無理だと思えません」

「仮にさ、それが成功しようとしたとしてだ」

肩を疎める。とてもつまらない質問だった。

「その《多くの協力者》の中に、自分が次の権力者になりたいと思う人間がどれほどいるだろうな？」

びくり、と震える力オルの矮躯。良平は無視して続けた。

「とても分かりやすい話だ。自分が、自分たちが主流派になれなかった、だからそれを崩してくれそうな奴に力を貸して、次の主流派を狙う。それで成り立った政権はどんなもんだろうな。きつとしがらみで雁字搦めだ。頭が入れ替わって多少さっぱりするだろう、けど以前と《だいたい同じ国》が出来上がらないと本当に言える？」

ゼスは腐っている、その事実を軽視するつもりにはなれない。寄ってくる人間は、なにもそういう自覚ある相手だけではないのだ。国を変えた者に与したことで偉そうに振舞う者、良いことをしたつもりで異常を振りまく者。そういう奴らでも《使ってしまった》以上は重宝せざるをえないのだ。

そつという者に気を遣いつつ国力が回復するまでと耐えても、終わ

る頃には確たる地位を固めているだろう。かくして、また大量のレジスタンスやテロリストが発生する国になる。

「なら、良平隊長はどうすれば良くなると思います？」

憤りも気落ちも感じない声。しかし、いつもより平坦にすぎると思っているのは良平の気のせいだろうか。

「手っ取り早いのはリーザスあたりに併呑される事じゃないか？」

「それは……」

「勘違いするなよ」

明らかに非難の混ざった声を上げるカオルを制す。

「俺はこの国の人間じゃないんだ。ゼスを良くしようなんて欠片も思っただけで、命をかけて魔法使いとそうじゃない者の融和を成そうと思っただけ。誘われて都合が良かった、それだけでレジスタンスにいる人間だよ。そりゃ2級市民を何とかしたいとは思っただけ、それはゼスである必要が無い。リーザスに飲み込まれたとしても、そこはきつと遠からず両者の平等な場所になるだろうね」

それが成されるまでに、抑圧に対する怒りの感情をリーザスから魔法使いとそうでないものにすげ替えられ、多少の血が流れるであろうが。2級市民にとっては、かなり良い待遇への変化を感じられるだろう。1級市民は、まあ辛い時代になるであろうが、今まで他者の上で幸福を得ていたのだ、哀れですで済ませる他ない。

良平の言葉を聞いているのかいないのか、黙々と歩くカオル。やはり、何を考えているのかは分からない。しかし、ふと背中から感じる雰囲気が柔らくなつた気がした。

「ええ、そうかもしれないね。驚きました、良平隊長は意外と知識があるんですね」

「……ねえ、さっきも似たような事言っただけだし、何か俺に恨みでもあるの？」

「そうですね、酔った良平隊長とランス隊長の後始末をさせられたくらいでしょうか」

「恨みありましたね。ごめんなさい」

記憶の中ではどこもかしこも散らかしたままであったのに、翌日には全て片付けられていたのはそういう事だったのだと納得。同時に毒舌を甘んじて受け入れる事に決めた。

「けど、それほど考えてるならウルザ様に言ってみれば宜しいのに」
「嫌だよ。俺は責任なんて負いたくないんだ。身軽でふらふらとする、それが俺の望みなんだよ」

「それはもったいないですね」

忍び笑いをしながら、横面に良平を覗くカオル。まるで年上に諷められているようで、内心に苦々しいものが流れてくる。

良平がこの世界に来て、どうもこういう落ち着きがある理性的な相手に頭が上がらない。さらに増す苦手意識を誤魔化すように頭をかいた。しかし、それでも逃げられている気がせず敵とトラップに集中する。

ゼス共同銀行の金庫への道のりは、まだ長い。

ゼス共同銀行内を歩き回って、随分と時間が経った。少なくとも良平の主観では、銀行内の探索にだれてるく程度には時間が経っている。そう思う理由の一つに、難易度がとても低いというのもあるだろう。

現在良平達のいる場所は地下であり、当然銀行の本体は地上にある。地下構造に力を入れているからと言って、それで本業に支障が出るような作り方を出来るはずがなく。しばらく進んでしまうと、建物自体を痛めかねない罫の類いはほぼ完全になくなり、弱いモンスターが散発的に襲ってくる程度になってしまった。

こうなってしまうと誰もの気が抜けてしまい、カオルですら罫の警戒を最低限にできてしまっている。もっとも施設内を警戒していたであろう良平ですら、かなり気が抜けてしまっているのだ。

「良平さん。その、ちょっと聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

と、声をかけたのはシルだ。彼女も未だに警戒が強めなのは、一番最初にモンスターに驚かされたからか、それとも元々使命感が強い性格だからか。

「んー、答えられる事なら何でもどうぞ。」

一応注意だけは反らさぬように歩きながら応える。

「あ……その、良平さんは最初から魔法使いに対して特別どうこう思ってたなかったみたいなんですけど……ええと、それは何ですか？」

「え？ ごめん、意味が分からない」

「ええと、うーん？ ですから、その、2級市民なのに……」

「あーあーあー、はいはい。そういう事ね」

なるほど、彼女は勘違いをしているのだ。納得し、良平は答えた。それが彼女が求める回答でない事に申し訳なさそうに。

「俺はJAPAN出身であってゼスの出身じゃないからね。ほら、目と髪見てよ」

「瞳まで黒かったんですね……。すみません、変なこと聞いちゃって」

しょんぼりと肩を落とすシル。髪の色が黒い人は大陸でもちよくちよく居るようだが、瞳まで黒だとJAPANまで行かなければまずお目にかかれない。誰かに問われた時は、そう答えれば納得してもらえる事を経験で知っていた。

（けど、俺も随分嘘が上手くなったな）

なんの自慢にもならない特技に、思わずかぶりを振る。本当ならば異世界の日本出身だと言えてしまえばいいのだが、告白した所で混乱の種にしかない話、穏便に済むならばその方がいいと言う事は分かっているつもりだ。

「やっぱリレジスタンスの人とは相性が悪い？」

「……はい。その、私も元ゼスの1級市民で、それなりの家柄でしたから。だから、あの人達の言い分も分かります。けど、やっぱりこのままじゃいけないと思って、でもどうすればいいか分からないくて」

（ま、これが普通……と言うかまだましな部類だよな）

シルやリズナなど、魔法使いが参入してからもっとも彼女らとつきあっている2級市民は当然ロッキーだ。しかし、その彼ですらシル達をほぼ完全に無視している。

それが悪い、と良平には言えなかった。むしろよく襲いかなかったと賞賛しているくらいだ。その彼ですら、ランスのブレーキがなかったらどうなっていたかは分からない。

「悪いけど、俺にはどうすればいいかなんて分からないよ。そもそも魔法使いなんてこっちに来て初めて見たくらいだし。しかも魔法使いとか命の恩人だし」

「え？ そうなんですか？」

「うん、自由都市だね。トラップにひっかってダンジョン内で何

日も迷つてた所を魔法使いの人に助けられた。だから、まあレジスタンスの連中には悪いけど魔法使いを単品で見た場合には結構好意的なんだよ俺」

「はえー、そうだったんですか」

あの頃は本気で死ぬかと思った、としみじみ呟く。それをシイルは意外そうに見ていた。

「むしろシイルがレジスタンスに残ってる方が意外だな。君はゼスの行く末なんて割とどうでも良いと考えてると思つてたよ。俺みたいに」

「う……その。言っちゃっていいのかなあ。正直、私もおうちに帰りたかったです。でも……」

「ランスが続けるって言つた？」

「はい」

しょんぼりと顔を伏せるシイル、しかしその頬が僅かに紅潮している事を本人は気付いていただろうか。

普段から女が全て、俺にとって女は平等と言つてはばからないランス。しかし彼女に取っても、そしてランスにとっても。互いは特別なのだろう。とても人間らしい、そして微笑ましい関係だ。

「やっぱりお世話になるなら、仲良くしようと思つたけど全然上手くいかないです。だから、レジスタンスに参加して、良いこととして認めて貰おうって思つたんですけど」

「ふうん……良い事、ね」

赤い絨毯を踏みしめて、襲いかかってくるモンスターに備える。来なければいい。そう思いながら。

たまに姿を見せる日本の常識に囚われた自分。消えてしまえ、そう思う良平と失つてはいけないと思う良平、両方存在していた。

「ねえ、レジスタンスの活動ってさ、本当にいい事かな」

「え？ いい事、だと思いますけど。その、良平さんは違うんですか」

「さあ、どうかな。俺はどっちだと思つてるんだろう」

悪い事、ではない。少なくとも完全な悪ではないと思う。それは、良平の偽らざる本心だ。

「俺たちは正義だと思う？ 正しいと、思う？」

「え？ え？ …… いろんな人が感謝してくれていますし、正しいと、思います…… たぶん。それに、国の外を回つてくると、どれだけゼスが歪かはとも理解できましたし」

質問の意図がいまいち分からなかったのだろう、自信なさげにシル。それもそうだ、質問した良平がどんな意図でした質問か、分かっている。問うことにも答える事にも、理由を求めているのだから。

この感覚。彼女達がおかしいのではない。間違いなく良平がおかしいのだ。

「ま、確かに間違っちゃいないだろうけどさ。それでも正しくもないと、俺は思ってる」

「何でか聞いてもいいですか」

「だってさ、自分が正しい、これは正義の行いであるなんて思ってたなら、その為に何でも出来ちゃうじゃん。自分を正当化して肯定した人間の行動は怖いよ。大事の前の小事とか考えてさ、人を害する事も平然とし出すよ」

それをやったのが、アイスフレームを解雇されて盗賊に身を費やした者達だ。かれらとて、好んで犯罪をやったわけではない。ただ、そうしなければ明日の活動に支障が出てしまうからだ。そう、未来の輝かしいゼスの活動に。だから、弱い人間から物資を徴発するのも仕方が無かった。そういう事にしたのだ。

「それに、俺たちがやってるのはどう理由を付けたって暴力行為だからな。確かに多くの人間は救われてるけど、それは《泣く》人間を入れ替えてるだけだし」

—— 咄嗟に、本当に咄嗟に口から滑りそうだった言葉を堪えて、適当な言葉を吐く。それは言って理解される思考ではない、そう念じて堪えた。

人を救うために人を害する、本末転倒のような連鎖。しかし、そうしなければ救えないであろう事も事実。そしてまた繰り返す。連鎖。

どこの誰だっただろうか、山口良平が人生で初めて人を殺したのは。思い出して気分のいい思い出ではない。ただ、それは自分にとっても思い出来事だったとは回想できる。今でも殺人に慣れはしても容易くはない。人の死とはそれほど重く、そしてその重圧こそが人を自律させるもの。

正義とは恐ろしい。人殺しという罪に対する自律を、容易く崩壊させてしまうのだ。レジスタンスの正義は、人を救いもするが狂わせもする正義だ。

その正義に、良平は正しさを感じられない。ただ主張があるだけで、それがゼスの主義と食い違っているだけに思えてしまう。唱える崇高な何かの後ろで、血なまぐさい何かが山を作っている。

日本人的感觉が原因なのか、そうでないのか、判断できない。ただ、意識に大きな差がある。レジスタンスに身を任せられない理由の一つ。

「そうですね。けどそれは、ちょっと酷い言い方かも知れませんが自業自得では？」

「人から奪った財で豪遊してるんだから、まあ自業自得は間違いじゃないと俺も思うよ。けど、それって俺たちにも言えると思わないか」

何を、という風で首をかしげるシル。

「視点を変えちゃえばどっちの違いにも大差がでてこないって事。結果は違っても過程は似通っちゃってる感じ？」

「うーん、よく分かりません。なんか難しい話ですね」

「あはは、正直俺も良く分かってないよ」
笑って誤魔化し、それでいいと思っておく。少し喋りすぎてしまった。

ゼスの貴族は2級市民から金をむしり取り、それを自分の政治の

為に使う。レジスタンスは貴族から金をむしり取り、それを自分の理想国家建国の為に使う。貴族の方が《酷い》と言うだけで、両者にそれほどの違いが、果たしてあるだろうか。2級市民に感謝されるか、1級市民に感謝されるか。どちらが正しいのか。

——どちらか一方だけ、罪がないと言えるだろうか。

（どっちも悪党だ。貴族の方がより非道だっただけで、レジスタンスに悪がない訳じゃない。どっちも自分が正しいと思っているところまで似てるんだからな）

その差は不満を持つもの持たざる者の差。それ以上は当事者にしか感じられないだろう。ゼスという国に住み、僅かなりとも愛国心を持ってこそ、滑稽な戯曲から真剣な革命へと変わる。

部外者である良平に、とやかく言う権利はなかった。

「まあどっちにしても、シイルはこのまま家に帰る事はできないけどね」

「えー！？ な、何ですか？」

びくり、と怯えるように体を震わせるシイル。にやり、と良平は意地の悪い笑顔をわざと見せた。

「俺たちはレジスタンスだ。んで、今の政府は特別混乱するでもなく機能してる。さて、政治犯な俺たちの手配所はどうなっているでしょうか？」

「あー！」

悲鳴を上げるシイル。いたずらに成功した良平がくくっ、と含み笑い。

「おい、どうしたシイル。何か見つけたのか」

「あうあうあう、ランス様大変です。私たちきつとこの国で手配されちゃってます！」

「えっ、そうなんですか？」

「今更何を言ってるんだ、お前は」

シイル同様驚いているリズナに、当然だと言わんばかりのランス。「ランス様気付いてたんですか！？」

「知っているわ馬鹿たれ。それに、そんなもんゼスから出ちまえば関係ないだろうが」

「えー……それでもちゃんとしたお店なんかに入れなくなっちゃいますよお」

「そんなもん無理矢理入ってしまえばいいのだ、がはははは！」

あくまで些末な出来事であると笑い飛ばすランス。それが彼の最大の魅力なのだろう。何があっても、どんな状況でも悲観せず自信満々。だからかもしれない、結果的になんとかなってしまうのが多いのは。そして、なんとなく憎めない。肩入れをしたくなる。その先を、見てみたくなる。

「うつつ、お父さんとお母さんを一目見ようと思ったのに……」

「安心しろシイル。今頃は元気なお前の写真を見てるだろうしな。がははは！」

「それって指名手配されてじゃないですかー。しくしく」

さめざめと泣くシイルをからかいながらランスが笑う。それは、以前までのアイスフレームにはなかった雰囲気だ。彼が、ランスが来てから少しずつ背後からじわじわと迫るような悲壮感が収まっていった。

良平は、自分はアイスフレームにそれほど長く止まっていはいないだろうと思っている。ウルザ達には済まないと思っているが、良平にも目的はあるのだ。あと2、3年。それが限度だろう。

それまでにゼスが変わるなどとは全く思っていない。しかし、彼のおかげでもう少しでも明るくなれば。と、思いながら。

（俺は自分が思ってるよりも、ウルザやキムチ達が好きなのかもな）
組織がなくなり悲しい思いをするなら、できれば組織が存続したまま静かに暮らして欲しい。そして、幸せであれば良い。

その内にこんなおんきな事を言っている余裕などなくなってしまう事に、神ならぬ良平に気づけるはずがなかった。

「長い」

と言ったのは、果たして誰であっただろうか。もしかしたら良平かもしれないし、そうではないかもしれない。

誰がその言葉を発したかは、さして重要ではないだろう。もし、その言葉がたまたま届いた音が偶然そう聞こえただけであつても、誰も問題にしない筈だ。要は、その発言に完膚無きまでに同意できると言う事自体が問題であり、いい加減誰もが帰りたいたいと思っている。それが問題なのだ。

さつきから肩に担いだ剣先をふらふらと揺らし、いかにもいらだつていますという顔のランスも。ランスの様子を気にしながらも、疲弊をぬぐいきれない表情のシルとロッキーも。簡易具足を着物の上に貼り付けた重たい服に苦勞しているリズナも。索敵索罟自体は途切れさせていなくても明らかに集中力を欠いているカオルも。そして、戦闘でたまに襲いかかってくるモンスターを剣の錆にしている良平も、当然いい加減終われと思っている。

「帰るか」

「お帰り盆栽か帰り木持つてる？」

「……………持つてない」

このランスと良平のやりとりも、既に3度目である。

お帰り盆栽も帰り木も持つていないのは、単純にゼス共同銀行の中では妨害されると思ったからだ。しかし、試すだけなら無料であるのなら、持つてくるだけでも持つてくればよかったかもしれないと後悔。

ランスの我慢の限界が誓いのは誰が見ても明らかだ。しかし、ここで破壊活動しようとする誰か止めようとする人間はいないだろう。むしろ良平は、一緒に暴れるつもりでいた。

幾度目なのか、正面に現れるドア。良平は慣れた動作で足を持ち上げて、足の裏を叩きつけるようにドアをこじ開けた。既に罠など気にしていなく、また配慮もない。

開いた扉の向こう側は、ごんまりとした取り立てて特徴のない部屋。そして、正面にまた扉。良平は背中でランスの闘気が膨れあがるのを感じた。彼も似たようなものだ。わき上がる闘気を左右の剣に収束させて――

『おめでとう、2級市民諸君。君たちは見事たどり着いた。この先が金庫になっているよ』

「え……マジで？ ……マジでえ！？」

「ランス様、もう終わりですって！」

「がはははは！ よし、とっとと奪って帰るぞ！」

長い長い強盗の道中がやっと終わる。その喜び様と言ったら、まるで子供のように。同時に妙な達成感を全員が感じていた。カオルですら顔が和らいでいる。

皆が皆少なからずはしゃぎながら、正面扉に向かっていった。いきなり背後のドアが閉じた。

「あれ？ ランスさん、これ開きませんよ」

ドアノブをがちゃがちゃと捻ろうと四苦八苦しながリズナ。

良平に視線が集まる。一番先頭を歩いていて、当然正面金庫の方の扉に一番近かったから。ノブに手をかける。僅かに押しただけで、金属質な音と共にそれ以上動かなくなった。

「開かねえ……」

「え？ でも、そっちに金庫があるんですよね。じゃあどこから出ればいいんでしょう」

「だから閉じ込められたと言っとなるんだ！ ええい、こんなもんぶっ壊して出てやればいいわ！」

ランスの振り上げた剣に集まる闘気。大気まで渦巻いていると錯覚させるような、力強い渦潮。幾度も見たランスの必殺技、ランスアタックがドアを粉碎する直前だった、次の放送があったのは。

『ちなみに、どちらのドアでも破壊するのはおすすめしない。既に裏側にプチハニーの死骸を山ほど貼り付けてある。まあ、全身粉碎された死に様を晒したいのならば話は別だがね』

「……ぬあー！」

掲げられた剣から、しゅるしゅると情けなく闘気が散っていく。やり場のない力は、その辺の床にたたきつけられていた。

『さて。私から最後の試練を送ろう。見事クリアして金の山を掴んで見せたまえ。出来れば、の話だがね。くくくくっ！』

「っ……、悪趣味な……！」

歯ぎしりをしながら吐かれた悪態は、カオルのものだ。よほど腹に据えかねたのだろう、握り拳が赤らんでいる。

（いざとなったら《横》を抜くかな）

地下の構造を思い出しながら、そんな事を考える。良平の記憶が正しければ、左側の壁から5メートルも進めば別の部屋が合ったはずだ。

5メートル。本気で斬れば、全てコンクリートで埋まっていたものかなる距離。問題は、それを見越して壁にもプチハニーを仕込んでいないかという事なのだが。爆発の危険がある以上、最後の手段にしたい。

「うわっ、何か出てきただすよ！」

慌たらしい声に耳を澄ませれば、部屋のあちこちから空気漏れのような音。同時に地面から白い霧のようなものがせり上がる。

『ちなみに、その部屋に散布されているのは毒ガスだよ。ああ、安心してくれていい。そのガスは空気より重いから《疲れて倒れでも》しない限り吸って死ぬ事はないだろう』

「なぶり殺しかよ」

「あの、私はどうすれば……」

「とりあえず動かないで」

おたおたとしていたリズナに促す。空気より重いと言っても、所詮は気体。僅かな気流で容易く舞ってしまう。

『さあ、最後の試練だ。私の問いに見事正解して見せて見せたまえ。では、問いだ。《偉大で優秀なる長官達の集会モノベレッサ。開会の儀となる司法長官の言葉を唱えよ》』

「そんな！？　そんなの、長官がそれに連なる人しか知らないですよ！」

悲鳴のように、シイルの声。

「なんだ、そのモノなんかと言うのは。秘密の暗号とかか？」

「いいえ、特別機密にされている類いの話ではありません。ただ、知って意味のある事でもありませんから、それこそ開会の宣言を覚えてる人なんてまずいませんけど」

「なにー！　つまり分からんという事ではないか！」

背後の切羽詰まった声を背景に、良平は顎に手を当てていた。どうも、何かがひっかかる。

「良平隊長、やはり危険でも隊長に斬って貰うしか……」

「ああ、そうか。……それって《すべての魔法使いに平和と平等と自由を保障する。我らゼス長官は、モノベレッサにおいてそれを誓う》で合ってる？」

がちん。鋼の駆動音、そして現れる換気扇に、毒ガスが吸い込まれていく。

あまりに呆気なく開いた扉に誰もが啞然とする。スピーカー越しにすら、その気配を感じられた。

『な、なぜ2級市民が開会の議を知っている！？』

「良平隊長、知ってましたんですか？」

奇しくも、スピーカーの声とカオルの声が重なる。

「や、前に世話になった魔法使いの人が、なにが平和と平等と自由を保障するだクソ喰らえて言ってたの思い出した」

表現は大分乱暴だが、言っていた内容はおおむねその通りだ。もつとも、その恩人がクソ喰らえ発言を聞けば確実にそんな事言っていないと怒っただろうが。

「そんなもんなんでもいいわ！　がははは、よくやったぞ！　貴様ら行くぞー！　俺様をなめくさったズルキとやらをギタギタにしてやるのだー！」

勢いよく、それこそ今までの鬱憤を晴らすかのような勢いで突撃

するランスと手下その1その2、もといシルとロッキー。他のメンバーも遅れないようにして行く。

金庫だと思っていたそこは、恐ろしく豪華な部屋だった。と言うもただ豪華なのではなくひたすら悪趣味で、卑近な物言いをするならば成金と言えるような、そういう金の使い方が透けて見える。

その部屋の主、ズルキ・クラウンは部屋の奥で、顔だけを覗かせていた。手前には山のようなウォール・ガイ。そして治安部隊。

「うむ、それではしっかりと働らいてくれ。ああ、女性は必ず生け捕りにしてくれよ。男は殺して構わん」

「はい、お任せ下さい！ その犯罪者、今度こそ捕まえてやるわ！」

「ぬがー、またこいつらか！」

ランスは物量にものを言わせる戦法を苦手としている。それは、勘の良さにものを言わせた一撃一撃に必殺の威力を込める一対一、もしくは対少数向けの剣技であったり。必殺攻撃自体も少数の手練れを圧倒する類のものである。まあつまり、雑魚に山のように押し寄せられると対処が追い付かないのだ。

それを重々承知しているから、カオルも選択をしたのだが。

「ランス隊長、良平隊長！ 私はここを抜けてズルキを捕らえ……」

詰まるところ、誤算があったのだ。一つは、良平は才能に物を言わせた対多攻撃を得意としている点。そして、今回は負い目がないから手加減する必要が無く、治安隊に対しても《死んでもいい》威力で攻撃できる点。そして、それを良平以外誰も理解していなかった点だ。

「オラア！」

気合いのち烈波。そして生まれた疾風、いや、それはもう竜巻と呼んだ方がいいかもしれない。

とにかく、良平の太刀から生まれたそれは前方にある全てを巻き込んで、根こそぎ吹き飛ばしたのだ。当然逃げようとしていたズルキ・クラウンもろとも。

「わりい、聞いてなかったわ。何か言った？」

「……いえ、何も」

どこか黄昏れたカオルが投げやりに答える。良平は首をかしげながら、自分で作り出した惨状に向きかえた。

「で、だ。とりあえず……こいつら縛って金を奪うか」

つま先でズルキと治安隊をさしながら、良平。

「うむ、根こそぎ持つて行くぞ！」

「半分ですよ、ランス隊長」

「ちっ、つまらん。まあいい、俺が金を取る係を……いや、縛る係だ！」

倒れている治安隊の何人かを見繕ったランスは、彼女達を抱えて部屋を出て行く。

「シイル！ ロッキー！ 残りを縛っておけ」

「はい」

「わかっただす」

「では、お金を詰めるのは私たちですね」

「はい。がんばりましょう」

金を積めている途中、近くの部屋から嬌声が響いてくる。非常に目の毒ならぬ耳の毒なのだが、ランスの近くにいればこれくらいで動揺してはやってられない。誰一人気にすることなく作業を行った。

当初予定していた金額を積み込み終わると、妙に血色のいいランスが戻ってくる。誰も突っ込むつもりはない。

「うむ、えがった。それで、こいつどうするんだ？ 殺すか？」

ランスが剣で刺したのは、ズルキ・クラウン。未だに意識は戻っていない。

「殺してはダメですよ」

「けど警察に渡してもすぐに出所しているんだろう。どうする事もできないではないか」

「つまりただ殺すんじゃないくて、そいつの周囲も巻き込ませて派閥

自体を弱体化しようぜって事だろ？」

と、良平は代弁した。なぜかカオルが『え？』という顔をしているが。

「む、つまりどうすると言うのだ」

「んなもん素っ裸にひん向いて『包茎でごめんなさい』ってプラカード下げさせて、ついでにどっか人通りの多そうな所にぶら下げとけばいいんじゃないか？ あと不正の証拠書類なんかは確保済みだから、そのコピーとってばらまいとくとか」

こうすれば派手に周囲も巻き込んでくれるだろう、そう思い提案する。なぜかカオルが『え！？』という顔をしていたが。

「がははは！　なんだ、面白いではないか！　よし、それにしよう」「いえ、ちよつと待って下さい」

頭痛とやりばのない感情を抑えるように、こめかみを揉むカオル。いつもの彼女を知っている人間からすれば、非常に珍しい姿だ。

「その、このまま置いておき征伐のミトに引き渡すとか……」

「ははは、何言ってるの。いるかどうか分からない人間あてになる訳ないでしょ」

「うむ、善はいそげだ。よしロツキー、こいつを素っ裸にひん向いてやれ。ついでに金目の物も全部奪え」

「了解だす！　やってやるだすよー！」

魔法使いに一泡吹かす事が出来るためか、ロツキーはとてもノリ気で作業をする。良平はズルキを運ぶ袋を持ってきて、シルは証拠書類のコピー。リズナは1級市民が多く通る場所をピックアップしている。

あれよあれよという内に決まっていくな方針。それを、カオルは――本当に珍しい事に――ただ呆然と見つめていた。

余談だが、ズルキはきつちりと社会的にとどめを刺された。



ゼス1級市民だけが住む事を許されている住宅街、その一角を一人の女が走っていた。

別段その通りを誰も使用していないと言うわけではない。ただ誰も走り去る女を気にしない——気付かないのだ。

姿や音、気配に至るまで陽炎のように曖昧で不確定。そこにいない、居たとしてもどうでもいい人間。そんな擬態。

建物と建物の間にある僅かな空白、誰も気にしないようなじつとりとした裏路地、そこに身を滑らせた。入ってすぐ近くに人が居ないことを確認すると、壁に足をひっかけて跳躍。常人が見たら目を疑うような脚力を持って、一気に屋根の上まで駆け上がった。

下よりやや強い風を浴びながら、なんとなしに太陽を見た。まだ登りかけの太陽は光量が少なく、眼球の裏側まで突き刺さるほどではない。朝と夜の間にある、心地よい空間。

「うむ、カクさんも到着したようだな」

不意にかかる声。それは重く無骨でありながら、どこまでも深い優しさを感じるもの。その声を聞いたカオルは、自覚なしに微笑んでいた。

「はい、ガンジー様遅れて申し訳ございません」

「構わんよ。アイスフレームの任務を終えてから来て貰ったのだからな、むしろこちらが感謝をせねばならん」

「そんな事ございませんわ」

やんわりと断りながらカオル。ガンジー流のねぎらいの言葉に、彼女は自然と顔を赤らめていた。

カオルへの挨拶を終えたガンジーは、その後に視線を一点に向けた。そちらはゼスでも1、2を争う大きさの広場がある。

広場の西端部分はちよつとした舞台風になっており、そのポール

の一本に不自然な膨らみの布が縛り付けられてあつた。その中身こそが、現金融長官の――もうすぐ元になるであろう――ズルキ・クラウンだ。8時を僅かに過ぎた頃、丁度通勤ラッシュで人通りがもつとも多くなるであろう時間帯に布が外れる手はずになっている。それと同時に、ズルキ・クラウンの不正と罪状を簡単に認めた用紙が合計数千枚同時に舞い散るようにも。

そこまで派手なことをしてしまえばもうごまかしはきかないだろうという判断だった。そして、カオルは万が一予定通りに行かなかった場合に備える係を志願して、いまここに居る。不正書類のオリジナルも提出する必要があるのだが、それはウルザに任せておけば間違いないとカオルは判断した。

「しかし……汚いと言つかえげつないと言つか。よくこんな事を思い浮かびますね」

征伐のミトの側近、スケさんことウイチタ・スケートがぼやく。

「そうかもしれないな。しかし、有効な手だ。誤魔化しようがない上に大事になれば、判決まで迅速にせねばならん。クラウンの一派はさぞや慌てることだろうな」

「ガンジー様、千鶴子様には」

「うむ、伝達済みだ。彼女ならば私より遙かに上手くやってくれるだろう。これで、あ奴らの力を少なからず殺げるはずだ」

ガンジーの横顔に喜びが浮かんでいるのは、恐らく間違いではない。国を巣くう悪党どもは、どれほど誅してもなんらダメージを負っていないかった。それが、今回の件で少ないとしても痛手を負わせてやれるのだ。表情は歯がゆさの裏返しである事を、誰よりもガンジーの近くにいたカオルは知っている。

「それで、この件を発案した……」

「レッド隊の隊長、山口良平さんですね。もつとも、隊長と言っても隊員は一人もいませんけど」

「そうだったな。なんでも、他にもなかなか面白い事を考えていたそうではないか」

「面白い事って……《これ》みたいな事ですか？ 正直参考になるとは思えないのですが」

「確かに似たような話であれば、我々には使えないのだがな」

苦笑するガンジー。言い様こそあれであったが、ウィチタの言葉も間違いではない。

征伐のミトは、正義であり続けなければならない。そこに後ろ暗いものがあつてはならないのだ。なぜならば、征伐のミトの正体がガンジーであるのだから。

もしも。万が一。正体が暴かれた時の事を考えると、決して人から後ろ指を指されるような活動はできない。

「そうではなくて、良平さんの思想というか、社会観のような話ですよ」

そして、カオルは語り始める。直接語り合つた事だけではなく、他の人と話した時に漏れたものも含めて。

全てを語り終えた時、ウィチタの顔は歪められていた。ガンジーもウィチタほどではないが、眉間に力が入っている。

「悲観的な予想だな」

「はい」

「しかし、いくつかは確実に、実際に起こるであろうな」

「——はい」

例えば、王権篡奪を成功した場合の未来図。欲深い者たちが周囲から食つて潰す、それは彼が予想したほど酷い物になるだろうか。

答えはいいえだとカオルは思っている。良平は、ウルザの能力を低く見積もりすぎているから。

では何も抵抗がないかと言えば、やはり欲に目が眩んだものの妨害はあるだろう。それこそ現国王ラグナロックアーク・スーパー・ガンジーほどではないにしても。

1級市民と2級市民の確執については、予想より悲惨になる可能性すらある。

「その、山口良平だったか？ というJAPAN人はなぜ自分から

動こうとしない。アイスフレームにそんな動きがあったとは聞いていないぞ」

「そもそも本人がレジスタンス活動をしているのも、本人曰く偶然で、気が向いたからですし。それに、革命はおろか、人を従えるのすら嫌っている様子で」

「つまり腰抜けと言う事なのか？」

「それとはちよつと違うと思いますよ。《やらない》事に《決めた》という印象を受けましたね。責任を負わない、その代わりに責任を押しつけないと言うか、自由奔放になろうとしていると言うか」

「ゼスの緊急時なんだ、それこそ強制的にでも立たせて……」

ウィチタに言葉を止めさせたのは、ガンジーの大きな掌だった。

「確かに魔人の動きも怪しい今、ゼス滅亡の際と言ってもいいであろう。しかし、だからと無理矢理立たせるのでは意味が無い」

「は、はい。申し訳ありません、ガンジー様……」

「かまわん。それに、真に雄志たる者であれば、遠からず立ち上がる。それを待てば良い」

項垂れる側近を励まし、うむと頷く。次にカオルを見た。

「だが、その先見の目を浪費するのが惜しいのもまた事実。カオルよ、彼が立ち上がるまではお前が彼を立てるのだ。前に出さず、さりげなく意見を聞き出して、それをウルザに伝えよ」

「承知しました、ガンジー様」

「それとだ、その者が随分強いのは知っているが、今の年齢を知っているか？」

「はい、確か……15、16才だったかと」

「そうか」

重く重く、頷くガンジー。それが何を意味しているか、カオルは知っていた。

視線がつり下げられているズルキ・クラウンに戻る。今考えている事よりも、優先することがあると思い出すように。

しかし、ガンジーの口からはもう一度だけ呟かれていた。

「まだ16才なのだな……」

怒りとは、コップに水を注ぐのに似ている。

ガラスの限界までなみなみと注がれた水、それは誰もが見たことがあるだろう。少しでも動かしたら零れてしまいそうな、ガラスと水面との境界が曖昧になる一点。しかし、それはまだ《限界》ではない。

水をさらに零してみよう。それで限界を超えたはずの水が、まだ耐える。表面張力によりぷくりと膨れあがった水面が、崩壊することを許してはくれない。

しかし、勘違いしてはいけない。この時点において水はまだあふれていないと言うだけで、コップという容量の限界はもうとっくに超えているのだ。何か刺激を与えて水を零させるか、或いはもう一つの限界を超えるまで水を注いでやるか。

それが破られた時、どうなってしまうだろうか。

水は元に戻らない。そして、一度限界を崩れさせてしまったならば。とどめようとした所でもう限界点は機能せず、ただガラスを伝い零れる水のなるがまま。

零れてしまった時点で、いや、限界を超えてしまった時点で、水とは――怒りとは、既に手遅れなのだ。

怒りが蓄積する場合、短期間で溜まる場合と長期間溜める場合がある。どちらがどう、という訳ではない。ただ単に、彼女の場合は後者であつたと言うだけの話だ。

最後の一押し、一滴は何だったのだろうか。それは部下が全く言う事を聞かない事かもしれないし、上司の部下が生意気だったからかもしれない。指導している部下達が馬鹿揃いな点もあるであろうし、上司自体が相変わらず何もしないくせに偉そうでいやみっただしい、一体どれが原因だろうか。

僅かも逡巡せずに、彼女はどうでもいいと結論づけてすぐにそれ

を忘れた。いや、忘れようと自覚するまでもなく決壊した水に押し流されてしまったただけだ。後に残るのは、荒れ果てた荒野と砕け散った忍耐力と言う名のグラス。

結局の所だ。事態は特別複雑でも、なんら不思議でもなく。

そして、周囲のモンスターが何事かと振り返る程度には異常事態で。

「やってられるかあああああ！」

早い話が、魔人ラ・サイゼルが切れた。それだけの話なのだ。



アイスフレーム本部から僅かに離れた森。多少暴れても影響がない程度には離れていて、訪ねてくるのが苦にならない程度には近い。そんな絶妙な距離に、良平は居た。

いつもの赤い服は丸めて木の根元に放り投げ、上半身肌で愛用の剣――鉄板を削りだしたかのような、少々反りがある薄金色の刃――を振っていた。全身から汗を垂れ流しながら、幾度も同じ軌道、同じ振り方を寸分の狂い無く繰り返す。

一太刀事に薄く輝くプレートブレードが走り、それに遅れて風を切る甲高い音が響く。いつも通りの光景、慣れた動作。そして、いつものように満足できない動き。

（と言っても、一生満足することはないだろうな）

特に感情も込めず、良平はそう断じた。悔しさを感じるが、それを次の糧にするべく胸の奥に秘めた。

この鍛錬を始めたのはどれほどからだろうか。少なくとも、カスラムに居た頃には既に始めていた記憶がある。

良平が僅か一年足らずでここまで強くなれた理由。その理由の大半は巡り合わせがよかったとか、才能が飛び抜けていたとか、そういうものが大部分の要因に上がるだろう。そして、小さな方の理由、しかし彼の中の比重では決して少なくないそれ。自分の能力にあった戦術、体の運用方法、そして剣の振り方。それらを模索してきたからだ。

とりわけ、剣の鍛錬には力を入れている。剣をただ振っているだけでも、なんとなく上手く動いてはくれるのだが、それで訪れる限界はすぐそこだと理解できていたのだ。さらに言えば、一番伸びしろがあると思われる能力も、剣術であつたのだ。力が入らない訳がなかった。

才能とは、剣戦闘Lv3とは良平の想像を遙かに超えたものである。それに気付いたのは、素人がただ真剣に鍛錬しただけで自分にとって正解だと思える戦闘方法を確立出来た時だ。

それ以来、良平は鍛錬をサボることも適当にする事もなくなったのは、まあ余談だろう。

こうして独自の訓練をする必要があつたと言うのは、剣の師匠が見つからなかったからではない。単純に自分のステータスと戦法を照らし合わせて、合致するするものがなかったのだ。その剣術では自分の性能を十全に発揮できないと才能が叫んでなければ、もしかしたらオーソドックスな剣士の戦闘をしていたのだろうか。

良平のステータスは、随分と偏りのあるものだ。攻撃力と速度が飛び抜けて高く、続いて魔法抵抗力。戦士に必要であろう防御力は殆ど成長しない魔法攻撃力の次程度でしかない。さらに言うと、ステータスとして攻撃力が優れていると言っても、その種類にはいろいろとある。単純にパワーがあるタイプ、急所を突くのが上手いタイプ、攻撃が鋭く速度に優れたタイプ。良平は言うまでも無く三番目だ。

普通の戦士のように攻撃を《耐える》事が出来ないのならば、あとは速度で攪乱し回避していくしかない。マイノリティに分類され

るその能力振り分けは、良平に選択肢を作らせなかった。

連続で振られる剣。音は彼にまで届かない。ただ光刃の軌跡が、そこにあつた事を教えるだけだ。力で粉碎できなければ、早さで両断できる技法を手に入れなければならない。そうして訓練し、そうして手に入れた技。

「今日はアベルトもないからなあ……」

ぼやきながら、そしてまた剣を振る。

攻撃を受ける、という選択肢が存在しない以上、避けるかいなすかしなければいけないのだが、それは一人で出来る訓練ではない。

普段はアベルトに攻撃をしてもらい、それを足を動かさずにいなし続けるという訓練をしている。今のところこの訓練相手はアベルトにしか頼んでいない。

サーナキアは絶対に口うるさく言われると分かっていたし、ランスは問題外。女でもないのにつきあってくれるとは思えない。他のメンバーでは実力に差がありすぎて訓練にならず、今も訓練方法には苦勞している。

どういう構造になっているのか、良平は刀身をナツクルガード内に収納する。

初めてのダンジョンで偶然拾ったその剣。持ち主の意思に応じて伸び縮みするそれを、腰の固定具にある定位置に戻した。

続いて、雨ざらしのまま放置してある重量トレーニング器具に手を伸ばす。筋トレ、というのはこの世界においても全く無意味ではない。やはり鍛錬をすればただけ、ステータスが伸びるのだ。ただ、やはりその上昇率はレベルアップに比べれば雀の涙であり、やらない人間の方が多い。

事実、良平がこれをおこなっているのも鍛錬と言えば筋力トレーニングという、以前の常識からの惰性でしかない。それを表すかのように、何キロあるかも分からないバーベルを持ち上げる手はいかにも適当だ。そのあまりにも軽々しい動かし方は、もしかしたらクールダウンの意味も込めているかもしれない。それが効果的か

はともかくとして。

「良平隊長……良平隊長！」

ふと、森の中に絶叫が響く。その声の中には、哀願さえ聞いてとれた。それほどの悲壮感。

良平が訓練をしている森まで誰かが訪ねてくると言うのは、はっきり言ってしまうて珍しい。建前では彼が訓練している場所に踏み居るのは悪いから、と言われていているが、良平は来るほどの用事も無く面倒くさいからが本音だと思っている。

つまり、その面倒くさい場所に来るのを面倒くさがらない程度には緊急事態が起きているわけだ。

ふと、良平は空を見る。方向はアイスフレームのアジトがある方向だ。至って平和な、僅かに雲が点在する程度の空。火の手が上がっている訳でもなければ、土煙が立っているわけでもない。少なくとも、戦闘の気配はなかった。

「隊長、居ますか!？」

「いるよ、ここに」

いい加減自殺でもしかねない勢いの隊員に適当な返答をしながら、持ってきていたタオルで体を拭いた。

「何を暢気な！」

（何も知らないんだよ）

剣呑な罵声を浴びせる隊員に、内心突っ込む。

「アイスフレームが……アジトが大変なんです！」

「って言ってもなあ……」

再度、空を見る。やはり晴天と言って差し支えない天気。一点の曇りもない。

「俺が行って何か役に立つとは思えないんだが」

「だから何を暢気な事を言ってるんですか！」

（だったら訳を話せよ）

という感想は、隊員の剣幕に言葉にすることは躊躇われた。見るからに興奮しすぎて訳が分からなくなっている相手に、言葉が届く

とは思えない。

そうなってしまうえば、もう解決策は一つ。相手の言うとおりにする事だけだ。

「分かった分かった。それじゃ行こうか」

「はい、お願いしますよ本当に！」

半ば涙声になっている隊員に、上半身裸のままけだるそうに続いていった。

テンションが限界突破してる隊員に急かされながらアジトに戻ってみると、そこには妙な光景があった。

アジトの中は無人であった。そして、アジトの周囲でアイスフレームのメンバーが困ったように円陣を組んでいる。少なくとも、急いで良平を呼びつけるような事態には見えなかった。

その円陣の中には、当然のようにウルザとダニエルも居る。ウルザだけ、もしくはダニエルだけが本部塔から居ないのは珍しくもないのだが、両者が出ているというのは割と見ない光景だ。

（予想してもあんまり意味ないか）

聞けば済む話でしかない。まあ、何にしろ。今すぐ命の危機があるよな話でないのだけは理解できた。そして、その《何か》の周囲で話をしている程度の余裕がある事も。

周囲の人間に道を空けさせると、ウルザ達の前まで進み出る。

「うーっす。いつもニコニコ、あなたの山口良平です」

「お前なぞいらん」

引きつった笑いをするウルザの代わりに答えるダニエル。

「で、何があったの？」

「その……正直どう言ったらいいか……」

自力で仕切りなおしたのか、まだ顔の筋肉の制御が曖昧であるもののウルザの答え。どうも歯切れが悪い、と言うか歯切れが悪すぎ

る。彼女は優柔不断であるが、事実を述べるだけの事に巡廻はしない。

初めて見るウルザの反応。そこから話を予測しろと言うのも無理がある。まあいいやと頭を切り替えながら輪の外へ出て行く。

「ちよ、ちよつと良平さん、どこに行くんですか？」

「どこつて……そりや当然原因つばいものを切り払いに」

その時、引きつるような悲鳴を上げて《いなかった》のは誰であろうか。もしくは、だれか一人でもいただろうか。

気を抜いていた良平の背中に次々とのかかる人達。勢いに逆らう事ができず押し倒される。その中には、アイスフレームに来て始めてみるあせつた顔のダニエルと、同じく車椅子から飛び出して足に絡みついたウルザもいた。

「何するんだよ！」

「何をしようとしてるですか！」

「いやそれは俺の台詞でしょ!？」

切れた筈が切れ返されて、思わず驚愕に突っ込んだ良平。背中に乗る人を払い落としながら立ち上がり、土塗れになった体を払い落とす。まだ熱が引いていなかったため服を着ておらず、体の正面は悲惨な事になっている。

「いきなり突っ込もうとしないで下さいよ、本当に……」

「いやだって、突っ込んで切るのが俺の役割でしょ。突っ込みもせず切りもしないなら、何で俺が呼ばれたのよ」

「そんな認識なんですか!？ もつと決定権に関わるとか、話し合いに参加するとかしましょうよ！」

「そんなもん凄く面倒くさいから凄くお断りだ」

本当に嫌そうに断言する良平を見て、ウルザは僅かに冷や汗をたらした。本気で決定に関わるのを嫌がる以上に、鉄砲玉のような辻斬りのようなものが自分の役割だと信じて疑っていない。

戦闘能力は最上級、しかし性格にやや難有り。それが山口良平である。

「ふう。それですね、ここから逃げるにしても次の——一時的でも拠点を見つけないければなりません。それも迅速に。最悪一度散つてから再集結するとしても、まずは森を抜けなければなりませんから。めったな事はないと思いますけど、その護衛に呼ばせていただきます」

「なんかさ、ここを放棄する前提で話が進んでるように聞こえるんだけど、本気？」

「……はい。それしかないでしょう」

沈痛な面持ちで肯定するウルザに、良平は驚いた。決定ができない、というおよそ組織人として致命的な欠点を抱えた彼女が即断するほどの緊急事態。それが、この静かなアイスフレイムに到来していると言う事。

興味深げにアイスフレイムを見る。人が居ない、静寂で満たされている以外はいつもと差があると感じられない。

「ちなみに他の隊長ってどうなってるんだっけ？」

「グリーン隊とブルー隊は任務で、シルバー隊は哨戒中です。現在アイスフレイムに残っているのは、本部の人員と工作隊の一部、そして救護班のみになります。戦闘を行える人がいないので、良平隊長を呼んでいただいたんです」

（足りないな。それとも意図的に伏せてるのか？）

現在集まっているアイスフレイムのメンバーは、誰もが不安げだ。これは良平の自惚れでも何でも無く、山口良平という人物はアイスフレイムの切り札とされている。圧倒的な実力に、一対一から一対多まで幅広い戦法。そしてなにより、魔法使いを幾人も屠ってきている。実力が伴わなければ魔法使いであろうとあんまり関係ないのだが、ゼスではそう受け取られない。既に何人も——それも軽々と——魔法使いを倒してきた良平は、2級市民の中でかなり名声のある戦士だ。

詰まるところ、実態はともかくとても強いと思われるのだ。その《とても強い人》でもなんともしないと言うような驚異、そ

れがアイスフレームの中にいる。

そして、意図的に隠されているのであろう何かの情報。ぽつぽつとしている質問、その中にはぐらかしているような印象はない。言っても憚られる。そういう事なのだろうか。

むくりと、顔をもたげる好奇心。今すぐ《それ》へと駆け出した衝動を、今のところは押さえる。

「で、結局何があったんだよ」

ぎしり。空間がきしむような音は、良平の気のせいではない。その場に居る良平以外の全員が、一斉に顔を歪めていた。

「……………そ、そうだ！ 良平さん、今日は天気がいいですね」「誤魔化すにしたってもう少しましな方法はなかったんかい」

可哀想な子を見る目が、とぼけた事を行った少女に向けられる。ウルザは視線に耐えきれなくなったのか、手近にあったストールで頭を隠した。小さくうー、と唸る声だけが聞こえる。

ウルザの意外なちよいバ力系キャラを堪能しつつ、今度はダニエルを見る。彼は誤魔化しきれないと悟ったのか、ため息をつきながら答えた。

「魔人が来たのだ」

「ふーん」

（サイゼ尔みたいな奴が来たんだ）

と少し前を思い出しながら、ダニエルの言葉を待つ。なぜか彼は言葉を続けない。

魔人が来たと言うのと、アジトを放棄するという事の因果関係がいまいち掴めない良平。現時点で何もしていないのであれば、出て行くのを待ってればいい。少なくとも彼はそう思っている。

「で？」

「だから、魔人が来たのだ」

「…………え、そんだけ？」

聞き返してはみるものの、ダニエルは微動だにしない。反応すら返すつもりはないようだ。

良平は少しばかり考える。今度は戦える魔人が来たのではないかと。

以前にあった魔人、ラ・サイゼルははっきり言うと言った戦いを挑む気になれなかった。それは彼女が人間にしか見えなかったり、落ち込んでいたりともある理由は多々あるが。

しかし、今のアイスフリームには手付かずの魔人。戦いを挑むには申し分ない相手だ。命は確かに大事だ。しかし、強敵と戦いたいという欲、それは命を秤に載せるに値する出来事だ。とりわけ今は多数の敵に囲まれて感じる命の危機はあれど、たった一人の強敵には縁が無いのだ。ランスとは良い勝負が出来そうだとおもっているが、流石に仲間と命をかけた勝負をする気にはなれない。

（けど、まあ、な。少しくらいならいいかな）

すつと足を滑らせながら、移動する。とても下手な隠密術だった。当然そんなものでウルザ達を誤魔化せるわけがなく。

「良平さん、どちらに行かれるんですか？」

「いやちよつと、魔人の顔を拝みに」

ぶつと、複数の息を吹き出す音が聞こえる。しかし、良平は無視した。

「止めて下さい！ 相手は魔人なんですよ！」

「大丈夫だって。被害者が出てないって事は、奴さんこっちにや興味がないんだよ。顔を見るくらいなら何も言われやしないって。ちよつと、本当にちよつとだけ」

「ちよつともたくさんありませんから！」

良平のズボンを掴んで止めようとするが、筋力で圧倒する良平をその程度で止められるはずもなく。ずるずると車椅子ごと引きずられる形になる。

「え？ なに、ウルザも見たいの？ なんだよしかないなー、ほーら一緒に行こうか？」

「あ、ちよつと、待ってほ、本当に！ いやー！ ダニエルー、だにえるたすけてー！」

「おい、待て……っ！」

ちよつと幼児退行じみのウルザを運びながら、良平は進む。ちなみにその場にいる人員は予想外の行動に慌てふためき、ダニエルはその波に飲まれている。

（ちよつと悪ふざけしすぎだな）

やってから、大事になりすぎた事に後悔。ウルザなどちよつと涙目である。

「悪い悪い、冗談だよ。ちよつと……」

「うるっさいわねええええ！ あんたたちそんなに氷付けにされたいの！？」

その絶叫——少なくとも声は間違いなくかわいらしいもの——に一齐に静まりかえるアイスフレーム。中には涙を流して、絶望しているものまでいた。

なるほど、これが魔人なのだ。良平は確信して振り返り。

「見逃してやってれば調子に乗って……！」

サイゼルだった。

「なんだ、もう来たのか。早かったな」

「このっ……え？ あ、良平……ちよつと聞いてよもー！」

つい一瞬前までのヒステリックな顔は失せて、一転子供がぐずるような表情に。ぱたぱたと手を振っているのは、そこに叩く机がないためだろうか。

目尻に涙を溜めて歯を強くかみ合わせ、器用に「きい！」と呻きながら愚痴の独壇場。顔は美人系だが、中身は完全に子供っぽさを残すかわい系だ。残念な子だな、と失礼な感想を胸に隠しながら、良平。そして、その二人を見ながら呆然と佇むことしか出来ないウルザ以下アイスフレーム。

「でね！ いつもいつもいつも私が準備してるのに！」

「分かった分かった落ち着けウェイト。食事と酒用意してやるから、続きはその後でな。あ、ウルザ。こいつ俺の連れだから大丈夫だよ」「なによ連れって……それにいつでも来いって言ったくせに、ご飯

もお酒も用意してないし」

「アポなしでいつでも迎えられるようになってないっつの。それとも酒も飯もいらないか？」

「……いる」

「はいはい。まあ、と言うわけで、アイスフレームにはもう戻って大丈夫だよ」

ぐずぐずと鼻を鳴らし服の袖で涙を拭きながら答えてくる。その様子はどう見ても子供だ。

良平は背中をさすりながら——完全に子供にする仕草である——サイゼルと歩き出す。アイスフレームのメンバーは、誰一人として発言しない。

「え？ いや？ ちょ、待って？ どういう事？」

混乱の局地、情報を整理仕切れないのか、それとも目の前の光景が認められないのか。ウルザが頭を振りながら問う。

「いやだから、見たまんま俺の友人が訪ねてきただけだって」

「ちよつと行くの行かないのどっちなのよ！ って言うかなんであんな裸なのよ！」

「誰かさんが俺のトレーニング中に来たからだよ。ちよつと脱いでるくらい気にするな」

やや顔を赤らめたサイゼルが、頬を染めて顔を隠す。まるで少女のような——人間のようなくさ。理解の及ばない化け物には、とても見えない。

その、一見仲の良い男女がじゃれ合っている光景。他に解釈のし様がない事実には、さらにウルザの脳はオーバーヒートを起こした。「言われたらあんた臭い！ 汗臭いわ！ なんでそんな格好で来たの！」

「だからお前がアポなしで来たからだって、何遍言わすんだよ」

「もう……許してあげるから体洗って来なさいよ。臭いまま来たら承知しないからね！」

「へいへいありがとうございますよつと。俺の部屋そっちだから、

先に待っていてくれ」

「分かったわよ……何か面白いものあるかしら」

「わお、もう漁る気だよ」

普通に去って行く良平と魔人。そして、魔人は普通に分かれて普通に部屋に入っていた。どこまでも特別でなく、全てが予想どころか常識の範疇内。魔人っぽい所など、何もない。

「おーい、風呂沸いてるー？」

良平の問いに、誰も答えない。皆が口を大きく開けて、サイゼルが消えた方を見ていた。

「なあ、返事くらいしてくれよー」

「なんで、え、どういう、どうして、えええええ？」

意味不明な、恐らく本人すら理解していないであろう呻き。ウルザがそれを自覚してないだろうと言うのは、端から見ても分かる。

しばらく反応は望めないな。そう諦めた良平は、共用の浴場へと消えていった。

なお、風呂から出ても彼女らは驚愕したままであり、その後すぐに酒を飲み始めた良平には、いつ彼女達が復帰したのか分からなかった。

「良平さん、来ましたか」

「うん、まあ来たけど」

魔人襲来の翌日、ウルザに呼び出された良平。未だ体には酒気が残っていたが、大分回復している。

「あの魔人の方は……」

「ラ・サイゼルな。まだ寝てる」

ひたすら飲み食いを続けて管を巻き、最後には倒れるように眠りについたサイゼル。最後には良平のベッドを占拠したのだ、ストレスが溜まっていたと考えてもかなりフリーダムな性格である。

良平は普通に使っていたが、ウルザが随分落ち着きがないのに気がついていた。それだけ魔人の件がショックだったのであろう、こちらの世界に来て日が長いとは言えない良平には、理解できない感覚。「その……サイゼルさんは、大丈夫なんですか？ 人に、対して……」

「見たまんまだよ。変なちょっかいかけないで、普通にしてればちよっちプライド高くて気性が荒いだけの人間だ」

「でもランスさんは……」

「あれは本人が悪い。サイゼルだって驚いてたわ」

ちなみに、明け方に帰ってきたランスはサイゼルを見つけるなり飛びかかった。そして驚いたサイゼルに氷付けにされ、現在解凍作業中だ。

びくびくと怯えながら、目を反らしたままのウルザ。その反応が良平に対して、そして良平を通して何に怯えているかがとても良く分かる。そして、何を言いたいのかも。

ウルザの言葉を待つ気にはなれず、良平は自分の口から宣言した。「俺はサイゼルに出て行けなんて言うつもりはない。と言うか、あいつが望むだけここに居させようと思ってるよ。それが駄目なら、俺は出て行こうと思ってる」

持ち上がるウルザの表情、それは哀願。下唇を噛んで、悔しそうに。

「良平さんは、魔人の肩を持つのですか？」

「そうだ。俺は魔人の肩を持つ」

宣言される言葉に、悲しそうな瞳のウルザ。だからであろう、そこに罪悪などの色はない。

はつきり言ってしまったえば、それに苛立ったのだ。その、色眼鏡で人を断ってしまう瞳に。

「あんたが2級市民に肩入れするのと似たような理由で、俺はあいつの味方だよ。話して見て分かる奴だった、面白い奴だから仲良くなった。それが魔人かどうかなんて関係あるか。俺は、自分が好き

だと思った奴とつきあっていく。あんた達に対してだってそうだ。あんたらを好きになったから、こうして未だにレジスタンスなんてやってるんだ。誰にも何も言わせやしない」

ウルザの瞳が揺らぐ。強くショックを受けたと、潤んだ瞳が教えていた。良平が人間と魔人を等価に見ていた事に対してか、それとも自分が打倒すべき魔法使いの悪党と同じような視点を作っていたことに対してか。どちらが衝撃的だったのだろうか。

僅かな思惟。果たして何を考えているのだろうか。その答えは、彼女の普段より震える唇が伝えた。

「分かりました。ラ・サイゼルさんの部屋を、こちらで用意しておきます。その代わり、彼女の世話は良平さんが見て下さい」

「当然そのつもりだ。ありがとう」

内心でほっと息をつきながら、同時にウルザに深く感謝した。

差別的な意識を付いてウルザを煽ってみたものの、サイゼルが受け入れられる可能性は低いと思っていた。魔人が人間にとてどういう存在であるかは、昨日の彼女達の反応が示している。この結果は、運が良かったのだ。

「それと、一つ確認しなければならぬ部分があります。魔人ラ・サイゼルは、なぜ魔人領からこちらに来たのですか？」

「え？ ああそれは、嫌みな上司と無能な部下の板挟みに嫌気がさして逃げ来たって言うてたよ」

「……えー。なんだか淒く俗っぽいのですけれど」

「世の中そんなものだよ。お前らが淒くビビってる魔人も例外なく。俺が信用できないんなら、直接サイゼルに聞いてみれば良い。きつと1時間でも2時間でも、いくらでも愚痴ってくれるぜ」

「いえ、それは止めておきます」

口元を引きつらせるウルザ。魔人の脅威がなくとも、愚痴攻撃は避けたらしい。

「あと、アイスフレームは人員的に大丈夫なの？」

「現時点で辞めた人は、意外ですけれどごく少数ですね。昨日のい

かにも普通なサイゼルさんの姿で、かなり印象が違ってきているみたいで。このまま住んでしまっても、おそらくは組織運営に影響が出るほどは人が減らない筈です」

「俺が言うのもなんだけど、情報統制とかって大丈夫。魔人関係の話って大事なんですよ？」

「それは何かをする必要も無く大丈夫です。魔人がレジスタンスの拠点に住み着いたなど、誰も信じません。私だってそんな話を聞いたら与太話と判断するでしょうし」

随分と順調に進む話に、良平はウルザは最初からこの展開を可能性の一つに挙げていたのだと、今更気付く。

そんな様子などおくびにもださず、未だに小刻みに震える肩の彼女。きつと、恐怖に押されながらも考えたのだ。感謝してもしたりない。

直接声に出した所で、きつと彼女は認めないし喜ばない。だからそつと、内心だけで感謝の意を述べながら、静かに微笑えみ。

「どういう事じゃー！」

本部のドアが蹴破られる。見慣れた緑の剣士が、体当たりをするように入ってきた。着地と同時に周囲を見回し、その野獣のような眼光が良平を捕らえる。

「サイゼルちゃんに迫ったらいきなり氷付けにされたぞ、どういう事なのだ！」

「いや、そんな俺に言われても。様はお前が口説いて失敗したっただけの話だろ」

「失敗などしとらん！ ちょっと休憩しているだけだ！」

方で呼吸をしているランス。唇が青いのは、つい先ほどまで氷の中に居たからだろう。

ウルザはランスの勢いに押されて、しばし呆然としていて。そしてはっと意識を取り戻した。

「ランスさん、あんまり魔人を刺激するのは！」

「いいや、刺激などしとらん。ちょっと口説いていただけだ。それ

より、なんでサイゼルちゃんが貴様の部屋で寝ているのだ！」

「飲んだまま寝ただけだよ。別に何かあった訳じゃないし、本人が
いいて言うなら口出しするつもりはないさ」

「むむむ、本当だろうな」

「ああ本当本当」

肩をすくめて答える良平。しかし、ランスにはお気に召さなかった様子だ。

「ぬがー！　なんだその口説けないだろうけど的な態度は！」

「別にそんな事は思っていないぜ。ただ、口説けたら凄いなー、とは思ってるけど」

「やっぱり思っているのではないか！　ええい、ぶった切ってくれ
る！」

「おい、いいのか？　サイゼルは俺を訪ねて来たんだから、俺がい
なくなったらどっか行っちゃうだろうけど」

「なに！　ぬぐ……ぐぐぐぐ、ええい、いつか見てろよ！」

二人して本部を飛び出し、追いかけたこのように走り回りながら
言い合う。

少しだけ特別ななんでもない一日を、良平は楽しんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7909w/>

ランスシリーズ二次創作

2011年10月9日14時28分発行